

福井大学国際交流センター

自己点検・評価報告書

平成22～26年度

福井大学国際交流センター

平成27年12月

はじめに

福井大学国際交流センターは、平成25年4月に留学生センターを改組してスタートしました。平成25年度は、本学の第2期中期目標・中期計画（平成22年度～27年度）が後半に入り、学長・役員も新しくなりました。また平成24年度に文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」の採択を受けて、留学生の受け入れや本学学生の海外派遣に注力した期間でもあります。

前回、留学生センターでは平成20年2月に、平成15年度～18年度における組織・管理運営、教育活動、研究活動、学協会・社会活動および国際学術交流の全般にわたる外部評価を受けました。その後、平成19年度～21年度の活動に関して自己点検評価を行いました。福井大学における外部評価基準（平成18年3月30日評価委員会決定）においては、「外部評価は、学部等ごとにおおむね7年ごとに受けるものとする。」という定めがあります。従って、本来であれば平成26年度に外部評価を受けることが必要でしたが、留学生センターでの活動だけでなく新設した国際交流センターの改組後2年間のそれらも含めた平成19年度～26年度の組織・管理運営、教育活動、研究活動、学協会・社会活動及び国際学術交流の全般を対象として外部評価を実施することとしました。

前回の外部評価では、全学的観点からの国際戦略や国際交流活動における本センターの関わりと位置付けの再検討の必要性および将来計画に対する指摘をはじめとして、センター教員の教育研究の在り方と実績、留学プログラム、学生支援など、現在本学が抱える課題を予見した多数のご意見を頂きました。留学生センターから国際交流センターへの改組に伴い、前回の外部評価を活用させて頂いた事項が多数ありますが、一方で例えば施設に対する改善のご提言のように対応できていない点もあります。このような事項や課題に対して、今回の外部評価は再度見直す絶好の機会と考えています。

併せて、最近の国立大学を取り巻く社会状況の厳しさや地域のグローバル化を鑑み、国際交流センターにおいても、日々の諸活動に対して、適切なPDCAサイクルによる改善努力を継続することが必要であることは申すまでもありません。中でも、留学生の受け入れや本学学生の海外への送り出しなどに関する量的水準を確保しながら、国際交流センターの諸活動の質的水準の向上やアウトカムズ等からの評価・改善を目指すことが必要と考えています。

以上の観点から、外部評価委員各位には、本外部評価の趣旨をご理解いただき、現状と将来計画等について忌憚のないご意見を賜りたく宜しくお願い申し上げます。それらを基に、今後の在り方と進むべき方向を議論し、適切な改善と新たな取組を実行して行きます。

平成27年11月15日

国際交流センター長 岩井善郎

目 次

はじめに

I 国際交流センターの概要	1
1. 沿 革	1
1-1. はじめに	1
1-2. 留学生センター・国際交流センター関係の経緯	2
2. 現 況	3
2-1. 運営組織	3
2-2. 教員組織	4
2-3. 歴代センター長	5
2-4. 施 設	5
2-5. 財 務	8
3. 主な業務と活動	8
3-1. 国際交流センターにおける主な業務と活動	8
3-2. 全学的貢献	11
3-3. 広 報	12
II 教 育	16
1. 概 要	16
2. 国際交流センターが実施またはコーディネートする教育	17
2-1. 日本語研修コース	17
2-2. 短期留学プログラム	23
2-3. 日韓共同理工系学部留学生プログラム	41
2-4. 全学向け日本語コース	41
2-5. 日本語能力試験対策講座	49
3. 全学向けの教育	51
3-1. 共通教育	51
3-2. 学部専門教育	52
3-3. 大学院教育	52
3-4. 博士人材キャリア開発支援センターの日本語教育	53
3-5. さくらサイエンスプラン・初等日本語講座	53
3-6. 評価と課題	53
III 学生支援	54
1. 学生支援の考え方	54
2. 外国人留学生数の推移と現状	54
2-1. 正規・非正規留学生数の推移と現状	54
2-2. プロモーションとリクルート	59
(1) 正規留学生	59

(2) 非正規留学生	59
(3) 短期留学プログラム	61
2-3. 今後の課題	64
3. 留学生支援	65
3-1. 相談業務	65
3-2. 就職支援	69
3-3. 留学生支援会	71
4. 日本人学生の海外留学支援	72
4-1. 短期海外研修プログラム	72
4-2. 交換留学プログラム	79
4-3. その他の留学プログラム	83
5. 学術交流等協定	84
6. 留学生と日本人学生の学内交流活動	85
6-1. 定期交流活動	85
6-2. その他学内活動	86
6-3. 福井大学留学生会	86
6-4. 学内交流活動の課題	87
IV 研究	88
1. 国際交流センターとしての研究活動	88
1-1. 研究紀要の刊行	88
1-2. 助成金によるプロジェクト	88
1-3. 研究大会等開催	89
2. 各教員の研究活動	91
3. 課題	91
V 社会貢献	92
1. 社会貢献活動の概要とその考え方	92
2. 留学生諸活動を軸とした社会貢献活動	92
2-1. 地域社会との相互支援交流活動	92
2-2. 福井県等官界とのネットワークと交流活動	94
2-3. 商工会議所等産業界とのネットワークと交流活動	95
2-4. ネットワーク誌「こころねっと」の発行及び 地域・国際交流ネットワークの構築	96
2-5. 福井大学留学生同窓会活動	97
2-6. 福井県留学生交流推進協議会	99
2-7. 高志高校のSGH海外研修プログラム支援	99
2-8. 課題	100
3. 教員の社会貢献に関する活動	101
3-1. 地域在住外国人のための日本語ボランティアスタッフの育成	101
3-2. 教員免許状更新講習	101

3-3.	国際ゾンタ福井クラブ主催「留学生論文」審査	101
3-4.	経済産業省主催「教育機関における留学生支援関係者研修会」における講演	101
3-5.	ふくい市民国際交流協会主催「多文化共生セミナー」における講演	101
3-6.	家庭裁判所における家事調停活動	102
3-7.	学外者による来訪各種相談	102
3-8.	課題	103
資料1	前回外部評価（平成20年6月）以降の改善点	105
資料2	国際交流センター関連資料	123
資料3	教員個人データ	141

I. 国際交流センターの概要

1. 沿革

1-1. はじめに

平成25年4月に、既存の留学生センターを発展的に改組し、本学における教育と研究の国際交流に関する活動を一体的に実施し、本学の理念および長期目標に沿った総合的かつ効果的な国際交流事業の推進に寄与することを目的として、国際交流センターを設置した。

これまでの留学生センターは、外国人留学生に対し日本語等に関する教育を実施するとともに、外国人留学生及び海外留学を希望する本学学生に、修学上及び生活上の指導助言を一元的に行うことにより、本学における留学生教育の充実及び留学生交流の推進に寄与し、同時に、海外留学のための情報提供や地域社会における国際交流への貢献も担ってきた。平成23年度に学内で実施した学内委員会及び役員会によるセンターの評価において、外部評価委員からと同様の評価を受け、「国際交流活動をより積極的・機動的に推進するため、全学を上げて有機的・総合的に国際交流を推進する新たな組織の在り方」を検討した結果を踏まえての国際交流センターへ発展的改組となっている。

センター長は学内規定により、学長が、副学長又は教授等のうちから選考することとなり、現在は研究・国際担当の理事・副学長をセンター長に、教育・学生担当理事・副学長を副センター長に当て、センター専任教員と共に、センターが大学のグローバル化及び地域のグローバル化の牽引を担うよう備えている。

また、国際交流センターに、国際教育部門と国際連携部門の2つの部門を設置し、国際交流の推進を図っている。

国際教育部門には、日本語教育部とグローバル人材育成部があり、外国人留学生に対する日本語教育、外国人留学生及び海外留学を希望する本学学生に対する修学上及び生活上の指導助言を行っているほか、地域との国際的連携活動などを積極的に実施している。

国際連携部門では海外との研究交流等を推進するため、海外大学等との学術交流、海外教育研究機関等との連携、本学研究者等の派遣・海外からの研究者等の受入れ、国際的な研究評価への対応、その他国際交流等の検討・支援等を行っている。

福井大学では、平成27年4月現在、留学生は173名在籍し、平成26年度の海外派遣学生数は262名であった。本センターは、これらの学生の教育及び生活面での指導助言を行い、また、海外協定校等72機関との学術交流協定を締結し、世界的水準での教育および研究の推進と国際社会に貢献できる人材の育成に努めている。

さらに、福井大学を修了し母国で活躍している留学生同窓生有志で組織する福井大学留学生同窓会が10ヶ国13支部設立されており、本センターが窓口となり、福井大学と各支部との交流及び連携を図っている。

1-2. 留学生センター・国際交流センター関係の経緯（平成27年3月現在）

昭和63年4月1日	日本語・日本事情担当教員1名配置（教育学部教授）
平成元年4月1日	留学生専門教育担当教員1名配置（工学部講師→教授）
平成元年10月25日	福井県留学生交流推進協議会設立
平成2年4月1日	留学生専門教育担当教員1名配置（教育学部講師）
平成6年4月1日	日本語・日本事情担当教員1名配置（教育学部教授）
平成7年1月11日	留学生指導相談室（学内措置）設置
平成12年4月1日	留学生センター（学内措置）設置
平成13年4月1日	短期留学プログラム開設 国際総合工学特別コース（大学院工学研究科博士後期課程）開設
平成13年11月30日	福井大学留学生センターニュース「こころねっと」創刊号発行
平成14年9月12日	第1回留学生国際シンポジウム開催（福井大学国際コンgres）
平成15年4月1日	留学生センター（省令施設）設置
平成15年10月1日	福井大学・福井医科大学の統合
平成15年11月30日	第1回福井大学留学生同窓会大会開催
平成15年12月2日	第2回留学生国際シンポジウム開催
平成16年4月1日	国立大学法人福井大学発足 福井大学留学生会発足
平成16年10月1日	日韓共同理工系学部留学生プログラム開設
平成16年12月11日	福井大学留学生同窓会マレーシア支部設立
平成16年12月15日	福井大学留学生同窓会タイ支部設立
平成17年1月26日	福井大学留学生同窓会インドネシア支部設立
平成17年9月2日	福井大学留学生同窓会韓国支部設立
平成17年9月9日	福井大学留学生同窓会西安支部設立
平成17年12月18日	福井大学留学生同窓会上海支部設立
平成18年9月6日	福井大学外国人留学生支援会設置
平成18年10月29日	福井大学留学生同窓会杭州支部設立
平成18年12月16日	福井大学留学生同窓会台湾支部設立
平成19年2月3日	福井大学留学生同窓会北京支部設立
平成19年8月3日	福井大学留学生同窓会ハンブルグ支部設立
平成19年10月2日	第3回留学生国際シンポジウム開催予定
平成19年2月3日	福井大学留学生同窓会北京支部設立
平成19年8月3日	福井大学留学生同窓会ハンブルク支部設立
平成19年10月2日	第3回留学生国際シンポジウム開催
平成20年9月27日	第4回留学生国際シンポジウム開催
平成20年11月23日	福井大学留学生同窓会国内支部設立大会 第5回留学生国際シンポジウム開催
平成21年11月22日	福井大学留学生同窓会国内支部総会開催

平成21年12月17日	福井大学留学生同窓会バングラデシュ支部設立大会
平成23年12月17日	福井大学留学生同窓会ミャンマー支部設立大会
平成25年4月1日	国際交流センター設置（留学生センターを発展改組）
平成25年9月8日	福井大学留学生同窓会世界大会開催
平成25年9月9日	福井大学グローバル人材育成シンポジウム開催
平成26年12月17日	福井大学グローバル人材育成シンポジウム開催
平成27年3月14日	福井大学留学生同窓会タイ支部設立10周年記念総会

2. 現 況

2-1. 運営組織

センターでは運営の責任者としてセンター長を、その職務を補佐するために副センター長を置き、センターの運営に関する事項を審議するために国際交流センター運営委員会を置いて、センターの目的達成に努めている。

また、センターでの日常的な業務を円滑に進めるため、センターの専任教員で構成する「国際交流センター専任教員会議」を置いている。センター業務の事務及び総括は、学務部国際課が所掌している。

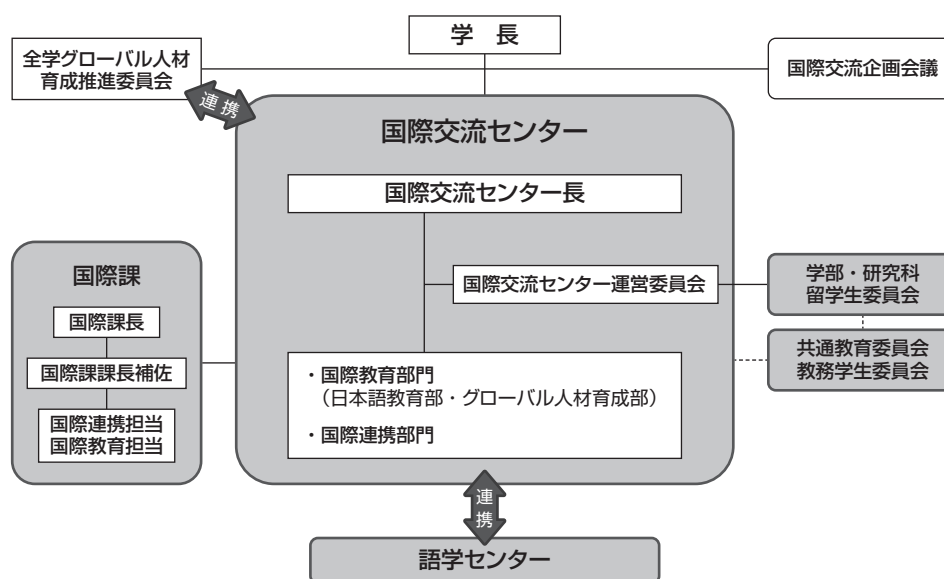


図 I-1 国際交流センター組織図

(1) 国際交流センター長

センター長は、学長が、各学部長又は各学部長候補者の意見を聴取の上、本学の副学長又は教授等のうちから選考し、その任期は2年（再任可）である。センター長は、センター運営の責任者であり、その業務を掌理する。現在では、理事（研究・国際担当）の副学長が兼務している。また、国際交流センター運営委員会の委員長を務める。

(2) 国際交流センター副センター長

副センター長は、センター長の職務を補佐し、センター長に事故があるときは、その職務を代行する。

(3) 国際交流センター運営委員会

センターの円滑な運営を図るために置かれている委員会であり、留学生の教育・学習支援、学生の海外派遣など、国際交流に関わる重要事項を審議・決定する。国際交流センター長が委員長を務め、副センター長、各学部選出教員各1名、国際交流センター専任教員、学務部長、その他委員会が必要と認めた者で構成されている。

(4) 国際交流センター専任教員会議

センター専任教員で構成する会議であり、センターの業務執行計画策定、自己点検・評価、ホームページ作成などの広報活動、などについて打合せ・議論する月例の会議である。

(5) 学務部国際課

国際交流センターに係る事務は学務部国際課が担当している。国際課には課長、課長補佐と業務に合わせて国際教育担当、国際連携担当の職員が配置されている。留学生の勉学、生活に関すること、学生の海外派遣に関すること、海外大学等との学術交流協定などの窓口になっている。医学部に関しては、平成25年度から松岡キャンパスに国際課職員を配置している。

(6) 国際交流センター事務

国際交流センターに事務補佐員を配置し、国際課と連携しながらセンター業務の事務と教員のサポートを行っている。

2-2. 教員組織

国際交流センターには、その基本的業務である「日本語・日本事情教育」、「留学生指導・相談」、「各種交流活動」及び「日本人学生の留学指導・相談」を遂行するために、平成27年度4月現在、専任教員4名（教授2名、准教授2名）及び非常勤教員5名、謝金講師が4名配置されている。専任教員1名が3月で定年退職しており、10月から准教授1名が着任予定である。なお、国際連携部門への教員配置はない。

詳細は以下の通りである。

センター長	岩井善郎（研究・国際担当副学長）
副センター長	寺岡英男（教育・学生担当副学長）
国際教育部門	
（グローバル人材育成部）	教授 小幡浩司
	教授 虎尾憲史

(日本語教育部)	准教授 膽吹 覚
	准教授 桑原陽子
非常勤講師	市村葉子、澤崎幸江、敷田紀子、村上洋子、星 摩美
非常勤(謝金)講師	小野知恵美、齋藤ますみ、高瀬公子、柳原智子、摩騰富子

2-3. 歴代センター長

【留学生センター長】

平成12年4月ー平成13年3月	本多 義明 (学生部長)
平成13年4月ー平成14年3月	黒木 哲徳 (学務担当副学長)
平成14年4月ー平成16年3月	長谷川 守男 (教育地域科学部 教授、教育学)
平成16年4月ー平成18年3月	山本 富士夫 (工学部 教授、機械工学)
平成18年4月ー平成19年3月	内田 高峰 (教育・学生担当副学長)
平成19年4月ー平成22年3月	中川 英之 (教育・学生担当副学長)
平成22年4月ー平成25年3月	寺岡 英男 (教育・学生担当副学長)

【国際交流センター長】

平成25年4月ー	岩井 善郎 (研究・国際担当副学長)
----------	--------------------

2-4. 施 設

(1) 教 室

国際交流センターの日本語クラスは、文京キャンパスの国際交流センターで行われている。センター内の教室等の内訳は以下の通りである。

①国際交流センター (文京キャンパス)

現在の国際交流センターは平成15年4月に、旧教育地域科学部2号館の一角を改修して造られたものである。1階フロアの入り口には、リフレッシュコーナーが設けられている。

1階フロア

教員室	1室 (18㎡)
非常勤講師室	1室 (18㎡)
教室	2室 (18㎡×1、36㎡×1)

2階フロア

教員室	1室 (17㎡)
教室	2室 (17㎡×1、32㎡×1)

②国際交流センター分室 (文京キャンパス)

工学部の旧電子計算機室を改修整備して、2階に国際交流センター分室を設け、留学生サービスに供してきている。ラウンジには、PC及びテーブル・椅子があり、就職支援プログラム等の定期講義や、共同学習、留学生イベント等に利用されている。

教員室	1室 (23㎡)
ラウンジ	1室 (78㎡)

演習室	1室	(45㎡)
多目的室	1室	(24㎡)

センターの教室環境の最も大きな問題は、教室不足であり、円滑なクラス運営のためには教室を増やす必要がある。また、教員室及び教室が分散しているため、センター施設の集中化が必要である。

(2) 教育機器

本センターの教育用機器等の整備状況は以下の通りである。

①教室設置用機器

- ・DVDビデオプレイヤー 3台 (各教室1台ずつ)
- ・ブルーレイプレイヤー 3台 (各教室1台ずつ)
- ・CDテープレコーダー 3台 (各教室1台ずつ)
- ・プロジェクター 1台

②非常勤講師室設置用機器

- ・教員用デスクトップ型パーソナルコンピュータ 1台
- ・事務員用ノート型パーソナルコンピュータ 1台
- ・プリンター 2台
- ・DVDビデオプレイヤー 1台
- ・コピー機 1台
- ・CDテープレコーダー 1台

③ラウンジ

- ・学生用デスクトップ型パーソナルコンピュータ 6台
- ・プリンター 1台
- ・ビデオプレイヤー 1台
- ・テレビ 1台

④その他

- ・学生貸し出し用小型カセットレコーダー 5台
- ・教員用ノート型パーソナルコンピュータ 2台
- ・ビデオカメラ 1台
- ・プロジェクター 1台

(3) 図 書

国際交流センターでは、日本語教科書を中心に書籍の充実を図っている。現在センターが所有する書籍等は以下の通りである。教員が授業・研究のために使用する書籍だけでなく、日本語能力試験対策用書籍を中心とした留学生貸し出し用の書籍を、センター独自に所有し、学生の積極的な利用を勧めている。

他にドラゴンソースを図書館に整備し、オンラインで中国の月刊誌等を閲覧できるようにしている。また、言語開発センターには、語学センターの協力により日本語教材も整備されている。

①非常勤講師室配架図書

・日本語教科書	473冊
・辞書・事典	34冊
・その他専門書	28冊
・視聴覚教材（テープ、CD、DVDなど）	105セット
・論文集等	
世界の日本語教育	12冊
第二言語としての日本語の習得研究	12冊
音声研究	7冊
計量国語学	9冊
講座 日本語教育（早稲田大学）	39冊
日本語教育年間年鑑	9冊

②学生貸し出し用図書（ラウンジ配架）

・日本語教科書	40冊
・辞書・事典	5冊
・視聴覚教材（テープ、CDなど）	55セット
・日本語能力試験対策参考書・問題集	55冊
（日本語能力試験対策参考書・問題集 リフレッシュコーナー配架 40冊）	
・英語学習用参考書・問題集	45冊
・就職関連参考書	20冊
・その他図書	30冊

③定期刊行物

- ・福井新聞（ラウンジ閲覧用）
- ・Japan Times（ラウンジ閲覧用）
- ・日本経済新聞（ラウンジ閲覧用）

（４）居住施設

①留学生会館

外国人留学生のための居住施設であり、単身室25（16㎡）、夫婦室2（35㎡）、家族室2（53㎡）、及び共用スペースからなっている。ただし、入居期間は1年以内に限定されている。文京キャンパスからは至近の位置にあり、学生宿舎に隣接している。

②国際交流学生宿舎

本学学生の勉学及び生活のための良好な環境を整備すると共に、本学の日本人学生と外国人留学生との相互理解を深め、国際交流を促進することを目的とする学生宿舎であり、部屋数209（全て単身室、12㎡）の内、平成27年4月は37室が留学生に提供されている。留学生と日本人学生が共に暮らすタイプの宿舎である。文京キャンパスからは至近の位置にある。

③国際交流会館（松岡キャンパス）

本学の医学部、医学系研究科、高エネルギー医学研究センター等における外国人留学生、外国人研究者等の居住その他国際交流に関する事業の用に供し、教育及び研究に係る国際交

流の促進に寄与することを目的とする会館であり、単身棟（単身室10室<15㎡>、ラウンジ、キッチン、談話室、洗濯室）及び世帯棟（夫婦室2室<43㎡>、家族室4室<53㎡>）からなっている。松岡キャンパス（医学部）の中に置かれており、館長は医学部長である。

2-5. 財 務

本センターの過去5ヵ年（平成22年度～26年度）の予算は、以下のとおりである。

表I-1 留学生センター・国際交流センターの予算（平成22年～26年度）

科目・事項	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	内 容
教員研究費等	1,992,000	1,992,000	1,992,000	1,992,000	1,992,000	教員5名分
【非常勤講師】 非常勤講師手当	3,754,000	3,716,000	3,679,000	3,642,000	3,606,000	
非常勤講師旅費	405,000	557,000	501,000	276,000	276,000	
センター事業費	8,048,000	7,943,000	7,840,000	7,738,000	7,637,000	事務補佐員1名、事務管理費、留学生実習費、同窓会経費、進学説明会、健康診断、講師謝金等
合 計	14,199,000	14,208,000	14,012,000	13,648,000	13,511,000	

上記以外に、国際課予算により全学日本語の講師謝金及び留学生見学旅行費として年間約350万円を充当している。国際交流センターの予算は、毎年削減の傾向であり、事業予算は毎回検討のうえ決定している。近年では、学生海外派遣に係る経費、学術交流協定のための経費及び留学生同窓会経費等が必要となっており、予算は厳しいが、国際交流センターの活動は広がってきている。

3. 主な業務と活動

3-1. 国際交流センターにおける主な業務と活動

本センターは、外国人留学生及び海外留学を希望する本学の学生に対して、必要な教育及び指導助言等を行うとともに、教育指導の充実及び留学生交流の推進に寄与することを目的として、以下の業務を行う。

- (1) 外国人留学生に対する日本語・日本事情教育に関すること。
- (2) 外国人留学生に対する大学院等入学前予備教育に関すること。
- (3) 海外留学希望学生に対する日本文化教育に関すること。
- (4) 外国人留学生教育の充実及び向上のための調査研究に関すること。

- (5) 双方向留学プログラムの企画及び実施に関すること。
- (6) 学内及び地域社会との国際交流推進に関すること。
- (7) 外国人留学生関係ネットワーク構築に関すること。
- (8) 外国人留学生及び海外留学希望学生に対する修学上及び生活上の指導助言に関すること。
- (9) 福井大学留学生会館に関すること。
- (10) 外国の大学等からの研究者等の受入れに関すること。
- (11) 外国の大学等への本学教職員の派遣に関すること。
- (12) 外国の大学等との交流に関すること。
- (13) 国際的研究評価への対応に関すること。
- (14) 国際的な産官学連携に関すること。
- (15) その他前条の目的を達成するために必要な業務に関すること。

これらの業務を行うため、国際教育部門では以下の2つの活動部門を設定している。

【1】日本語教育部

日本語教育部では、上記15項目のうち、主として(1)(2)(4)に携わっている。以下、項目別に概要を記す。

- (1) 外国人留学生に対する日本語・日本事情教育に関すること。

- ①短期留学プログラム（Ⅱ. 2-2参照）

福井大学と学術交流協定を締結している海外の大学から留学生を受け入れ、日本語・日本事情等に他、主として英語による専門分野の授業を行う。

- ②日韓共同理工系学部留学生プログラム（Ⅱ. 2-3参照）

日韓共同理工系学部留学生事業により本学工学部に受け入れた留学生に対して、留学に必要な日本語と専門科目の授業を予備教育として半年間行う。

- ③全学向け日本語コース（Ⅱ. 2-4参照）

福井大学に在籍する留学生を対象に、日常生活に必要な日本語や、大学の授業を受けられる日本語の力を養うことを目的として、日本語Ⅰ（初級）～日本語Ⅳ（中・上級）の4クラスを開講している。

- ④日本語能力試験対策講座（Ⅱ. 2-5参照）

福井大学に在籍する留学生を対象に、日本語能力試験（公益財団法人日本国際教育支援協会と独立行政法人国際交流基金が主催）に合格することを目的として、N-1及びN-2の2クラスを開講している。

- (2) 外国人留学生に対する大学院等入学前予備教育に関すること。

- ①日本語研修コース（Ⅱ. 2-1参照）

本学大学院に進学する国費留学生に対して、6ヶ月間の日本語集中授業を行う。

- ②日本語研修特別コース（Ⅱ. 2-1参照）

福井大学に在学する大学推薦の国費留学生に対し、指導教員の承諾を得て、6ヶ月間の日本語集中授業を行う。

- (4) 外国人留学生教育の充実及び向上のための調査研究に関すること。（Ⅳ参照）

『福井大学国際交流センター紀要』の刊行をはじめ、助成金によるプロジェクト、研究大会等

の開催などを行っている。なお、各教員の研究については資料3を参照されたい。

【2】グローバル人材部

グローバル人材育成部では、正規留学生、短期留学生が学習・生活しやすい環境を創出し、外国人留学生数と出身国の多様性を増加させ、国際的なキャンパスを作り出すことを目指している。学生が日々のコミュニケーションを通して、言語運用能力と異文化理解能力を鍛え、さらに留学により文化背景や価値観の異なる人々と切磋琢磨することで、グローバル人材の育成を行うことを目標としている。そのために、グローバル人材育成部では、上記国際交流センター業務リストの(13)を除く、(3)～(15)までの業務を行っている。

①日本研究関連コース科目の提供…(3)

国際交流センターでは、日本事情1、日本事情2、日本文化、多文化コミュニケーション1～3を留学生および日本人学生に提供している。特に留学を希望する学生には、受講を薦めている。

②留学生、学術交流協定校へのインタビュー…(4)

学期終了時に留学生に対し福井大学での留学の満足度調査を行っている。また、学術交流協定校からは、日常のコミュニケーションを通して聞かれる、要望、意見、そして問題点などを明らかにし、次のプログラムの改善、サービスの向上に役立てている。

③学術交流協定の拡大…(5)、(12)

本学教員が部局間協定、大学間協定を希望する海外大学と、学術交流協定締結に向けた交渉を行ない、締結まで手続きを行う。

④短期海外留学プログラム【派遣】の企画・運営・管理…(6)

GGJプロジェクト、上海スプリングプログラム、その他の短期海外留学プログラムを実施する。

⑤短期留学プログラム【受入】の企画・運営・管理…(5)、(7)

浙江理工大学生対象の福井大学サマープログラム、その他の短期受入プログラムを実施する。

⑥交換留学プログラムの企画・運営・管理…(5)、(7)

貸借バランスに基づく、授業料免除を前提とした学生交流を実施する。

⑦SGH海外研修プログラム支援…(6)

スーパー・グローバル・ハイスクールの海外研修プログラム実施を受入れてくれるよう海外の大学・高校と交渉を行い、プログラムを実施。また、姉妹校協定締結に向けた協議を開始している。

⑧留学生の相談対応とトラブルシューティング…(8)

よろず相談から緊急事態まで対応、留学生が安心して学習できる環境の創出に努める。

⑨派遣学生の相談対応、留学情報提供、オリエンテーション…(8)

ウェブ、留学相談窓口の設置、オリエンテーション等を通じての情報提供を充実させるとともに、国際課と連携して派遣学生の相談に対応する。

⑩留学準備支援…(8)

留学を希望する学生に対し、人文社会学部の授業を英語で開講、平成26年度は前後期合わ

せて、約40回の授業を行った。また、TOEFL IPT試験を学内で実施した。

⑪福井大学留学生会館等のキャパシティ

留学生会館には、全て留学生を入居させているが、短期留学生増、および新学部設置に伴う留学生の更なる増加が予想されるため、福井大学国際交流学生宿舎（混住型）の留学生ための部屋数を徐々に増加させている。…（9）

⑫受入研究者のロジスティクス …（10）

国際課と連携して、受入研究者のビザ、宿舎、研究室等、受入体制を準備、整備している。

⑬派遣教員への支援 …（11）

学術交流協定校に派遣される教員のVISA、その他ロジスティクスの問題への対応、さらに、産学官連携本部と連携して、教員が派遣先大学で研究を行うための学術交流協定の交渉を行う。

⑭留学生同窓会の拡大と組織運営、および企画運営・管理 …（14）、（15）

同窓会を通じた福井大学のプロモーションや、ネットワーキングによる新たな産業創出の機会を提供している。さらに、上海スプリングプログラム（毎年3月実施・上海理工大学）では、福井大学を卒業した元留学生による講演（約10回／週）、および企業見学を実施しており、産業界の意見をカリキュラムに反映させる取組の象徴的事例となっている。

⑮留学生の就職トレーニングと就職活動、就職斡旋 …（14）、（15）

日本の企業文化、マナー、ビジネスの慣習や習慣などについて学ぶと共に、面接の練習から就職斡旋まで、出口のケアを入念に行っている。

*上記（13）「国際的研究評価への対応に関すること」については、産学官連携本部が中心となって作業をしており、国際交流センターはそのサポートが現在の役割である。

3-2. 全学的貢献

（1）教育

国際交流センター教員は、国際交流センターの授業以外に以下の授業を担当している。平成27年3月現在の国際交流センター教員の担当科目は以下のとおりである。詳細については、「Ⅱ教育」を参照されたい。

共通教育外国語科目（8科目）

日本語A～H

共通教育「文化」日・中言語文化系（8科目）

多文化コミュニケーション（異文化コミュニケーション）A～C

日本の文化、応用日本語Ⅰ、応用日本語Ⅱ、日本事情A、日本事情B

教育地域科学部（8科目）

日本アジア文化論、異文化教育論、情報化と日本語、日本語音声表現、日本語文法論、日本語教育論、日本文化講義、専門セミナー

教育学研究科（7科目）

国語学特論、国語学特別演習Ⅱ、日本語教育特論、日本語教育特別演習、国文学特論、国文学特別演習Ⅰ、国語科教育実践研究

工学部（4科目）

工業日本語Ⅰ～Ⅳ

工学研究科（2科目）

工業日本語特論Ⅰ、工業日本語特論Ⅱ

（2）学内運営

国際交流センター教員は、センターの業務に関わる学内の委員会に出席している。平成27年3月現在の学内委員会等の担当状況は以下の通りである。これまでの各教員の委員担当状況については個人データを参照されたい。

国際交流センター運営委員会：山中和樹、虎尾憲史、小幡浩司、膽吹覚、桑原陽子

教育地域学部・教育学研究科留学生委員会：桑原陽子

工学部・工学研究科留学生委員会：虎尾憲史

工学部・工学研究科英語教育実施運営委員会：小幡浩司

工学部・工学研究科ネットワーク委員会：虎尾憲史

工学部・工学研究科情報セキュリティ管理委員会：虎尾憲史

国際交流企画会議専門部会：虎尾憲史

安全保障輸出管理全体会議：虎尾憲史

高等教育推進センター学生支援部門会議：小幡浩司、虎尾憲史

工学部・工学研究科グローバル人材育成事業実施委員会：小幡浩司

教育改革推進機構機構長補佐会議：小幡浩司

教育改革推進機構英語教育部門会議：小幡浩司

共通教育留学生共通教育部会幹事：桑原陽子（部会長）、山中和樹、虎尾憲史、小幡浩司、
膽吹覚

共通教育第3分野「文化」日本語・日本文化系幹事：膽吹覚

3-3. 広 報

（1）外国人学生のための進学説明会

JASSO主催の「外国人学生のための進学説明会」には本学教職員が参加し、広報活動を行っている。平成22年～26年の参加状況は以下の通りである。

平成22年 7月19日（大阪会場）

平成23年 7月9日（大阪会場）

平成24年 7月14日（大阪会場）

平成25年度及び平成26年度は、都合により参加できなかった。

（2）刊行物

本センターの活動に対する理解を深めてもらうことを目的として、以下の報告及び資料を作成し関係機関に配布を行っている。なお、「こころねっと」については、「V社会貢献」を参照

されたい。

- ①国際交流センターパンフレット（ほぼ1年に1度改稿）、現在は、ウェブ上の公開に移行している。

＜主な掲載内容＞

- ・センターの沿革・目的、活動
- ・教職員組織
- ・留学生会館・国際交流学生宿舎・国際交流会館紹介

- ②国際交流センター紀要・年報（毎年発行）

＜主な掲載内容（年報部分）＞

- ・日本語教育部各日本語コース報告
 - ・共通教育日本語科目、日本語・日本事情科目報告
 - ・グローバル人材部報告
- （紀要部分については、「IV研究」を参照のこと）

この他に国際交流センターニュースを以下の要領で発行していたが、ウェブ上に公開している情報と重複するので、平成25年度をもって廃刊した。

- ③国際交流センターニュース（毎年発行）

＜主な掲載内容＞

- ・各日本語コースの授業報告
- ・日本語コース受講留学生のエッセイ（各コースより1～2名ずつ）
- ・海外留学体験者（日本人学生）のエッセイ
- ・相談交流部門（グローバル人材部の前身）の活動報告
- ・当該年度の主な行事
- ・教職員紹介

（3）国際交流センターホームページ

平成27年3月現在、日本語版、英語版及び中国語版が公開されている。

(<http://ryugaku.isc.u-fukui.ac.jp/index.html>)

- ①ホームページ掲載情報

掲載情報はP15（図I-8）の通りである。

- ②管理運営体制

ホームページのためのサーバー管理と更新作業は、工学部技術部に委託している。国際交流センター専任教員1名と国際課職員1名がホームページ管理担当窓口として、工学部技術部との連絡を行っている。

ホームページに掲載される情報のほとんどは留学生向けの情報である。特に重要なものは、留学生向け日本語クラスの時間割やシラバスなどの日本語授業関連情報と、福井大学短期留学プログラム（UFSE P）や福井大学交換留学プログラム（UFE S P）の募集に関する情報である。その他、行事関連情報やニュース等の不定期の情報更新が行われている。更新

情報作成担当は、情報の内容によって決まっており、各担当者が必要に応じて作成した原稿は、管理担当を通して、工学部技術部へ送られることになっている。

一方、海外留学を希望する日本人学生への情報は、国際交流センターホームページとは別に、大学全体の「国際交流・留学」(<http://global.ad.u-fukui.ac.jp/>) のページに掲載されている。国際交流センターホームページと大学の「国際交流・留学」のページは、相互リンクによって情報の補完をしている。

●は各頁のトップ頁



図 I - 8 国際交流センターホームページ階層図

Ⅱ. 教 育

1. 概 要

平成15年4月の省令化以降、国際交流センターが開講する科目は年を追う毎に増加し充実したものとなっている。平成20年度に短期留学プログラムの日本語・日本事情系科目が7科目、さらに、平成21年度に全学向け日本語コースに「日本語能力対策講座」が新規開講し、中・上級レベルの学生を対象とする日本語教育の充実が図られた。平成26年度には短期留学プログラムに「多文化コミュニケーション3」が新設された。

平成15年4月	留学生センター省令化。 「日本語補講」が「全学補講日本語コース」と名称変更し、短期留学プログラムとの合同授業を廃止し、独自開講とする。
平成15年10月	「日本語研修コース」（大学院入学前予備教育）開始。
平成16年4月	「全学補講日本語コース」が「全学向け日本語コース」と名称変更。 短期留学プログラムの「日本語初級」「日本語初中級」「日本語中級」を週4コマ連続授業（8単位）とする。 共通教育日本語科目に「日本語G」と「日本語H」を新設し、中級・上級各4科目編成とする。
平成17年4月	短期留学プログラムに技能別科目「はじめての漢字」「はじめての作文」「はじめての会話」を新設。
平成17年10月	日本語研修特別コース（大学推薦国費留学生対象）を新設。
平成20年10月	短期留学プログラムに「日本語中級」「日本語上級」「多文化コミュニケーション1」「多文化コミュニケーション2」「応用日本語1」「応用日本語2」「日本の文化」を新設。
平成21年9月	全学向け日本語コースに「日本語能力試験対策講座」を開設。
平成26年4月	短期留学プログラムに「多文化コミュニケーション3」を開設。

平成22年度から26年度まで国際交流センター教員が関与してきた本学での教育について、次章2. において以下のように詳述する。

2. 国際交流センターが実施またはコーディネートする教育

- 2-1 日本語研修コース（大学院入学前予備教育コース）及び日本語研修特別コース
- 2-2 短期留学プログラム
- 2-3 日韓共同理工系学部留学生プログラム
- 2-4 全学向け日本語コース
- 2-5 日本語能力試験対策講座

3. 全学向けの教育
 - 3-1 共通教育
 - 3-2 学部専門教育
 - 3-3 大学院教育
 - 3-4 博士人材キャリア開発支援センターでの日本語教育
 - 3-5 さくらサイエンスプラン・初等日本語講座
 - 3-6 評価と課題

2. 国際交流センターが実施またはコーディネートする教育

2-1. 日本語研修コース（大学院入学前予備教育）及び日本語研修特別コース

1. 日本語研修コース（大学院入学前予備教育）

(1) 本コースの目的

本コースは、大学院に進学する文部科学省の大使館推薦の国費研究留学生及び教員研修留学生を対象とした半年間の日本語集中コースで、後期のみ開講されている。受講生は、主として日本語未習者を含む初級日本語学習者である。本コースの目的は以下の2つである。

- 1) 日本での留学生活に必要な基礎的な日本語を身につける。日常生活に不可欠な日本語、研究を行う上で指導教員や他の学生とのコミュニケーションに必要な日本語を習得する。特に、自分の専門や仕事について話すために必要な語彙・表現を学ぶ。
- 2) 留学生活に対する不安を軽減し、自律的に生活・学習する態度を学ぶ。

(2) 受講状況

平成22年度から26年度までの受講者数は表Ⅱ-1の通りである。

表Ⅱ-1 日本語研修コースの受講者数

実施年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
受講者数	4	2	3	4	4

(3) 運営状況

1) カリキュラムの現状

受講生のほとんどが、日本語未習か初級前半の学習者であるため、ひらがな、カタカナの学習から開始する。1週間に10コマの文型・文法クラスと、6コマの技能クラスを開講している。平成22年度と23年度の技能クラスは「会話、漢字、作文、情報処理、文化、修了発表特別演習」6つで、平成24年度からは「会話」を「補講」に変更した。標準的な時間割と各クラスの授業内容は以下のとおりである。

表Ⅱ－２ 日本語研修コースの標準的な時間割（平成26年10月現在）

	月	火	水	木	金
I 限	日本語(文型文法)	日本語(文型文法)	日本語(文型文法)	日本語(文型文法)	日本語(文型文法)
II 限	日本語(文型文法)	日本語(文型文法)	日本語(文型文法)	日本語(文型文法)	日本語(文型文法)
III 限	日本語(情報処理)	日本語(漢字)	日本語(作文)		日本語(修了発表特別演習)
IV 限	日本語(補講)		日本語(文化)		

《授業内容及び使用教材》

- 日本語(文型・文法)：文法を中心とした総合練習。『みんなの日本語初級』I
- 日本語(会話)：「文型・文法クラス」の内容に準じた会話及び簡単なスピーチ。『みんなの日本語初級』I
- 日本語(漢字)：ひらがな・カタカナ練習と漢字100字程度の読み書きの学習。『みんなの日本語初級I 漢字英語版』
- 日本語(作文)：課題作文をもとに修了発表レポートを作成。
- 日本語(情報処理)：Microsoft word、power pointを使った修了発表の準備。
- 日本語(文化)：華道(池坊)、俳画、書道、陶芸(越前焼)の日本文化体験学習。
- 日本語(修了発表特別演習)：修了発表のため個別指導。

「日本語(文型・文法)」の学習進度に合わせて他の技能クラスのおおよそのスケジュールを決定する。平成21年度に「日本語(文型・文法)」のI限が全学日本語向けコース「日本語I」との合同授業になって以来、コースを通して『みんなの日本語初級』I(1課～25課)を学習する。

2) 修了発表

コース修了時には、受講者全員がPower Pointを用いた日本語による発表を行う。修了発表の指導は、「日本語(修了発表指導特別演習)」を使って専任教員が個別指導を行っている。修了発表会の発表題目を表Ⅱ－3に示す。

表Ⅱ－3 日本語研修コース修了発表会 発表題目及び発表者一覧

<10期 平成22年度後期>	
わたしの学校 -tambp小学校-	レイシエル・ルセロ・モヒカ(フィリピン)
小学校の先生の仕事	アビラ・ノベリナ・カリオナ(フィリピン)
教師の仕事 -人づくりで国づくり	ガラガテ・マリー・グレース・ブイコ(フィリピン)
わたしのしごと	エイ・モン・ティン(ミャンマー)
<11期 平成23年度後期>	
ガザヤ高校とわたしのしごと	ナキボネカ・ルシア(ウガンダ)
わたしがっこう -バンケン教育大学	プッタチャン・ラサヴォン(ラオス)
<12期 平成24年度後期>	
ルーマニアの学校を知っていますか?	ネアゴエ・クリナ・ガブリエラ(ルーマニア)
ミャンマーの学校	オマー・リン・シュウ(ミャンマー)
わたしのくにTimor-LesteとわたしがっこうKay-Rala	ジャスイントウ・ソアレス・ダ・シルヴァ(東ティモール)

<13期 平成25年度後期>	
ルアンパパンきょうしょうせいたんだいについて	カムサボン・ピエンタ (ラオス)
ルーマニアの学校せいかつ	クリスティナ・フロレスク (ルーマニア)
私の学校 - Sta.Maria National High School	エヴァンジェリン・セモニア (フィリピン)
ミャンマーの教育	ゾー・ミン・ルイン (ミャンマー)
<14期 平成26年度後期>	
サンタ・ラウレンシア中学校	マリア・イラワティ・スマンポウ (インドネシア)
エジプトの教育	セマハ・ムスタファ (エジプト)
私の高校フェデリコアルベルトファウupp	コーレア・ジョージ・カルロス (チリ)
ウズベキスタン	ツラエヴ・ベキゾ (ウズベキスタン)

表Ⅱ-3からもわかるように、発表内容は主に自分の専門と仕事についてである。この発表の準備のために、「日本語（文型・文法）」のⅡ限と、「日本語（作文）」「日本語（情報処理）」では、自分の専門や仕事について説明することに特化した教材を使って語彙・表現の拡充を図っている。

3) 成績評価及び管理

本コースは単位認定がないが、各クラスの成績については個々に基準が設定されており、各教員が100点満点で評価する。それらの成績は、コース修了時にコーディネータがとりまとめ国際課で保管している。表Ⅱ-4は、成績表の例である。成績評価の「秀・優・良・可・不可」は、福井大学の基準に従っている。

表Ⅱ-4 日本語研修コース成績表例

平成26年度 後期		日本語研修コース 成績表		
				氏名 ●●●・▲▲▲
科目名	担当教員	開講時間	概 要	成績
日本語 (文型・文法)	桑原陽子 敷田紀子 澤崎幸江	月曜ⅠⅡ 火曜ⅠⅡ 水曜ⅠⅡ 木曜ⅠⅡ 金曜ⅠⅡ	初級用日本語教科書『みんなの日本語』第25課まで	優 (85)
日本語 (作文)	桑原陽子	木曜Ⅲ	6つの作文の課題に沿って、自身の教育経験や国の教育について説明する文章を書く練習をした	優 (82)
日本語 (漢字)	山中和樹	火曜Ⅲ	「みんなの日本語初級Ⅰ 漢字」 U1-U9 (102漢字)	秀 (96)
日本語 (情報処理)	桑原陽子	月曜Ⅲ	Word, PowerPointの基本的な使い方を学習	秀 (90)
日本語 (文化)	膽吹 覚	水曜Ⅳ	生け花 (池坊流), 陶芸 (越前焼) を体験学習した。	秀 (90)
				平成26年○月×日 福井大学国際交流センター

コースとしての修了成績の基準は、開講コマ数に応じて、次のように算出する。

[日本語（文型文法）] × 0.5 + [他の4科目] × 0.125 + [修了発表実施] 10

（４）教育の効果

来日時に日本語がほとんどわからなかった受講生たちが、コース修了時には日本語で短いプレゼンテーションを行い、簡単な質疑応答ができるようになることは、大きな進歩である。研修コース修了後、ほとんどの学習者が日本語学習の継続を希望し、全学向け日本語コースの日本語クラスを受講する。「日本語（文型・文法）」の総合評価が「可」以上（60点以上）の受講生は、全学日本語コースの「日本語Ⅱ」へ進むことができる。「不可」（59点以下）の場合は、全学日本語コースの「日本語Ⅰ」を再度受講する。

本コース在籍中は、受講生のほとんどが常に一緒に学習しているため、結束力が強く、協力し合って学習を進めることができる。来日年度の異なる学習者間の連帯感も強く、留学生生活を支える重要な基盤となっており、研究活動にスムーズに入るための準備期間として、重要な役割を果たしている。

（５）評 価

「日本語（文型・文法）」の受講者に対し、コース修了時に授業アンケートを実施した。その結果を表Ⅱ－５に示す。本コースは概ね高い評価を得ていると言える。

表Ⅱ－５ 日本語（文型・文法）についてのアンケート結果（平成22～26年度 後期のみ）

1. 文法のクラスについて、こたえの口に×をかいてください					
	強く思う	少し思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない
	strongly agree	somewhat agree	Neither agree or disagree	somewhat disagree	strongly disagree
(1) テキストや教材は満足できるものだった					
The textbooks and/or teaching materials used were satisfactory.					
平成22年度後期(4名回答)	4	0	0	0	0
平成23年度後期(2名回答)	2	0	0	0	0
平成25年度後期(3名回答)	3	0	0	0	0
平成26年度後期(3名回答)	3	0	0	0	0
(2) テキストや教材の内容は理解できた					
I could understand the content of the textbooks and/or teaching materials used.					
平成22年度後期(4名回答)	4	0	0	0	0
平成23年度後期(2名回答)	2	0	0	0	0
平成25年度後期(3名回答)	3	0	0	0	0
平成26年度後期(3名回答)	3	0	0	0	0
(3) 先生の声や言葉は聞き取りやすかった					
The instructor spoke clearly.					
平成22年度後期(4名回答)	4	0	0	0	0
平成23年度後期(2名回答)	2	0	0	0	0
平成25年度後期(3名回答)	3	0	0	0	0
平成26年度後期(3名回答)	3	0	0	0	0
(4) 先生は適切な板書を行った					
The instructor wrote clearly on the board.					
平成22年度後期(4名回答)	4	0	0	0	0
平成23年度後期(2名回答)	2	0	0	0	0
平成25年度後期(3名回答)	3	0	0	0	0
平成26年度後期(3名回答)	3	0	0	0	0
(5) 先生の説明はわかりやすかった					
The explanations by the instructor were easy to understand.					
平成22年度後期(4名回答)	4	0	0	0	0
平成23年度後期(2名回答)	2	0	0	0	0
平成25年度後期(3名回答)	2	1	0	0	0
平成26年度後期(3名回答)	2	1	0	0	0
(6) 先生は学生の質問に対して適切に答えた					
The instructor answered our questions properly.					
平成22年度後期(4名回答)	4	0	0	0	0
平成23年度後期(2名回答)	2	0	0	0	0
平成25年度後期(3名回答)	3	0	0	0	0
平成26年度後期(3名回答)	3	0	0	0	0
(7) 授業のスピードが速すぎた					
The tempo of the class was too fast.					
平成22年度後期(4名回答)	0	0	3	0	1
平成23年度後期(2名回答)	0	1	1	0	0
平成25年度後期(3名回答)	0	1	1	1	0
平成26年度後期(3名回答)	0	1	1	0	1
(8) 宿題が多すぎた					
There was too much homework.					
平成22年度後期(4名回答)	0	0	2	1	1
平成23年度後期(2名回答)	0	0	2	0	0
平成25年度後期(3名回答)	0	0	1	1	1
平成26年度後期(3名回答)	0	0	0	0	3
(9) テストが多すぎた					
There was too much test/or quiz.					
平成22年度後期(4名回答)	0	0	2	1	1
平成23年度後期(2名回答)	0	0	1	1	0
平成25年度後期(3名回答)	0	1	1	0	1
平成26年度後期(3名回答)	0	0	0	1	2
2. あなたは、総合的に判断して、この授業に満足しましたか。					
Overall, were you satisfied with this class?					
平成22年度後期(4名回答)	4	0	0	0	0
平成23年度後期(2名回答)	1	1	0	0	0
平成25年度後期(3名回答)	3	0	0	0	0
平成26年度後期(3名回答)	3	0	0	0	0

*平成24年度はアンケートを実施していない。

(6) 課題

学習者の日本語力に差があり、クラス活動に支障が出ることが多い。日本語力の差の原因は、学習開始後の日本語力の伸びが学習者によって違うことと、渡日前に既習歴がある学習者がいることである。そのような場合、以下のように対応している。

- ① 授業についてこれられない学習者には、1週間に1時間以上の補習を行う。
- ② 授業についてこれられない学習者は、「日本語（漢字）」の受講を免除する。
- ③ 既習歴がある学習者には、並行して全学日本語コース「日本語Ⅱ」の受講を認める。

①は専任教員の負担が大きかったため、平成24年度から授業として「日本語（補講）」を設け、できる限り授業時間内で対応できるようにした。

また、③により全学日本語コース「日本語Ⅱ」の受講を認めた学習者の中には、「日本語Ⅱ」の学習をスムーズに行うために補講が必要な者もいた。その場合も、「日本語（補講）」の時間を使った。

2. 日本語研修特別コース

(1) 本コースの目的

日本語研修コースが国費留学生（大使館推薦）を受け入れるコースであるのに対し、日本語研修特別コースは国費留学生（大学推薦）を受け入れるコースである。他の日本語コースのように独立したコースではなく、日本語研修コースの一部を国費留学生（大学推薦）の受講を認める形で運営している。国際課から各学生の受け入れ教員を通して受講生を募集している。

本コースの受け入れには、以下の規定を設けている。

- ① 日本語（文型・文法）10コマすべてに参加できる学習者に限る。
- ② 受講する際には、指導教員の承認を受ける。
- ③ 日本語研修コースの学習者を含めてクラスの定員を10名とし、それを超えた場合は、受け入れを認めない。

平成22～26年は、平成25年度後期に3名、平成26年度後期に1名の受講希望者があり、全員を受け入れた。

(2) 運営状況と課題

本来は、日本語研修コースの「日本語（文型・文法）」の10コマだけの受講を認めるコースだが、受講生の希望があれば、担当教員との相談の上で「日本語（漢字）」の受講を認めている。

コース受入条件の①が可能ではない学生もいるが、本人の強い希望があれば可能な限り受講を許可している。たとえば、平成25年度は研究室のゼミの時間と重なったために、10コマ中9コマしか参加できない学習者がいた。また、同年度の別の学習者からは、大学院入試準備のために、コース期間中1ヶ月半授業を欠席したいという申し出があった。いずれも本人の申し出を了承した上でコース在籍を許可している。

このように可能な限り受講を認めようとするのは、日本語研修コースの受講生がこれまで最大でも4名で、活発なクラス活動のためにもう少し受講人数を増やしたいと考えるからである。そのため、国費留学生以外にも受講を希望する学生がいる場合は、その時々状況に応じて、部分的に受講を認めることがある。たとえば、平成23年度には、月曜日のⅡ限のみ参加を希望

する大学院生の受講を認めた。これは、日本語研修コースの受講生が2名しかおらず、当該大学院生の参加がクラスにより影響を与えると判断したからである。

しかし、このような対応を行うことにより、国費留学生（大学推薦）だけを受け入れる理由が希薄になっている。日本語研修コースの「日本語（文型・文法）」の安定したクラス活動が保証される限り、日本語研修特別コースの受入枠を広げることを検討したい。

2-2. 短期留学プログラム

1. 概要

(1) 受け入れ

短期留学プログラム（UFSEP）は福井大学と交流協定を締結している大学等から1年以内の短期留学生を受け入れるプログラムである。平成13年10月に2カ国4協定校から最初の学生6名を受け入れて以来、派遣を希望する協定校の数は増加し続け、国籍も多彩になっている。平成22年度から26年度の5年間に本プログラムは6カ国、18協定校から87名の学生を受け入れている。

表Ⅱ-6 短期留学プログラム（UFSEP）

受入れ状況	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	累計
学生数	20	13	18	18	18	87
学部 (工学：教育)	15：5	12：1	15：3	13：5	17：1	72：15
派遣協定校数	13	7	11	8	5	18
派遣国数	5	3	4	4	2	6
学生の国籍 (学生数)	中国 (14) U S A (3) 韓国 (1) フランス (1) インドネシア (1)	中国 (11) U S A (1) インドネシア (1)	中国 (13) U S A (1) 台湾 (2) インドネシア (1)	中国 (12) インドネシア (3) 台湾 (2) 韓国 (1)	中国 (17) インドネシア (1)	中国 (67) インドネシア (7) U S A (6) 台湾 (4) 韓国 (2) フランス (1)

(2) UFSEP 修了者の本学大学院進学

平成21年度から平成25年度までに工学部が受け入れたUFSEP留学生103名のうち、平成21年度から平成25年度に本学大学院へ入学した留学生総数は45名にのぼる。内訳は博士前期課程41名、博士後期課程4名である。年度別に見ると、平成23年度修了生17名中10名（58.8%）が博士課程（前期課程9名、後期課程1名）に入学している。平成24年度は22名中11名が博士課程（前期課程9名、後期課程2名）に入学（50.0%）した。この5年間のUFSEP修了生は4割以上（43.7%）が本学大学院入学という実績を示しており、質の高い大学院生の確保にも貢献している。

表Ⅱ－７ 短期プログラム修了生の本学大学院進学状況

短期プログラム受入時期	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	合計				
短期プログラム受入数	19	23	17	22	22	103				
大学院入学時期	平成23年	平成24年	平成24年	平成25年	平成26年	平成26年	平成27年	平成27年		
大学院入学者数	博士前期課程	5	0	10	9	0	9	0	8	41
	博士後期課程	0	1	0	0	1	0	2	0	4
	計	6 (31.6%)	10 (43.5%)	10 (58.8%)	11 (50.0%)	8 (36.4%)	45 (43.7%)			

2. 開講科目と受講状況

UFSEPの開講科目には共通科目と専攻科目があり、国際交流センターでは共通科目の日本語・日本事情系15科目(多文化コミュ3追加)と伝統産業系2科目を開講している。国際交流センター教員はこれらの科目に関する授業の計画及び実施に携わるとともに、受講者の日本語力、要望、受講状況等を考慮して日本語科目の整理統合と増設を繰り返し実情に即したカリキュラム編成を行ってきた。

短期プログラムは、当初、日本語力が初級レベルの学生を中心としたカリキュラムであったが、近年、中・上級レベルの学生が本コースに参加するようになったため、中・上級レベルの学生にも十分な日本語指導ができるように、平成20年度に改革を行った。さらに、平成26年度には「多文化コミュニケーション3」(共通教育科目の「多文化コミュニケーションC」との合同授業)を開講した。

表Ⅱ－８ 開講科目一覧

平成26年度春学期

授業科目	担当教員	教科書	コマ/週	単位
日本語初中級1	山中和樹 村上洋子 市村葉子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	4	8
日本語初中級2	桑原陽子 村上洋子 市村葉子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	4	8
日本語中級	(日本語A)	山中和樹 プリント	1	4
	(日本語C)	桑原陽子 『中級からの日本語プロフィシエンシーライティング』	1	
日本語上級	(日本語E)	桑原陽子 プリント	1	4
	(日本語G)	膽吹覚 『日本語上級読解』	1	
はじめての漢字	桑原陽子	『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字 英語版』	1	2
はじめての作文	山中和樹	『みんなの日本語初級やさしい作文』	1	2
はじめての会話	山中和樹	『みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ』	1	2
日本事情2	膽吹覚	『越前福井いろはかるた』	1	2
多文化コミュニケーション2	小幡浩司	プリント	1	2
多文化コミュニケーション3	小幡浩司	プリント	1	2
応用日本語2	山中和樹	プリント	1	2
日本の文化	膽吹覚	『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化』	1	2

平成26年度秋学期

授業科目		担当教員	教科書	コマ/週	単位
日本語初級1		山中和樹 市村葉子 星摩美	『みんなの日本語初級Ⅰ』	4	8
日本語初級2		山中和樹 村上洋子 市村葉子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	4	8
日本語初中級		膽吹覚 村上洋子 市村葉子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	4	8
日本語中級	(日本語B)	膽吹覚	『マンガで学ぶ日本語会話術』	1	4
	(日本語D)	山中和樹	プリント	1	
日本語上級	(日本語F)	山中和樹	プリント	1	4
	(日本語H)	桑原陽子	プリント	1	
日本事情1		膽吹覚	『越前若狭いろはかるた』	1	2
多文化コミュニケーション1		小幡浩司	プリント	1	2
応用日本語1		山中和樹	DVD 『僕の生きる道』	1	2
伝統産業1		虎尾憲史	プリント	1	2

表Ⅱ－9 開講科目と受講者数（平成22～26年）

開講科目	開講年度	平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		計
		春期	秋期	春期	秋期	春期	秋期	春期	秋期	春期	秋期	
日本語初級1		—	5	—	4	—	8	—	4	—	4	25
日本語初級2		—	9	—	4	—	5	—	5	—	9	32
日本語初級3		—	—	—	4			—	—	—	—	4
日本語初中級1		7	1	5	—	8	4	9	6	4	5	49
日本語初中級2		4	—	7	—	4	—	4	—	5	—	24
日本語中級（日本語A／日本語C）		3	—	1	—	—	—	4	—	6	—	14
日本語中級（日本語B／日本語D）		—	5	—	3	—	1	—	3	—	0	12
日本語上級（日本語E／日本語G）		2	—	4	—	1	—	1	—	2	—	10
日本語上級（日本語F／日本語H）		—	0	—	0	—	0	—	0	—	0	0
はじめての漢字		3	—	0	—	1	—	1	—	1	—	6
はじめての作文		10	—	1	—	3	—	2	—	0	—	16
はじめての会話		12	—	6	—	6	—	5	—	8	—	37
日本事情1		—	4	—	4	—	4	—	3	—	0	15
日本事情2		1	—	1	—	0	—	0	—	0	—	2
多文化コミュニケーション1		—	1	—	0	—	0	—	0	—		
多文化コミュニケーション2		0	—	0	—	0	—	0	—	0	—	0
多文化コミュニケーション3		—	—	—	—	—	—	—	—	0	—	0
応用日本語1		—	0	—	1	—	0	—	3	—	0	4
応用日本語2		3	—	3	—	1	—	2	—	2	—	11

日本の文化	2	—	2	—	0	—	1	—	6	—	11
伝統産業 1	—	20	—	13	—	18	—	18	—	18	87
伝統産業 2	0	—	0	—	0	—	0	—	0	—	0

3. 運営状況

(1) プレースメントテスト

渡日前に学生の日本語力に関する調査を行うとともに、秋学期開始前にプレースメントテストを実施し、学生の日本語力に応じてクラス分けを行っている。短期プログラムは日本語力初級レベルの学生を対象としているが、この数年来、初中級～中級レベルの学生が増加し、さらに1年の留学期間に日本語能力試験合格を目指す学生が本コースに参加するようになった。また、「話す・聞く」力があり、コミュニケーションがある程度できても「読む・書く」力が不足しているケースもある。そこで平成22年度に初級・初中級の文法項目到達度を測定する問題を新規に作成して、現在に至っている。一方、中級レベル以上と判定された学生は必要に応じて中・上級用のプレースメントテスト問題で対応することとした。

(2) 授業運営

以下に、国際交流センターが開講する科目の授業運営および評価と課題について記す。

1) 日本語科目

① 「日本語初級」

「日本語初級」は短期留学プログラム生のみを対象とした授業である。週4コマを専任教員1名と非常勤講師1名のチームティーチングで行い、コーディネーターは専任教員である。

表Ⅱ-10 「日本語初級」

開講年度	科目名 [担当教員]	授業運営		評価と課題
		教科書	目標	
22年秋期 ～ 26年秋期	日本語初級 1 [今尾ゆき子] [山中和樹]*	『みんなの日本語 初級 I』	・初級の基本的な 文型と語彙の習 得	・文字習得が不十分な学生もい るので、第2週までひらがな とカタカナ学習の時間も設け ている。
22年秋期 ～ 26年秋期	日本語初級 2 [山中和樹]	『みんなの日本語 初級 I』	・初級の基本的な 文型と語彙の習 得	・第3週からディクテーション を実施したが、長音とカタカ ナ表記の誤りは最後まで出現 した。

*平成25年秋期、26年秋期担当。

② 「日本語初中級」

「日本語初中級」は短期プログラム生のみでの授業である。週4コマを専任教員1名と非常勤講師1名のチームティーチングで行い、コーディネーターは専任教員である。

表Ⅱ－11 「日本語初中級」

開講年度	科目名 [担当教員]	授業運営		評価と課題
		教科書	目標および成績評価	
22年春季 ～ 26年春季	日本語 初中級 1 [膽吹覚] [桑原陽子]* ¹⁾ [山中和樹]* ²⁾	『みんなの日本語 初級Ⅱ』	・初中級の基本的な文法・語彙の習得と円滑なコミュニケーションができるようにする。	・コース終了後全員が帰国するため、受講生に達成感を持たせるよう、留学生活に役立つ学習活動を取り入れる必要がある。
	日本語 初中級 2 [桑原陽子] [膽吹覚]* ³⁾	『みんなの日本語 初級Ⅱ』	・初中級の基本的な文法・語彙の習得と円滑なコミュニケーションができるようにする。	コース終了後全員が帰国するため、受講生に達成感を持たせるよう、留学生活に役立つ学習活動を取り入れる必要がある。
22年秋季 ～ 26年秋季	日本語 初中級 [膽吹覚]	『みんなの日本語 初級Ⅱ』	・初中級の基本的な文法・語彙の習得と円滑なコミュニケーションができるようにし、中級への準備をする。	・受講生が1名で、受講生同士の活動ができない学期もあった。 ・受講生が少数のため、きめ細かい指導ができた。 ・レベルの差が大きい学期もあり、個別の対応が迫られた。

* 1) : 平成24年度春期担当

* 2) : 平成25～26年春季担当

* 3) : 平成24年春季担当

③ 「日本語中級」

20年秋季学期から正規学部留学生や交換留学生等が受講する共通教育科目の「日本語A」～「日本語D」との合同授業となり、春学期は「日本語A」と「日本語C」、秋学期は「日本語B」と「日本語D」を履修して4単位とする。成績評価は各教科の成績をもとに担当教員2名で総合的に判断している。

表Ⅱ－12 「日本語中級」

開講年度	科目名 [担当教員]	授業運営		評価と課題
		教科書	目標	
22年春季	日本語中級 (日本語A) [山中和樹]	プリント (雑誌記事)	・擬音語・擬態語、助詞の使い分け	・漢字能力の劣る学生がいたので、漢字の読みのプリントを別途配布。 ・進度をやや遅めにした。
	日本語中級 (日本語C) [桑原陽子]	プリント	・文型・語彙の拡充 ・メールの基本的な書き方を学ぶ	・待遇表現を意識したメールの書き方や定型表現を扱ったが、まだ不十分である。

22年秋期	日本語中級 (日本語B) [膽吹覚]	プリント	・プレゼンテーションのためのスピーチ能力の向上	・ほとんどの学生は事前に準備してきていた。 ・クラスサイズも適正である。 ・個々の指導がやや不足。
	日本語中級 (日本語D) [山中和樹]	プリント (『実践日本語の作文』)	・初級文法の定着 ・レポートや論文を書く技術の習得	・作文練習の成果が認められた。 ・漢字能力に差があったので、その点を考慮して問題を作成した。
23年春期	日本語中級 (日本語A) [桑原陽子]	『大学で学ぶための日本語ライティング』	・レポート作成に必要な表現や文型を学ぶ。	・練習問題(毎回)とレポート作成(2回)を課すことで日本語力が著しく向上した。
	日本語中級 (日本語C) [山中和樹]	プリント (『速読文化エピソード』)	・速読能力の向上 ・コミュニケーション能力の向上	・読解だけでなく、口頭での発表能力を向上させることができた。 ・漢字能力に差があった。
23年秋期	日本語中級 (日本語B) [山中和樹]	プリント (雑誌記事)	・擬音語・擬態語、助詞の使い分け	・非漢字圏の学生の漢字能力に特に問題はなく、スムーズに進めた。 ・漢字の読みのプリントも別途配布。
	日本語中級 (日本語D) [膽吹覚]	『大学で学ぶための日本語ライティング』	・レポート作成に必要な表現や文型を学ぶ。	・作文能力の向上が見られた。 ・受講者数も適正で、個別の指導も行えた。
24年春期				受講者なし。
24年秋期	日本語中級 (日本語B) [膽吹覚]	『朝日新聞』掲載「ビトイーン」	・読解力、表現力の向上を図る。	・当初の目標は達成できた。 ・多様なスピーチが発表され、発表後の、日本語によるQ&Aも活発だった。
	日本語中級 (日本語D) [山中和樹]	プリント (『速読文化エピソード』)	・速読能力の向上 ・コミュニケーション能力の向上	・合同授業のため、短プロ生の漢字能力が懸念されたが、特に問題はなかった。 ・短プロ生同士の質疑応答も取り入れ、学生が発言する機会を多くできた。
25年春期	日本語中級 (日本語A) [桑原陽子]	『大学で学ぶための日本語ライティング』	・レポート作成に必要な表現や文型を学ぶ。	・全員、熱心に授業に取り組んだ。 ・初級文法が定着していないところがあった。
	日本語中級 (日本語C) [山中和樹]	プリント (雑誌記事)	・擬音語・擬態語、助詞の使い分け	・短プロ生も全員、漢字圏の学生だったので、読解に問題はなかった。 ・全員まじめに授業に取り組んだ。
25年秋期	日本語中級 (日本語B) [山中和樹]	プリント (『実践日本語の作文』)	・初級文法の定着 ・レポートや論文を書く技術の習得	・作文練習の成果が認められた。 ・非漢字圏の学生の漢字能力も高く、漢字について特に問題はなかった。

25年秋期	日本語中級 (日本語D) [膽吹覚]	『マンガで学ぶ日 本語会話術』	・会話能力の向上 を図る	・当初の授業目標は達成できた。 ・質疑応答も活発だった。
26年春季	日本語中級 (日本語A) [山中和樹]	プリント (『速読文化エピ ソード』)	・速読能力の向上 ・コミュニケー ション能力の向 上	・全員漢字圏出身で、特に読解 に問題はなかった。 ・学生同士の質疑応答も活発 だった。
	日本語中級 (日本語C) [桑原陽子]	『中級からの日本 語プロフィシエ ンシーライティ ング』	・メールの書き方 を学ぶ	・全員熱心に受講した。 ・典型的なメールの表現を学ぶ につれて、整ったメールが書 けるようになった。
26年秋期	日本語中級			受講者なし。

④ 「日本語上級」

「日本語上級」は共通教育科目の「日本語E」～「日本語H」との合同授業で、春学期は「日本語E」と「日本語G」、秋学期は「日本語F」と「日本語H」を履修して4単位とする。成績評価は各教科の成績をもとに担当教員2名で総合的に判断している。

表Ⅱ-13 「日本語上級」

開講年度	科目名 [担当教員]	授業運営		評価と課題
		教科書	目標	
22年春季	日本語上級 (日本語E) [今尾ゆき子]	『日本語上級読解』	・読解力及び文章 作成力を養う。	・熱心に授業に取り組んだ。 ・当初の目標は達成できた。
	日本語上級 (日本語G) [膽吹覚]	『大学・大学院留 学生の日本語③論 文読解編』	・文法知識を習得 し、基礎的読解 力をつける。	・共通教育との合同授業で、受講者 が多く、個別の指導ができなかつ た。
22年秋期				受講者なし
23年春季	日本語上級 (日本語E) [膽吹覚]	『日常生活の分野 別日本語表現便利 帳』	・語彙力、表現力 の向上を図る。	・導入した語彙はおおむね定着。 ・テキストの後半は扱えなかった。 ・受講者の活発な質疑応答があつ た。
	日本語上級 (日本語G) [今尾ゆき子]	『日本語上級読解』	・文章要約により 語彙力、読解 力、文章作成力 を養う。	・受講者は全員、課題をきちんと提 出し、熱心に授業に取り組んだ。 ・語彙力・表現力が格段に向上した。
23年秋期				受講者なし。
24年春季	日本語上級 (日本語E) [今尾ゆき子]	『日本語上級読解』	・文章要約により 語彙力、読解 力、文章作成力 を養う。	・全員熱心に受講した。 ・非漢字圏の短プロ生には困難が予 想されたが、目標は達成できた。
	日本語上級 (日本語G) [膽吹覚]	『朝日新聞』掲載 「ビトイーン」	・読解力、表現力 の向上を図る。	・当初の目標は達成できた。 ・学部生、中国からの交換留学生(多 くは日本語専攻)、短プロ生の混 成クラスで、日本語能力の差が大 きかった。 ・能力的に不十分な学生への支援対 策が必要である。

24年秋期				受講者なし。
25年春期	日本語上級 (日本語E) [膽吹覚]	『中上級者向け日本語教材 日本文化を読む』	・日本語で書かれた著名な小説やエッセイなどを読み、それを理解する能力を養う。	・短プロ生にはやや難しい教材だったが、他の受講生のレベルを考慮するとやむを得ない選択であった。 ・今後は、短プロ生が中級レベルの日本語クラスを再履修するなどの方策を検討すべきかもしれない。
	日本語上級 (日本語G)			受講者なし。
25年秋期				受講者なし。
26年春期	日本語上級 (日本語E) [桑原陽子]	プリント	・様々なタイプのスピーチの方法を学ぶ。	・全員熱心に受講した。 ・プレゼンテーションの質の向上が課題である。
	日本語上級 (日本語G) [膽吹覚]	『朝日新聞』掲載 「ビトイーン」	・ディベートを通じて、会話能力を涵養する。	・ディベートは回を重ねるごとに上達した。 ・グループでの協議に教員がどの程度係わるかをもっと検討しなければならない。

⑤日本語技能別科目：

技能別科目は、初級および初中級レベルの学生が受講する「はじめての漢字」「はじめての会話」「はじめての作文」の3科目が春学期に開講され、専任教員が担当している。秋学期の「日本語初級」修了時に学生から受講希望をとり、科目によって受講者数にばらつきがあるものの、原則として学生の希望どおりに受講を認めている。

表Ⅱ-14 日本語技能別科目

開講年度	科目名 [担当教員]	授業運営		評価と課題
		教科書	目標	
22年秋期 ～ 26年秋期	はじめての漢字 [今尾ゆき子] [桑原陽子]*	『みんなの日本語 初級Ⅰ 漢字英語版』	・漢字の読み方、書き方を学ぶ。 112漢字	・漢字の読みに誤表記（長音、清濁の混同など）が目立つ学生もいた。
22年秋期 ～ 26年秋期	はじめての作文 [山中和樹]	『みんなの日本語 初級やさしい作文』	・基本的な文型や表現を習得し、様々なテーマで作文を行う。	・出席・授業態度、課題提出状況は良好。 ・全員が間違いやすい箇所は、作文チェックの翌週、解説した。
22年秋期 ～ 26年秋期	はじめての会話 [山中和樹]	『みんなの日本語 初級Ⅰ』 『みんなの日本語 初級Ⅱ』	・学内・学外の会話で自分の趣味や専門など話せるようにする。	・受講者多数により、会話練習、発表の時間がとれなかった。 ・ビデオを見て、質疑応答するが、積極的に発言する学生が多かった反面、発言の少ない学生もいた。

*平成25年秋期、26年秋期担当。

2) 日本事情科目

日本事情科目は中級以上の学生を対象として、秋学期に3科目（「日本事情1」「多文化コミュニケーション1」「応用日本語1」）、春学期に4科目（「日本事情2」「多文化コミュニケーション2」「多文化コミュニケーション3」（平成26年度より）「応用日本語2」「日本の文化」）が開講されている。

表Ⅱ-15 日本事情科目

開講年度	科目名 [担当教員]	授業運営		評価と課題
		教科書	目標	
22年秋期 ～ 26年秋期	日本事情1 [今尾ゆき子] [膽吹覚]* ¹⁾	プリント（『日本を知る』） ・『留学生のための時代を読み解く上級日本語』	・日本の社会構造や文化、価値観を学ぶ。	・見学授業や俳句大会・かるた大会等に学生は積極的に取り組んだ。 ・共通教育との合同授業のため、短プロ生には難易度が高かった。
22年春期 ～ 26年春期	日本事情2 [膽吹覚]	『越前若狭いろはかるた』 プリント (新聞記事)	・福井県に関する知識を深める。 ・日本に関する知識を深める。	・宗教関係のテーマは難しかった。 ・東日本大震災に関して、学生の積極的な発言が見られた。
22年秋期 ～ 26年秋期	多文化コミュニケーション1 [山中和樹] [小幡浩司]* ²⁾	プリント	・日本人学生と留学生との質疑応答を通じて異文化との交流方法を学ぶ。	・日本人を含む学部学生との日本語力格差が懸念されたが、特に問題はなかった。 ・短プロ生の受講者はほとんどいなかった。
22年春期 ～ 26年春期	多文化コミュニケーション2 [山中和樹] [小幡浩司]* ³⁾	プリント	・日本人学生と留学生との質疑応答を通じて異文化との交流方法を学ぶ。	・短プロ生の受講者はこれまでゼロ。
26年春期	多文化コミュニケーション3 [小幡浩司]	プリント	・日本人学生と留学生との質疑応答を通じて異文化との交流方法を学ぶ。	・新規に開設されたが、短プロ生の受講者はゼロ。
22年秋期 ～ 26年秋期	応用日本語1 [中島清]* ⁴⁾ [山中和樹]	ビデオ（『僕の生きる道』）	・テレビドラマを通して日本の社会・精神風土を理解する。	・高視聴率を記録した人気ドラマは学生に好評であった。
22年春期 ～ 26年春期	応用日本語2 [山中和樹]	プリント （「仕事常識」）	・日本企業の職場マナーを学ぶ。	・受講生が多いので、電話対応の練習が十分できなかった。 ・共通教育との合同授業なので、短プロ生にはやや難しかったかもしれない。

22年春期 ～ 26年春期	日本の文化 [膽吹覚]	プリント	・日本の伝統的な遊戯を通して日本文化や日本人の心性を考える。	・学生に伝統遊戯（カルタ・百人一首など）を体験させることで授業への意欲は高まった。 ・福井県についてもっと扱いたい。
---------------------	--------------------	------	--------------------------------	---

* 1) : 平成25～26年度秋期担当

* 2) : 平成25～26年度秋期担当

* 3) : 平成25～26年度担当。ただし、平成25年度は夏季集中講義。

* 4) : 平成22年度担当。

受講者数については表Ⅱ－9 開講科目と受講者数（平成22～26 改訂）参照。

③ 「伝統産業1」「伝統産業2」

表Ⅱ－16 「伝統産業」

開講年度	科目名 [担当教員]	授業運営		評価と課題
		教科書	目標	
22年秋期 ～ 26年秋期	伝統産業1 ^{*1)} [中島清] [虎尾憲史] ^{*2)}	プリント	・福井の伝統産業を見学することで現代日本社会への理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> ・生産現場を訪問して伝統工芸士から直接話を聞くので講義では得難い知識と体験が得られる。 ・福井市郊外に限定したため、見学先の確保が難しく秋期開講のみとなっている。 ・20名近い受講者全員に説明が聞こえない（トランシーバにより解決） ・訪問先は狭い工場が多く春・秋期の分割受講が望ましいがバスの手配の関係上実現していない。 ・短プロ生以外から受講希望があるが、希望を叶える方策の検討を要する。

* 1) 「伝統産業2」（春期）：不開講。

* 2) 平成26年度担当。

4. 評価

短期プログラムで開講している全科目において、毎年学期末に、受講者に対して授業に関するアンケート調査を実施している。また、「かな教材」の渡日前送付に関しても秋学期終了時にアンケート調査を実施している。以下、教育の成果と学生の要望についてアンケート調査をもとに述べる。

(1) 教育の成果

1) 開講科目

アンケートの結果（表Ⅱ－18～Ⅱ－20）によれば、教材の選定、教員の教授法、学生への対応、

授業に対する満足度など概ね高い評価を得ている。

自由記述の欄には、中級クラスからのコメントが目立った。いずれも、楽しく、勉強になったという意味合いのコメントである。多くの学生が「日本語初級」あるいは「日本語初中級」の他に技能別科目を受講し、必修単位数10単位の倍近くを履修していることから、意欲的に日本語学習に取り組んでいるといえよう。

一方、「中級」レベルと判定される学生が本コースに参加するようになり、次の春学期には「上級」科目を受講する学生も出てきた。平成20年度から「日本語中級」、「日本語上級」は共通教育の日本語科目と合同授業となり、現在に至っている。「日本語上級」は日本語能力試験N-1取得者も受講するため、本コースの学生、特に非漢字圏の学生にとってはレベルが少し高すぎる状況にあるが、日本語能力試験を目指す漢字圏の学生にとっては有益だと思われる。また、日本事情系科目は従来、「日本事情」だけだったが、「多文化コミュニケーション」「応用日本語」「日本の文化」が開講され、文化系科目が充実し科目選択の幅が広がっている。受講者の満足度が高い「伝統産業」(表Ⅱ-12)とともに日本の文化・社会についての知識を得るのに成果をあげている。

2) 「かな教材」の渡日前送付

平成18年度から「ひらがな・かたかな」の教材冊子と発音練習用テープを渡日前の7月中に短期留学プログラムの全参加者に所属大学を通じて送付している。送付状には、渡日直後のプレースメントテストでひらがなとカタカナの確認テストを行う旨を記して、「ひらがな」の渡日前習得を半ば義務づけている。本コースは原則として日本語未習者を対象に「かな・漢字」版の教材を使用しており、本学における日本語学習をスムーズに行うためには、授業開始前に少なくとも「ひらがな」を覚えてくることが不可欠と判断されるからである。

かな教材の渡日前送付以降は多くの学生がひらがなを習得してくるようになっている。アンケート調査の結果にも、初級の学生からは「役に立った」という意見が多く、「かな教材」の渡日前送付により初級日本語学習の成果はあがっているといえよう。一方、初中級以上の学生は「送付の必要なし」「あまり役に立たなかった」というものが多い。

(2) 学生の要望

アンケートの自由記述の欄には授業に対する学生の要望が記述されている。表Ⅱ-17に自由記述を要約する。

表Ⅱ-17 授業に対する要望

科 目	自由回答（要望要約）
日本語初級	<ul style="list-style-type: none"> ・テキストの語彙が少し難しかった。 ・授業で日本の映画やアニメがあると、もっと良い。 ・簡単な読み物が読みたい。 ・進度はもっと早くてもいい。 ・文法の練習が多く、授業の進度が遅くなった。 ・もっと例文が多くてもいい。 ・副詞と助詞の練習が少ない。 ・会話練習が少ない。
日本語初中級	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと自由な会話をしたい。 ・もっと文法の練習をしたい。 ・授業の進度が早すぎた。 ・教科書に出てくる言葉だけでなく、日常生活の言葉も勉強したい。 ・図を見て答えを書く練習をしたい。
日本語中級	<ul style="list-style-type: none"> ・教材が簡単すぎた。 ・敬語の勉強をもっとしたい。
日本語上級	要望は特になし。
はじめての漢字	<ul style="list-style-type: none"> ・週1コマは少なすぎる。
はじめての会話	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと会話の練習をしたい。 ・もっとビデオを活用してほしい。
はじめての作文	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと文法について説明してほしい。 ・授業時間帯を変えてほしい。
日本事情	要望は特になし。
日本の文化	<ul style="list-style-type: none"> ・進度が遅かった。 ・かるたは楽しかった。
多文化コミュニケーション	要望は特になし。
応用日本語	<ul style="list-style-type: none"> ・教材の種類が少なかった。 ・ビジネス・マナーの現地練習をしたかった。 ・もっと新しいドラマを見たい。
伝統産業	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問時間が短かった。 ・他の学生のレポートを見て、情報を共有したい。 ・一方的に教わるのではなく、双方向の授業を望む。 ・越前焼は見るだけでなく、自分でもやってみたい。 ・訪問前にガイドブックがあれば、見た方がいい。 ・天気がよければ、外で授業を受けたい。

表Ⅱ-18 「日本語・日本事情科目」アンケート結果（平成26年度春学期）

1. このクラスについて、こたえの□に×をかいてください

	強く そう思う strongly agree	少し そう思う somewhat agree	どちらとも 言えない Neither agree or disagree	あまりそう 思わない somewhat disagree	まったくそう 思わない strongly disagree
(1) テキストや教材は満足できるものだった					
The textbooks and/or teaching materials used were satisfactory.					
初中級1（4名中4名回答）	3	1	0	0	0
初中級2（5名中5名回答）	5	0	0	0	0
中級1A（6名中6名回答）	5	0	0	1	0
中級1C（6名中6名回答）	4	2	0	0	0
上級1E（1名中1名回答）	1	0	0	0	0
上級1G（1名中1名回答）	1	0	0	0	0
はじめての作文（2名2名）	1	1	0	0	0
はじめての会話（5名中5名）	5	0	0	0	0
はじめての漢字（1名中1名）	1	0	0	0	0
応用日本語2（1名中1名回答）	1	0	0	0	0
日本の文化（1名中1名回答）	1	0	0	0	0
(2) テキストや教材の内容は理解できた					
I could understand the content of the textbooks and/or teaching materials used.					
初中級1（4名中4名回答）	4	0	0	0	0
初中級2（5名中5名回答）	5	0	0	0	0
中級1A（6名中6名回答）	5	1	0	0	0
中級1C（6名中6名回答）	5	1	0	0	0
上級1E（1名中1名回答）	0	1	0	0	0
上級1G（1名中1名回答）	0	1	0	0	0
はじめての作文（2名2名）	1	1	0	0	0
はじめての会話（5名中5名）	4	1	0	0	0
はじめての漢字（1名中1名）	1	0	0	0	0
応用日本語2（1名中1名回答）	1	0	0	0	0
日本の文化（1名中1名回答）	1	0	0	0	0
(3) 先生の声や言葉は聞き取りやすかった					
The insutrcutor spoke clearly.					
初中級1（4名中4名回答）	4	0	0	0	0
初中級2（5名中5名回答）	5	0	0	0	0
中級1A（6名中6名回答）	5	1	0	0	0
中級1C（6名中6名回答）	6	0	0	0	0
上級1E（1名中1名回答）	0	1	0	0	0
上級1G（1名中1名回答）	1	0	0	0	0
はじめての作文（2名2名）	1	1	0	0	0
はじめての会話（5名中5名）	4	1	0	0	0
はじめての漢字（1名中1名）	1	0	0	0	0
応用日本語2（1名中1名回答）	1	0	0	0	0
日本の文化（1名中1名回答）	1	0	0	0	0
(4) 先生は適切な板書を行った					
The instructor wrote clearly on the board.					
初中級1（4名中4名回答）	4	0	0	0	0
初中級2（5名中5名回答）	5	0	0	0	0
中級1A（6名中6名回答）	6	0	0	0	0
中級1C（6名中6名回答）	6	0	0	0	0
上級1E（1名中1名回答）	1	0	0	0	0
上級1G（1名中1名回答）	1	0	0	0	0
はじめての作文（2名2名）	2	0	0	0	0
はじめての会話（5名中5名）	4	0	0	1	0
はじめての漢字（1名中1名）	1	0	0	0	0
応用日本語2（1名中1名回答）	1	0	0	0	0
日本の文化（1名中1名回答）	1	0	0	0	0

(5) 先生の説明はわかりやすかった

The explanations by the instructor were easy to understand.

初中級1 (4名中4名回答)	4	0	0	0	0
初中級2 (5名中5名回答)	5	0	0	0	0
中級1A (6名中6名回答)	5	1	0	0	0
中級1C (6名中6名回答)	5	0	1	0	0
上級1E (1名中1名回答)	0	1	0	0	0
上級1G (1名中1名回答)	1	0	0	0	0
はじめての作文 (2名2名)	2	0	0	0	0
はじめての会話 (5名中5名)	4	1	0	0	0
はじめての漢字 (1名中1名)	1	0	0	0	0
応用日本語2 (1名中1名回答)	1	0	0	0	0
日本の文化 (1名中1名回答)	1	0	0	0	0

(6) 先生は学生の質問に対して適切に答えた

The instructor answered our questions properly.

初中級1 (4名中4名回答)	3	1	0	0	1
初中級2 (5名中5名回答)	5	0	0	0	0
中級1A (6名中6名回答)	6	0	0	0	0
中級1C (6名中6名回答)	6	0	0	0	0
上級1E (1名中1名回答)	1	0	0	0	0
上級1G (1名中1名回答)	1	0	0	0	0
はじめての作文 (2名2名)	1	1	0	0	0
はじめての会話 (5名中5名)	4	1	0	0	0
はじめての漢字 (1名中1名)	1	0	0	0	0
応用日本語2 (1名中1名回答)	1	0	0	0	0
日本の文化 (1名中1名回答)	1	0	0	0	0

(7) 授業のスピードが速すぎた

The tempo of the class was too fast.

初中級1 (4名中4名回答)	1	1	2	0	0
初中級2 (5名中5名回答)	1	2	1	0	0
中級1A (6名中6名回答)	0	0	2	1	3
中級1C (6名中6名回答)	0	1	1	2	2
上級1E (1名中1名回答)	0	1	0	0	0
上級1G (1名中1名回答)	0	0	0	0	1
はじめての作文 (2名2名)	0	1	0	1	0
はじめての会話 (5名中5名)	0	0	2	1	2
はじめての漢字 (1名中1名)	1	0	0	0	0
応用日本語2 (1名中1名回答)	0	0	0	1	0
日本の文化 (1名中1名回答)	0	0	0	0	1

(8) 宿題が多すぎた

There was too much homework.

初中級1 (4名中4名回答)	0	1	0	3	0
初中級2 (5名中5名回答)	0	1	1	1	2
中級1A (6名中6名回答)	0	0	3	2	1
中級1C (6名中6名回答)	0	1	2	2	1
上級1E (1名中1名回答)	0	1	0	0	0
上級1G (1名中1名回答)	0	0	0	0	1
はじめての作文 (2名2名)	0	0	1	1	0
はじめての会話 (5名中5名)	0	0	1	0	4
はじめての漢字 (1名中1名)	0	0	0	0	1
応用日本語2 (1名中1名回答)	0	0	0	0	1
日本の文化 (1名中1名回答)	0	0	0	0	1

(9) テストが多すぎた

There was too much test/or quiz.

初中級1 (4名中4名回答)	0	1	3	0	0
初中級2 (5名中5名回答)	0	0	3	0	2
中級1A (6名中6名回答)	0	0	1	3	2

中級1 C (6名中6名回答)	0	0	0	1	5
上級1 E (1名中1名回答)	0	0	0	0	1
上級1 G (1名中1名回答)	0	0	0	0	1
はじめての作文 (2名2名)	0	0	0	0	2
はじめての会話 (5名中5名)	0	0	1	0	4
はじめての漢字 (1名中1名)	1	0	0	0	0
応用日本語2 (1名中1名回答)	0	0	0	0	1
日本の文化 (1名中1名回答)	0	0	0	0	1

2. あなたは、総合的に判断して、この授業に満足しましたか。

Overall, were you satisfied with this class?

	たいへん満足 very satisfied	少し満足 somewhat satisfied	どちらとも言えない Neither satisfied nor dissatisfied	少し不満 somewhat dissatisfied	たいへん不満 very dissatisfied
初中級1 (4名中4名回答)	2	2	0	0	0
初中級2 (5名中5名回答)	5	0	0	0	0
中級1 A (6名中6名回答)	4	2	0	0	0
中級1 C (6名中6名回答)	5	1	0	0	0
上級1 E (1名中1名回答)	0	1	0	0	0
上級1 G (1名中1名回答)	1	0	0	0	0
はじめての作文 (3名3名)	1	1	0	0	0
はじめての会話 (5名中5名)	4	1	0	0	0
はじめての漢字 (1名中1名)	1	0	0	0	0
応用日本語2 (1名中1名回答)	1	0	0	0	0
はじめての作文 (2名2名)	1	0	0	0	0
はじめての会話 (5名中5名)	6	0	0	0	0
応用日本語2 (1名中1名回答)	2	1	0	0	0
日本の文化 (1名中1名回答)	1	0	0	0	0

表Ⅱ-19 「日本語・日本事情科目」アンケート結果 (平成26年度秋学期)

1. このクラスについて、こたえの□に×をかいてください

	強く そう思う strongly agree	少し そう思う somewhat agree	どちらとも言えない Neither agree or disagree	あまりそう 思わない somewhat disagree	まったくそう 思わない strongly disagree
--	---------------------------------	---------------------------------	---	---------------------------------------	--

(1) テキストや教材は満足できるものだった

The textbooks and/or teaching materials used were satisfactory.

初級1 (4名中4名回答)	4	0	0	0	0
初級2 (5名中5名回答)	3	2	0	0	0
初中級 (6名中6名回答)	5	0	1	0	0
中級1 B (3名中3名回答)	3	0	0	0	0
中級2 D (3名中3名回答)	3	0	0	0	0
応用日本語1 (3名中3名回答)	1	1	1	0	0
日本事情1 (3名中3名回答)	1	2	0	0	0
多文化コミュニケーションA (1名中1名回答)	1	0	0	0	0

(2) テキストや教材の内容は理解できた

I could understand the content of the textbooks and/or teaching materials used.

初級1	2	2	0	0	0
初級2	4	1	0	0	0
初中級	5	0	1	0	0
中級1	3	0	0	0	0
中級2	3	0	0	0	0
応用日本語1	1	1	1	0	0
日本事情1	0	3	0	0	0
多文化コミュニケーションA	1	0	0	0	0

(3) 先生の声や言葉は聞き取りやすかった

The instructor spoke clearly.

初級 1	3	1	0	0	0
初級 2	4	1	0	0	0
初中級	5	1	0	0	0
中級 1	3	0	0	0	0
中級 2	3	0	0	0	0
応用日本語 1	2	0	1	0	0
日本事情 1	3	0	0	0	0
多文化コミュニケーション A	1	0	0	0	0

(4) 先生は適切な板書を行った

The instructor wrote clearly on the board.

初級 1	3	1	0	0	0
初級 2	3	1	0	0	0
初中級	5	1	0	0	0
中級 1	3	0	0	0	0
中級 2	2	1	0	0	0
応用日本語 1	0	2	1	0	0
日本事情 1	1	2	0	0	0
	1	0	0	0	0

(5) 先生の説明はわかりやすかった

The explanations by the instructor were easy to understand.

初級 1	1	3	0	0	0
初級 2	4	1	0	0	0
初中級	5	1	0	0	0
中級 1	3	0	0	0	0
中級 2	3	0	0	0	0
応用日本語 1	2	0	1	0	0
日本事情 1	3	0	0	0	0
多文化コミュニケーション A	1	0	0	0	0

(6) 先生は学生の質問に対して適切に答えた

The instructor answered our questions properly.

初級 1	3	1	0	0	0
初級 2	3	2	0	0	0
初中級	5	1	0	0	0
中級 1	3	0	0	0	0
中級 2	3	0	0	0	0
応用日本語 1	2	0	1	0	0
日本事情 1	3	0	0	0	0
多文化コミュニケーション A	1	0	0	0	0

(7) 授業のスピードが速すぎた

The tempo of the class was too fast.

初級 1	0	3	1	0	0
初級 2	0	1	2	2	1
初中級	1	0	3	0	2
中級 1	0	0	2	1	0
中級 2	0	1	1	0	1
応用日本語 1	0	1	2	0	0
日本事情 1	0	1	1	1	0
多文化コミュニケーション A	0	0	0	0	1

(8) 宿題が多すぎた

There was too much homework.

初級 1	2	0	1	1	0
初級 2	0	0	3	1	1
初中級	0	0	3	1	2
中級 1	0	0	1	1	1
中級 2	0	0	1	0	2

応用日本語 1	0	0	2	1	0
日本事情 1	0	0	2	1	0
多文化コミュニケーション A	0	0	0	1	0

(9) テストが多すぎた

There was too much test/or quiz.

初級 1	0	1	2	1	0
初級 2	0	2	1	0	2
初中級	1	0	2	0	3
中級 1	0	0	1	1	1
中級 2	0	0	1	0	2
応用日本語 1	0	0	2	1	0
日本事情 1	0	0	2	0	1
多文化コミュニケーション A	0	0	0	0	1

2. あなたは、総合的に判断して、この授業に満足しましたか。

Overall, were you satisfied with this class?

	たいへん満足 very satisfied	少し満足 somewhat satisfied	どちらとも言えない Neither satisfied nor dissatisfied	少し不満 somewhat dissatisfied	たいへん不満 very dissatisfied
初級 1	3	1	0	0	0
初級 2	4	1	0	0	0
初中級	5	1	0	0	0
中級 1	3	0	0	0	0
中級 2	3	0	0	0	0
応用日本語 1	2	0	1	0	0
日本事情 1	1	2	0	0	0
多文化コミュニケーション A	1	0	0	0	0

表Ⅱ-20 「伝統産業」アンケート結果 (平成26年度秋学期)

1. このクラスについて、こたえの□に×をかくて下さい

	強く そう思う strongly agree	少し そう思う somewhat agree	どちらとも言えない Neither agree or disagree	あまりそう 思わない somewhat disagree	まったくそう 思わない strongly disagree
(1) 教材は満足できるものであった。 The leaflets or explanatory materials used were satisfactory.	15	3	0	0	0
(2) 教材、配布資料の内容は理解できた。 I could understand the content of the leaflets or explanatory materials used.	14	4	0	0	0
(3) 見学時の説明は満足できるものであった。 The explanations during the visits were satisfactory.	14	4	0	0	0
(4) 見学時の英語通訳は満足できるものであった。 English interpretations during the visit were satisfactory.	12	6	0	0	0
(5) 教員は質問に適切に答えた。 The instructor answered our questions properly.	14	4	0	0	0
(6) 宿題 (報告書) が多すぎた。 There was too much homework (reports)	3 too many	4 a bit many	11 proper	0 a bit few	0 too few
(7) 工場見学件数はどうでしたか。 How was the number of the visits ?	1 too many	2 a bit many	9 proper	5 a bit few	1 too few
(8) どの見学先が役に立ちましたか。 Which visit was most useful for you ? (fill in 1, 2, 3 on priority basis when you choose more than one visit)	<input type="checkbox"/> Echizen Shikki (Lacquer Ware) <input type="checkbox"/> Echizen Uchihamono (Cutley) <input type="checkbox"/> Soba Dojo (Soba Noodle Training Center) <input type="checkbox"/> Echizen Washi (Japanese traditional paper) <input type="checkbox"/> Echizen Takeningyo (Bamboo Dolls) <input type="checkbox"/> Echizen Yaki (Pottery)				
(9) 全般にこの講座に満足しましたか。 Overall, were you satisfied with this class?	14 very satisfied	4 somewhat satisfied	0 neither satisfied nor dissatisfied	0 somewhat dissatisfied	0 very dissatisfied

(10) 他に訪問したい産業があったら書いてください。

Write down any other field (s) of industry where you wanted to visit.

丸岡城、京都、奈良、越前焼き、東京、音楽体験、甘いものを食べたい、日本のお菓子を作りたい、

(11) その他コメントがあれば、何でも書いてください。

If you have any comments about this class, feel free to write them down below

1) 天気がよければ、外で授業を受けたいです。

5. 課題

(1) 学生の渡日時日本語力とクラス編成

学生の渡日までに、日本語学習時間数および日本語能力テスト結果など学生の日本語力に関する情報はこれまでも収集してきているが、数年前から本コースに既習者が参加するようになってきた。日本語既習者の学習歴については、使用教科書、学習内容、日本語クラスのレベル等、より詳細な情報が必要になってきている。一時期、既習者の日本語力に関する自己認識と国際交流センターが行うプレースメントテストの結果に基づくレベル判定・クラス配属との間に齟齬が生じ、クラス変更を希望する学生が出てきたが、平成22年以降はそのようなケースはほとんどない。(表Ⅱ-21)。

表Ⅱ-21 プレースメントテスト結果に基づくクラス編成

年度	受講者数	初級	初中級	中級	上級
平成22年度	20	14	1	5	0
平成23年度	15	12	0	3	0
平成24年度	18	13	4	1	0
平成25年度	18	9	6	3	0
平成26年度	18	13	5	0	0

平成23年度のプレースメントテストでは、「初級」12名、「初中級」0名、「中級」3名となったので、初中級クラスを編成しない代わりに、初級クラスを3つに分けた。

平成20年度から少数の中・上級学生が受講できる「日本語中級」と「日本語上級」を共通教育の中級クラス(「日本語A(中級)」～「日本語D(中級)」)、上級クラス(「日本語E(上級)」～「日本語H(上級)」)と合同授業の形式で開講し、現在に至っている。同様に、中・上級者が1年間で日本語・日本事情科目10単位を取得できるよう、「多文化コミュニケーション1、2」「応用日本語1、2」「日本の文化」を開講した。さらに、平成26年度には「多文化コミュニケーション3」も開講され、短プロ生のためにさらなる便宜を図っている。

(2) 中級・上級者学生の履修

中級・上級と判定された学生は合同授業の「日本語中級」あるいは「日本語上級」クラスを受講することになるが、非漢字圏の学生は授業についていくのが困難な場合が多い。とりわけ、中級レベルと判定された非漢字圏の学生が第1期(秋期)に「日本語中級」を履修後、第2期(春期)に「日本語上級」を受講する場合は厳しい状況に置かれる。上級クラスは日本語能力N-1レベルの漢字圏学生も受講し、テキストは読解・作文が中心となるため、漢字語彙力に劣る上に会話やコミュニケーションの上達を希望する非漢字圏の学生は授業に対する満足度が低くなる傾向にある。また、日本語上級レベルの学生でも、取得単位数を満たす必要もあり、渡日直後の秋学期は中級日本語を履修するように勧めている。また、国際課とも連携して、「日本事情」「日本の文化」「多文化コミュニケーション」「応用日本語」など日本事情科目を選択するよう履修指導を行っている。このような状況下において満足度の高い日本語教育を行うために、既習者の日本語学習に関する予備調査項目(日本語学習の目的、日本語学習時間、使用教材など)

を整備し、提携校に対して本プログラム参加者に関する詳細な情報提供を求むることが必要である。

2-3. 日韓共同理工系学部留学生プログラム

平成15年4月に本学の留学生センターが省令化されたのを機に、文部科学省高等教育局留学生課学部留学生係より、日韓共同理工系学部留学生受入事業に関する事務連絡文書が平成15年6月12日付で届き、本学留学生センターに日韓共同理工系学部留学生プログラム（以下「日韓プログラム」と称す）を開設することとなった。本事業は平成10年に日韓両国首脳により発表された日韓共同宣言に基づき実施されている事業であるが、本学は、平成16年10月受入の第5期生から対応することとなった。本センターでは、日韓プログラムのカリキュラムを作成し、受入態勢を整えると同時に、平成15年以降毎年「日韓共同理工系学部留学生受入れ可能数等調査票」により受入可能である旨の回答をしているが、これまで留学生受入の実績はない。

2-4. 全学向け日本語コース

(1) 目的

全学向け日本語コースは、福井大学で学ぶすべての留学生に対して、日常生活でのコミュニケーション能力、及び、勉学や研究活動に必要な日本語能力を養成することを目的とする。本コースはいわゆる補講であり、単位認定されず、その受講料は徴収していない。

(2) 開講時期

各学期14週間のコースとして開講している。通常であれば、前期は4月第3週から7月第4週までの14週間、後期は10月第3週から翌年1月第4週までの14週間、それぞれ開講している。正規課程より1週間遅れて開講したのは、4月あるいは10月に渡日したばかりの留学生が初めての日本での生活に少し慣れた時期に、余裕をもって手続きができるようにとの配慮からである。なお、福井大学の正規の課程の授業であれば、各期15週が確保されているが、本コースはいわゆる補講であり、その対象外と考えている。

(3) 教室

本コースは、福井大学文京キャンパス国際交流センターで開講されている。教室は、センター1階R111（定員20名）、R112（定員8名）、同2階R121（定員15名）の3教室を使用している。

(4) 受講対象者、並びに受講者の所属分布

本学で学ぶすべての留学生並びに外国人教職員を対象とする。本コースの受講者を所属別にみると、例年、工学研究科の大学院生・研究生が全体の約70～80%を占める。その1例として、平成26年度後期のデータを表Ⅱ-22として掲げる。

表Ⅱ-22 平成26年度後期・全学向け日本語コース受講者の所属別人数

所 属	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合 計
工学研究科大学院生	8	4	4	7	23
工学研究科研究生	0	1	1	1	3
教員研修生	0	0	3	0	3
短期留学プログラム生	1	0	0	0	1
日本語研修特別コース生	1	0	0	0	1
外国人教職員	2	3	0	1	6
合 計	12	8	8	9	37

(数字は平成26年10月時点の登録者数)

(5) 受講の申請方法

①新規に受講を希望する場合—プレースメントテスト—

新たに本コースの受講を希望する学生は、必ずプレースメントテストを受験しなければならない。前期は4月第2金曜日、後期は10月第2金曜日に、それぞれプレースメントテスト(筆記)を実施し、その結果に基づいて1レベルに限定して受講を認めている。なお、何らかの理由によって渡日が遅れた留学生に対しては、前期は4月第3金曜日、後期は10月第3金曜日に、それぞれ第2回のプレースメントテスト(筆記)を実施し対応している。

表Ⅱ-23 プレースメントテスト受験者数

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合 計
平成22年度前期	3	3	8	2	16
平成22年度後期	12	2	4	3	21
平成23年度前期	2	2	3	5	14
平成23年度後期	10	1	4	3	18
平成24年度前期	1	0	5	4	10
平成24年度後期	12	1	0	2	15
平成25年度前期	1	0	7	7	15
平成25年度後期	8	2	2	3	15
平成26年度前期	4	2	7	3	16
平成26年度後期	11	2	3	0	16
合 計	66	15	43	32	156
平 均	6.6	1.5	4.3	3.2	15.6

表Ⅱ-2に示したとおり、平成22～26年度に実施したプレースメントテストの受験者数は、平均して1回に15.6名であった。しかし、この数字は平成19～21年度の20名より4.4名の減少である。

このプレースメントテストの受験者の中には、嘗て短期留学プログラムに参加し、そこで1年間、日本語(初中級レベルまで)を学習した経験をもつ留学生も含まれている。彼らは、短期留学プログラム終了後、一旦帰国し、その後、再度渡日し、本学の大学院工学研究科博

士前期課程の入学試験に合格して、本学の正規の大学院生として入学する。このように「短期留学プログラム→本学工学研究科大学院生」というコースを辿る留学生は、毎年一定数（約4、5名）存在する。彼らは短期留学プログラムにおいて、既に初中級レベルの日本語能力を身に付けているが、再来日までに約半年のブランクがあるために、彼らが本コースを希望する場合はプレースメントテストの受験を義務付けている。「短期留学プログラム→本学工学研究科大学院生」というコースを辿る留学生は日本語の学習意欲が高く、大学院生となつてからは本コースに参加し、日本語学習に励むものが多い。その意味において、本コースは短期留学プログラムの日本語教育と連携して、こうした進路を辿る留学生の日本語教育にも対応している。また、毎年後期に開講している日本語研修コースは本コースの日本語Ⅰと合同クラスで運営している。彼らは日本語研修コース終了後に、来期の全学向け日本語クラスの配属を決められるので、本コースのプレースメントテストは免除されている。

②継続して受講する場合

前学期に全学向け日本語コースを受講し、新学期も継続して本コースの受講を希望する留学生は、所定の期間内に、国際課に置かれた申請用紙に署名することで、その申請が受理される。具体的には、前学期の修了テストで合格し、次学期も継続して本コースの受講を希望する学生は、プレースメントテストを受験せずに、その1つ上のレベルのクラスを受講できる。また、前学期の修了テストで不合格となったが、次学期も継続して受講を希望する学生は、プレースメントテストを受験せずに、前学期と同じレベルを再受講してもよい。また、あらためてプレースメントテストを受けて、前学期より1つ上のレベルと判定された場合はそのレベルの受講が認められる。なお、日本語Ⅳは修了テストの合否に関わらず、再履修を許可している。

表Ⅱ-24 継続受講学生数、並びに登録率

		I	II	III	IV	合計
平成22年度 前期	登録可能人数	7	15	11	17	50
	登録人数	4	12	4	11	31
	登録率 (%)	57	80	36	65	62
平成22年度 後期	登録可能人数	8	6	13	17	44
	登録人数	2	5	10	10	27
	登録率 (%)	25	83	77	59	61
平成23年度 前期	登録可能人数	3	18	9	20	50
	登録人数	3	17	7	12	39
	登録率 (%)	100	94	78	60	78
平成23年度 後期	登録可能人数	3	16	7	17	43
	登録人数	1	10	3	8	22
	登録率 (%)	33	63	43	47	51
平成24年度 前期	登録可能人数	1	19	3	11	34
	登録人数	1	12	0	9	22
	登録率 (%)	100	63	0	81	65

平成24年度 後期	登録可能人数	1	6	5	17	29
	登録人数	1	1	5	13	20
	登録率 (%)	100	17	100	76	69
平成25年度 前期	登録可能人数	7	5	5	13	30
	登録人数	2	4	4	5	15
	登録率 (%)	29	80	80	38	43
平成25年度 後期	登録可能人数	2	1	4	16	23
	登録人数	1	1	2	6	10
	登録率 (%)	50	100	50	38	43
平成26年度 前期	登録可能人数	4	14	5	9	32
	登録人数	2	12	3	4	21
	登録率 (%)	50	86	60	44	65
平成26年度 後期	登録可能人数	1	8	12	17	38
	登録人数	0	3	4	5	12
	登録率 (%)	0	38	33	29	32
合 計	登録可能人数	37	108	71	154	370
	登録人数	17	77	42	83	219
	登録率 (%)	46	71	59	54	59

表Ⅱ-24は平成22～26年度の継続受講学生数とその登録率を示したものである。この表によると、この5年間は、全体では平均して59%の受講生が継続受講を申請している。この59%という数字は、平成19～21年度の3年間の平均値70%より11%減少している。

(6) 教室運営

全学向け日本語コースは、コース全体を統括する総合コーディネーター（担当者：膽吹）のもと、科目ごとにセンター専任教員1名がコーディネーターとして配置されている。そして、その科目ごとのコーディネーターは、実際に授業を担当する謝金講師とともに、シラバス作成をはじめ、教科書の選定、授業の進度計画、修了テスト、評価などに携わり、教室運営が円滑に進むよう務めている。

(7) 開講科目

平成22～26年度は学期ごとに日本語Ⅰ、日本語Ⅱ、日本語Ⅲ、日本語Ⅳの4科目を通常開講科目として開講した。日本語Ⅰはいわゆる初級レベルに、日本語Ⅱは初中級レベルに、日本語Ⅲは中級（前期）レベルに、日本語Ⅳは中級（後期）レベルに、それぞれほぼ相当する。この5年間に開講された科目ごとの概要を記すと表Ⅱ-25の如くである。なお、平成26年度春より、謝金講師予算削減のために日本語Ⅰ・日本語Ⅱともに週5コマから週4コマに変更（削減）された。ただし、後期の日本語Ⅰは日本語研修コースと合同クラスなので、週5コマである。

表Ⅱ-25 通常開講科目等一覧

〈平成22年度・前期〉

科目名	コマ／週	教科書	コーディネーター	担当教員
日本語Ⅰ	5	みんなの日本語初級Ⅰ	今尾ゆき子	沢崎幸江、酢谷尚子、村上洋子
日本語Ⅱ	5	みんなの日本語初級Ⅱ	桑原陽子	沢崎幸江、高瀬公子、市村葉子、
日本語Ⅲ	4	みんなの日本語中級Ⅰ	膽吹覚	市村葉子、斎藤ますみ、沢崎幸江、酢谷尚子
日本語Ⅳ	4	中級日本語文法要点整理ポイント20	山中和樹	高瀬公子、斎藤ますみ

〈平成22年度・後期〉

科目名	コマ／週	教科書	コーディネーター	担当教員
日本語Ⅰ	5	みんなの日本語初級Ⅰ	桑原陽子	沢崎幸江、敷田紀子
日本語Ⅱ	5	みんなの日本語初級Ⅱ	今尾ゆき子	斎藤ますみ、高瀬公子
日本語Ⅲ	4	みんなの日本語中級Ⅰ	膽吹覚	斎藤ますみ、高瀬公子
日本語Ⅳ	4	中級を学ぼう中級中期	山中和樹	敷田紀子、酢谷尚子、村上洋子

〈平成23年度・前期〉

科目名	コマ／週	教科書	コーディネーター	担当教員
日本語Ⅰ	5	みんなの日本語初級Ⅰ	今尾ゆき子	高瀬公子、小野知恵美
日本語Ⅱ	5	みんなの日本語初級Ⅱ	桑原陽子	高瀬公子、斎藤ますみ
日本語Ⅲ	4	みんなの日本語中級Ⅰ	膽吹覚	沢崎幸江、敷田紀子、村上洋子
日本語Ⅳ	4	中級を学ぼう中級前期	山中和樹	敷田紀子、沢崎幸江、村上洋子

〈平成23年度・後期〉

科目名	コマ／週	教科書	コーディネーター	担当教員
日本語Ⅰ	5	みんなの日本語初級Ⅰ	桑原陽子	沢崎幸江、敷田紀子
日本語Ⅱ	5	みんなの日本語初級Ⅱ	今尾ゆき子	高瀬公子、小野知恵美
日本語Ⅲ	4	みんなの日本語中級Ⅰ	膽吹覚	市村葉子、斎藤ますみ、高瀬公子
日本語Ⅳ	4	中級で学ぼう中級中期	山中和樹	酢谷尚子、村上洋子、市村葉子、斎藤ますみ

〈平成24年度・前期〉

科目名	コマ／週	教科書	コーディネーター	担当教員
日本語ⅡA	5	みんなの日本語初級Ⅱ	今尾ゆき子	高瀬公子、小野知恵美
日本語ⅡB	5	みんなの日本語初級Ⅱ	桑原陽子	斎藤ますみ、高瀬公子、敷田紀子、沢崎幸江
日本語Ⅲ	4	みんなの日本語中級Ⅰ	膽吹覚	敷田紀子、村上洋子、斎藤ますみ、市村葉子
日本語Ⅳ	4	中級を学ぼう中級中期	山中和樹	酢谷尚子、村上洋子、沢崎幸江、市村葉子

〈平成24年度・後期〉

科目名	コマ／週	教科書	コーディネーター	担当教員
日本語Ⅰ	5	みんなの日本語初級Ⅰ	桑原陽子	桑原陽子、敷田紀子、 沢崎幸江
日本語Ⅱ	5	みんなの日本語初級Ⅱ	今尾ゆき子	高瀬公子、小野知恵美
日本語Ⅲ	4	みんなの日本語中級Ⅰ	膽吹覚	市村葉子、斎藤ますみ、 高瀬公子
日本語Ⅳ	4	日本語上級への扉	山中和樹	斎藤ますみ、高瀬公子、 村上洋子

〈平成25年度・前期〉

科目名	コマ／週	教科書	コーディネーター	担当教員
日本語Ⅰ	5	みんなの日本語初級Ⅰ	桑原陽子	小野知恵美、高瀬公子、 沢崎幸江
日本語Ⅱ	5	みんなの日本語初級Ⅱ	桑原陽子	高瀬公子、小野知恵美、 星摩美
日本語Ⅲ	4	みんなの日本語中級Ⅰ	膽吹覚	斎藤ますみ、村上洋子
日本語Ⅳ	4	上級学習者のための日本語読解 ワークブック	山中和樹	斎藤ますみ、高瀬公子、 星摩美

〈平成25年度・後期〉

科目名	コマ／週	教科書	コーディネーター	担当教員
日本語Ⅰ	5	みんなの日本語初級Ⅰ	桑原陽子	沢崎幸江、敷田紀子
日本語Ⅱ	5	みんなの日本語初級Ⅱ	桑原陽子	高瀬公子、小野知恵美、 星摩美
日本語Ⅲ	4	みんなの日本語中級Ⅰ	膽吹覚	高瀬公子、斎藤ますみ
日本語Ⅳ	4	みんなの日本語中級Ⅱ	山中和樹	斎藤ますみ、高瀬公子、 星摩美

〈平成26年度・前期〉

科目名	コマ／週	教科書	コーディネーター	担当教員
日本語Ⅰ	4	みんなの日本語初級Ⅰ	桑原陽子	澤崎幸江、敷田紀子、 高瀬公子
日本語Ⅱ	4	みんなの日本語初級Ⅱ	桑原陽子	澤崎幸江、敷田紀子、 高瀬公子
日本語Ⅲ	4	みんなの日本語中級Ⅰ	膽吹覚	酢谷尚子、斎藤ますみ、 市村葉子
日本語Ⅳ	4	中級日本語文法要点整理ポイント20	山中和樹	酢谷尚子、村上洋子

〈平成26年度・後期〉

科目名	コマ／週	教科書	コーディネーター	担当教員
日本語Ⅰ	5	みんなの日本語初級Ⅰ	桑原陽子	桑原陽子、敷田紀子、 沢崎幸江
日本語Ⅱ	4	みんなの日本語初級Ⅱ	桑原陽子	小野知恵美、市村葉子、 高瀬公子
日本語Ⅲ	4	みんなの日本語中級Ⅰ	膽吹覚	小野知恵美、斎藤ますみ、 高瀬公子
日本語Ⅳ	4	わたしの見つけた日本	山中和樹	星摩美、斎藤ますみ、 高瀬公子

(8) 受講者数の推移

平成22年度から平成26年度までの5年間に、本コース通常科目を受講した学生数を学期ごとに平均すると、40.7名であった。この期間の本学の留学生総数の平均が206名であるから、福井大学に在籍する留学生の5人に1人(20%)が本コース通常科目を受講した計算になる。その意味において全学向け日本語コースは、国際交流センターが実施する日本語教育の中で最大の受け皿となっている。また、すべての科目にわたって合格率が5割前後である背景として、本コースの受講者の多くが工学研究科の大学院生であり、彼らは学期末レポートあるいは年度末の学位論文執筆のために、学期後半に入ると止むを得ず授業を欠席しがちになることが考えられる。年度別・科目別の受講者数と合格者数は表Ⅱ-26のとおりである。

表Ⅱ-26 全学向け日本語コースの科目別・年度別の受講生数の推移

			I	II	III	IV	合計
平成22年度	前期	受講者数	8	13	16	11	48
		合格者数	6	8	6	3	23
		合格率(%)	75	62	38	27	48
	後期	受講者数	14	7	15	15	51
		合格者数	8	2	7	5	22
		合格率(%)	57	29	47	33	43
平成23年度	前期	受講者数	6	17	10	19	52
		合格者数	3	2	4	4	13
		合格率(%)	50	12	40	21	25
	後期	受講者数	10	11	7	9	37
		合格者数	9	1	5	2	17
		合格率(%)	90	9	71	22	46
平成24年度	前期	受講者数	0	18	6	12	36
		合格者数	0	10	6	5	21
		合格率(%)	0	56	100	42	58
	後期	受講者数	11	4	5	15	35
		合格者数	5	3	3	4	15
		合格率(%)	45	75	60	27	43
平成25年度	前期	受講者数	3	5	11	9	28
		合格者数	1	5	8	4	18
		合格率(%)	33	100	73	44	46
	後期	受講者数	15	4	6	11	36
		合格者数	10	2	3	2	17
		合格率(%)	67	50	50	18	47
平成26年度	前期	受講者数	6	14	13	13	46
		合格者数	4	10	7	8	29
		合格率(%)	67	71	54	62	63
	後期	受講者数	12	9	8	9	38
		合格者数	7	6	2	1	16
		合格率(%)	58	67	25	11	42

(9) 修了テスト

全学向け日本語コースは単位が認定される正規のプログラムではないが、学期末には修了テストを実施し、その結果を秀・優・良・可・不可で評価している。また、本コースの修了証明書を希望する留学生には国際交流センター長名で修了証明書（日本語版・英語版）を交付している。

(10) 情報公開

平成26年度現在、国際交流センターでは本センターのホームページでシラバスなどを公開し、本学で学ぶ留学生だけではなく、より広く学外にもその情報を公開し、提供している。

(11) 松岡キャンパスの日本語補講

平成22～26年度に、松岡キャンパスでは毎年2科目ずつ日本語補講が開講された。その詳細は表Ⅱ-27の通りである。

表Ⅱ-27 松岡キャンパス日本語補講の概要

〈平成22年度〉

科目名	コマ数	教科書	受講者数	担当教員
日本語課外補講（初級コース）	1／週	みんなの日本語初級Ⅰ	9	定啓子
日本語課外補講（中級コース）	2／週	みんなの日本語初級Ⅱ	4	森田智子

〈平成23年度〉

科目名	コマ数	教科書	受講者数	担当教員
日本語課外補講（初級コース）	1／週	みんなの日本語初級Ⅰ	9	定啓子
日本語課外補講（中級コース）	2／週	みんなの日本語初級Ⅱ	2	森田智子

〈平成24年度〉

科目名	コマ数	教科書	受講者数	担当教員
日本語課外補講（初級コース）	2／週	みんなの日本語初級Ⅰ	11	定啓子
日本語課外補講（中級コース）	2／週	みんなの日本語初級Ⅱ	3	森田智子

〈平成25年度〉

科目名	コマ数	教科書	受講者数	担当教員
日本語課外補講（初級コース）	2／週	みんなの日本語初級Ⅰ	6	定啓子
日本語課外補講（中級コース）	2／週	みんなの日本語初級Ⅱ	2	森田智子

〈平成26年度〉

科目名	コマ数	教科書	受講者数	担当教員
日本語課外補講（初級コース）	2／週	みんなの日本語初級Ⅰ	6	定啓子
日本語課外補講（中級コース）	2／週	みんなの日本語初級Ⅱ	2	森田智子

(12) 評価と課題

平成22～26年度は、前回の自己点検評価報告書（19～21年度）と比較して、プレースメント

テスト受験者（平均値）は20名→15.6名に、継続受講率は70%→59%へ、学期ごとの受講生数（平均値）は65名→40.7名に、それぞれ大きく減少している。この背景には、まず本学在籍留学生総数が231名（平成21年度）→191名（平成26年度）へと減少していること、次に平成22年度から開始した日本語能力試験対策講座へ学習者が流れたことなどが考えられるが、本コース自体にも反省すべき点は多々あるだろう。今後は授業内容や開講時間などについて、受講生の視点に立った見直しを検討し、より多くの留学生に積極的に参加してもらえるような科目に再編成する必要があるだろう。

2-5. 日本語能力試験対策講座

平成21年度後期に日本語能力試験対策クラスが臨時に開講されたが、その後、定期的の開講されるようになり、現在に至っている。コマ数はN-1、N-2コースとも30コマである。

うち8コマは模擬試験（4コマ）とその解説（4コマ）に当てている。日本語能力試験の数週間前に2日に分けて、実施している。

表Ⅱ-28 日本語能力試験対策クラスの概要

	クラス	開講時期	担当教員	教科書	受講者数	受験者数	合格者数	不合格者数	合格率
平成22年 春期	N-1	4.13~7.3	村上洋子	『にほんご500問』（上級）、 日本語能力試験1級過去問題	11	11	9	2	82
	N-2	4.12~7.3	齋藤ますみ	『にほんご500問』（中級）、 その他プリント	8	5	5	0	100
平成22年 秋期	N-1	9.15~12.1	村上洋子	『にほんご500問』（上級）、 日本語能力試験1級過去問題	11	10	5	5	50
	N-2	9.15~12.1	齋藤ますみ	『にほんご500問』（中級）、 その他プリント	4	4	1	3	25
平成23年 春期	N-1	4.11~6.29	村上洋子	『にほんご500問』（上級）、 日本語能力試験1級過去問題	12	10	3	7	30
	N-2	4.11~6.29	齋藤ますみ	『にほんご500問』（中級）、 その他プリント	8	8	6	2	75
平成23年 秋期	N-1	9.13~11.29	村上洋子	『にほんご500問』（上級）、 日本語能力試験1級過去問題	11	11	4	7	36
	N-2	9.13~11.29	齋藤ますみ	『にほんご500問』（中級）、 その他プリント	5	4	3	1	75
平成24年 春期	N-1	4.9~6.30	小野知恵美	『日本語総まとめN1文法』、 『同 語彙』その他	16	14	11	3	79
	N-2	4.12~6.28	星摩美	『日本語総まとめN2文法』、 『同 語彙』その他	12	11	7	4	64
平成24年 秋期	N-1	9.12~11.28	小野知恵美	『日本語総まとめN1文法』、 『同 語彙』その他	14	13	6	7	46
	N-2	9.13~11.30	星摩美	『日本語総まとめN2文法』、 『同 語彙』その他	6	5	5	0	100
平成25年 春期	N-1	4.8~7.1	小野知恵美	『日本語総まとめN1文法』、 『同 語彙』その他	20	19	6	13	32
	N-2	4.11~7.5	星摩美	『日本語総まとめN2文法』、 『同 語彙』その他	16	13	9	4	69
	N-3	不開講				1	0	1	0

平成 25年 秋期	N-1	9.10~11.27	小野知恵美	『日本語総まとめN1文法』、 『同 語彙』その他	15	13	5	8	38
	N-2	9.10~11.27	星摩美	『日本語総まとめN2文法』、 『同 語彙』その他	7	7	5	2	71
平成 26年 春期	N-1	4.16~7.4	小野知恵美	『日本語総まとめN1文法』、 『同 語彙』その他	24	22	12	10	55
	N-2	4.14~7.2	星摩美	『日本語総まとめN2文法』、 『同 語彙』その他	25	25	19	6	76
平成 26年 秋期	N-1	9.10~12.5	小野知恵美	『日本語総まとめN1文法』、 『同 語彙』その他	12	11	2	9	18
	N-2	9.10~12.3	星摩美	『日本語総まとめN2文法』、 『同 語彙』その他	3	2	2	0	100

注：平成22～23年度の受験者数は個人申込者数
平成24～26年度の受験者数は団体申込み者数

平成21年度後期に臨時に開講した日本語能力試験対策クラスは、受講目標が明確なために、受講生の学習意欲は極めて高く、教員・留学生ともに、今後も継続して開講されることを希望する声が上がった。そこで、翌22年度からは、その名称を日本語能力試験対策講座と改称し、国際交流センターの第2期中期目標・中期計画に位置づけ、全学向け日本語コースの新たな講座として再出発することになり、現在に至っている。

7月と12月に実施される日本語能力試験のN-1かN-2を必ず受験することを受講資格の条件としているが、あまりにもレベルが低い受講生がいると、進度が遅くなるので、プレースメントテスト（ただし、文法・語彙、読解のみ）を実施して、受講生のレベルを確保する方策を取った。受講レベルに達しない学生は、もっと学力をつけた後、次期の対策講座を受講したり、N-1クラスからN-2クラスに変更するよう、指導した。ただ、N-2合格者でありながら、N-1クラスのレベルに達しない学生もいたので、N-2合格者ならば、無条件にN-1クラスを受講できるように条件を改定した。

また、受験は個人による出願としていたので、日本語能力試験の受験結果を知らせるように指導していたものの、中には帰国して、それっきり連絡が取れない学生もいて、結果が不明のケースもあった。

そこで、平成24年春期より、国際交流センターから団体受験の申し込みをすることにした。学生の受験結果を確実に把握するためである。

また、個人申し込みの場合、受験会場が福井以外になることもあったが、団体受験の申し込みにより、受験会場が福井大学になり、学生にとっても便利になった。

半面、デメリットもある。インターネットによる成績閲覧や成績証明書の申請が個人でできなくなり、国際交流センターを通さなければならなくなったことである。また、受験者の増加により、受験申し込み手続き作業が担当教員一人では負担しきれなくなってきた。そこで、平成27年度からは団体受験申し込み手続きは国際課に担当してもらうことが検討されている。

ところで、受験資格に日本語能力試験受験を条件にしているが、受講生の都合により、受験していないケースもあった。また、N-2クラスの受講生がN-3を受験したケースもある。N-3以下の対策講座がないので、今後もこのようなケースが出てくるかもしれない。

3. 全学向けの教育

3-1. 共通教育

平成22～26年度までに、国際交流センター教員が担当した共通教育科目について、担当教員一覧を表Ⅱ-29として、受講者数を表Ⅱ-30として、それぞれ示す。なお、日本語科目については、学期初めにプレースメントテストを実施し、その結果によって、中級・上級に振り分けている。ただし、3年次編入生で日本語科目を希望する学生については、プレースメントテストを課さずに、上級を受講するよう指導している。

表Ⅱ-29 共通教育科目担当教員一覧

科目群	科目名	単位	担当教員				
			平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
基礎教育科目	日本語A（中級）	2	山中	桑原	山中	桑原	山中
	日本語B（中級）	2	膽吹	山中	膽吹	山中	膽吹
	日本語C（中級）	2	桑原	山中	桑原	山中	桑原
	日本語D（中級）	2	山中	膽吹	山中	膽吹	山中
	日本語E（上級）	2	今尾	膽吹	今尾	膽吹	桑原
	日本語F（上級）	2	今尾	桑原	今尾	桑原	山中
	日本語G（上級）	2	膽吹	今尾	膽吹	桑原	膽吹
	日本語H（上級）	2	桑原	今尾	桑原	山中	桑原
教養教育 副専攻科目	応用日本語Ⅰ	2	山中	山中	山中	山中	山中
	応用日本語Ⅱ	2	中島	中島	山中	山中	山中
	日本事情A	2	膽吹	膽吹	膽吹	膽吹	膽吹
	日本事情B	2	今尾	今尾	今尾	膽吹	膽吹
	多文化コミュニケーションA	2	山中	山中	山中	小幡	小幡
	多文化コミュニケーションB	2		山中	山中	小幡	小幡
	多文化コミュニケーションC	2	山中		桑原	小幡	小幡
	日本の文化	2	膽吹	膽吹	膽吹	膽吹	膽吹

表Ⅱ-30 共通教育科目の受講生数

	平成22年度			平成23年度			平成24年度			平成25年度			平成26年度		
	学	特	科	学	特	科	学	特	科	学	特	科	学	特	科
日本語A	11	1	0	8	3	0	3	4	0	5	5	0	1	14	1
日本語B	5	0	0	6	1	0	3	8	1	2	4	0	1	6	1
日本語C	6	0	0	4	9	0	7	4	0	1	6	0	7	7	1
日本語D	4	1	0	2	1	0	4	4	0	1	5	1	2	2	2
日本語E	2	6	0	12	5	0	3	14	1	7	14	0	3	10	0
日本語F	1	5	0	4	19	0	1	9	0	1	18	0	1	13	1
日本語G	13	8	1	4	6	0	5	15	1	2	12	0	4	13	1
日本語H	5	9	0	2	12	1	1	11	0	6	10	1	1	15	0
応用日本語Ⅰ	15	10	0	13	12	0	11	17	0	5	18	0	9	22	0

応用日本語Ⅱ	12	5	0	10	17	0	11	15	0	6	16	0	12	15	0
日本事情A	13	10	0	11	10	0	2	10	0	6	10	1	6	16	1
日本事情B	12	6	0	10	14	1	10	15	1	1	16	1	7	17	1
多文化コミュニケーションA	28	6	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
多文化コミュニケーションB	/	/	/	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
多文化コミュニケーションC	33	5	0	/	/	/	-	-	-	-	-	-	-	-	-
日本の文化	16	5	1	8	5	0	8	11	0	10	15	1	10	16	1

(注1)「学」=学部学生、「特」=特別聴講学生、「科」=科目等履修生、「-」=データなし、「/」=不開講。

3-2. 学部専門教育

国際交流センター教員は、それぞれの専門に応じて学部教育に関わり、各学部における講義を担当している。表Ⅱ-31に、平成22~26年度までに本センター教員が担当した科目を示す。

表Ⅱ-31 留学生センター教員の学部担当科目

学部	科目名	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
教育地域科学部	専門セミナー	桑原 膽吹	桑原	/	/	/
工学部	工学日本語Ⅰ	中島	中島	中島	中島	虎尾
	工業日本語Ⅱ	中島	中島	中島	中島	虎尾
	工業日本語Ⅲ	中島	中島	中島	中島	虎尾
	工業日本語Ⅳ	中島	中島	中島	中島	虎尾

3-3. 大学院教育

国際交流センター教員はそれぞれの専門に応じて大学院教育に関わり、各研究科における講義を担当している。平成26年度現在、大学院教育を担当している教員、該当研究科および担当科目を表Ⅱ-32に示す。

表Ⅱ-32 センター教員の担当科目

研究科	区分・分野	担当科目	担当
教育学研究科教科教育 専攻国語教育専修	国語学	日本語教育特論	桑原
	国語学	日本語教育特別演習	桑原
	国文学	国文学特論Ⅰ	膽吹
	国文学	国文学特別演習Ⅰ	膽吹
	課題研究	課題研究	膽吹
工学研究科	共通	工業日本語特論Ⅰ	虎尾
	共通	工業日本語特論Ⅱ	虎尾

3-4. 博士人材キャリア開発支援センターでの日本語教育

平成24年度後期より本学博士人材キャリア開発支援センター（CCDS）からの依頼に応えるかたちで開始された。国際交流センターではCCDSからの依頼に応じるべく、非常勤講師1名をCCDSに推薦している。科目名は「留学生向け日本語学習」（単位認定なし）で、留学生研究員と日本人研究員の混合クラスである。この授業では、博士号（理系）を取得した留学生が就職活動を行う際に必要な日本語能力を育成し、日本企業の中で仕事を行う際に必要な日本語能力と異文化適応能力を養成し、企業の中で自律的に日本語を学んでいく力を涵養することを目的とする。平成24～26年度までに開講された授業の概要を表Ⅱ-33として掲げる。

表Ⅱ-33 CCDS「留学生のための日本語学習」の概要

年度	学期	開講コマ	講師	受講生数	教科書
24	後期	18（週2）	星 摩美	4（2）	ロールプレイで学ぶビジネス日本語
25	前期	10（週2）	星 摩美	3（1）	ロールプレイで学ぶビジネス日本語
25	後期	18（週2）	星 摩美	6（4）	ロールプレイで学ぶビジネス日本語
26	後期	10（週2）	星 摩美	6（4）	ロールプレイで学ぶビジネス日本語

3-5. さくらサイエンスプラン・初等日本語講座

平成26年度から開始された「さくらサイエンスプラン」は、国際交流センターと本学工学研究科電気・電子工学専攻（橋本明弘教授）を中心に企画・実施されたプログラムで、アジアの大学で学ぶ若者を日本（福井大学）に招いて、科学技術の分野で交流することを目的とする。平成26年度は12月7日～13日に実施され、西安理工大学から10名の学生が参加した。

国際交流センターでは、12月10日に、このプラン参加学生（全員日本語未習）を対象に「初等日本語講座1」「初等日本語講座2」の2科目を開講した。2科目ともに桑原陽子准教授（中国語通訳3名）が担当した。授業では、社会言語学の研究成果から、日中の言語行動の類似点・相違点について講義を行い、また、簡単な日本語の自己紹介ができるようになることを目指して、会話練習を行った。

3-6. 評価と課題

平成22～26年度は、従来の共通教育科目・学部専門科目・大学院科目に加えて、CCDSと「さくらサイエンスプラン」での日本語教育が実施され、本学に於ける本センターの日本語教育の活躍の場がさらに拡張された。国際交流センターの日本語教育部には、今後も全学的な日本語教育や国際交流プログラムへの参加・支援を進めていくことが求められている。

Ⅲ. 学生支援

国際交流センターはその規程第3条（業務）第3項に「外国人留学生に対する修学上及び生活上の指導相談に関すること」及び第4項に「海外留学希望学生に対する修学上及び生活上の指導助言に関すること」を掲げている。更に、中期目標として「国際交流センターに国際交流機能を持たせ、国際交流の一層の推進を図る。」を掲げている。

外国人留学生及び日本人学生双方の指導助言においては、中期目標でもある「国際交流の推進」と統合的にとらえて、業務を遂行している。

1. 学生支援の考え方

学生支援、特に留学生への相談業務の考え方は次の通りである。

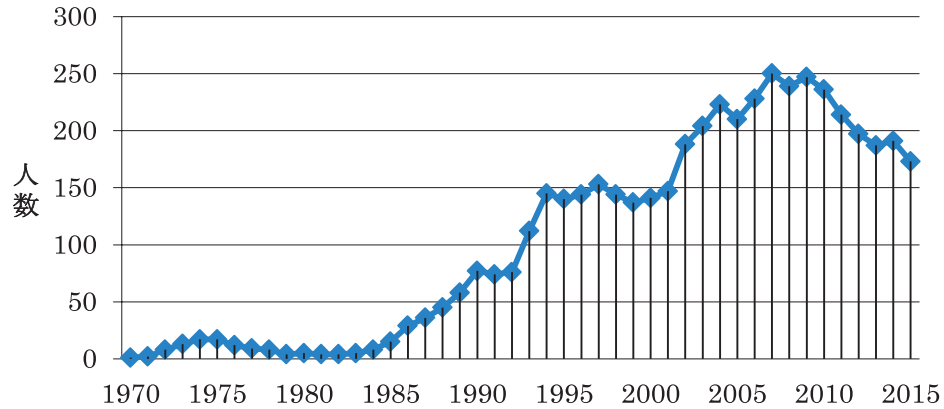
- (1) 各種学内活動及び地域交流活動を通して、留学生と留学生、留学生と日本人学生、留学生と地域市民、留学生と産業界、等々のネットワークを構築し、そのネットワークを通して、学生を支援する。
- (2) 問題が発生してから対応する問題解決型の相談から、問題発生を未然に予防する相談、更には、自己研鑽・社会活動展開のための相談へと、その重点の移行を目指す。
- (3) 精神的な落ち込み等のケアにおいても、多くの場合、その背後にあるより具体的な問題解決なしには対処できないことに留意する。
- (4) 発生した問題解決においては、学内外の諸機関・専門家と連携して解決する。

2. 外国人留学生数の推移と現状

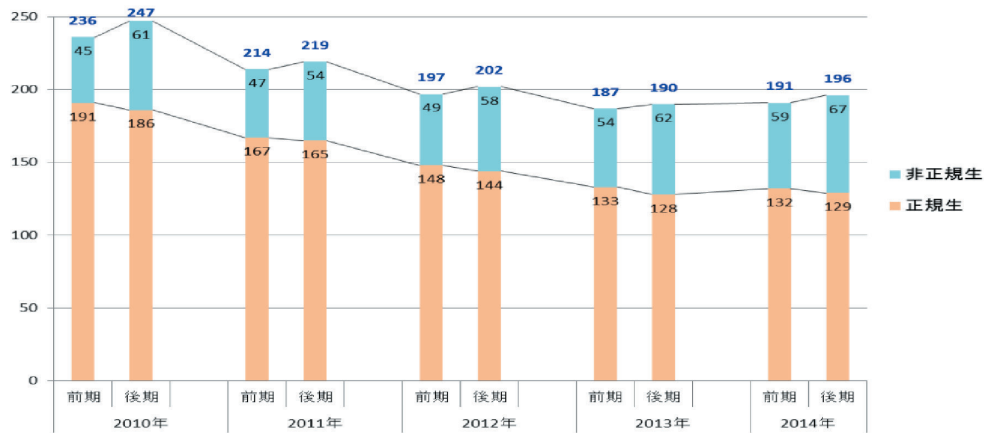
2-1. 正規・非正規留学生数の推移と現状

正規留学生とは、学位取得を目的に在籍している外国人留学生のこと。また、ここで述べる非正規留学生とは、学位取得を目的とせず、通常1学期～2学期間本学に在籍する学生のことである。

福井大学の外国人受入留学生数は、平成22年度を境（前期：236名、後期：247名）に、翌年度から減少に転じた。平成26年度は平成25年度を底として上昇傾向を取り戻したものの、平成22年度比較では、前後期トータルでマイナス約20%減（前期：191名、後期：196名）という数字にとどまった。



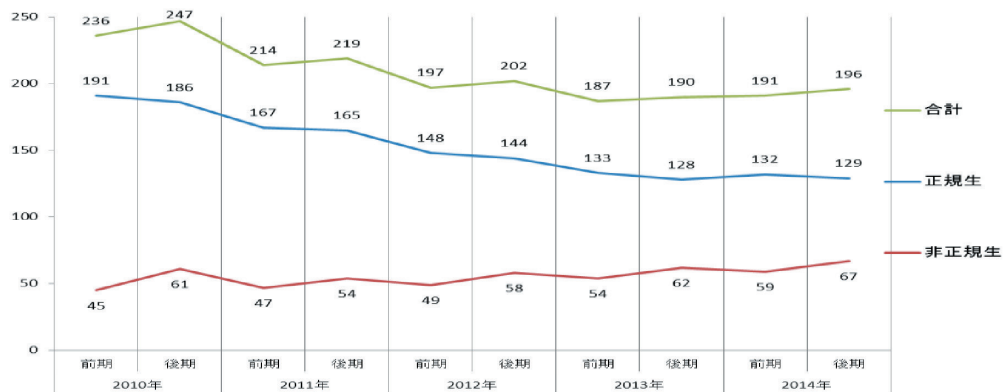
図Ⅲ－１ 外国人留学生数推移①



図Ⅲ－１ 外国人留学生数推移②

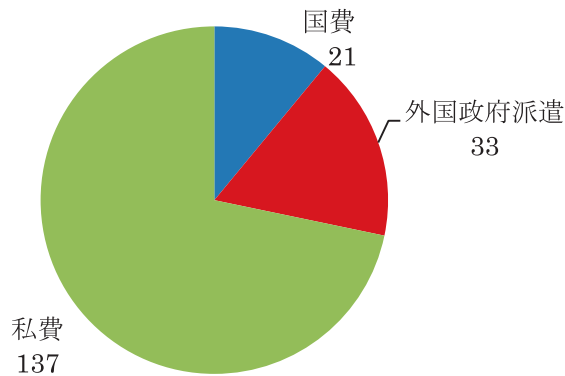
この減少は正規留学数（学位取得を目的とした留学生）の減少に伴うものであり、平成22年度をピーク（前期：191名、後期：186名）に、翌年度から減少に転じ、平成26年度には、前後期トータルでマイナス約30%減（前期：132名、後期129名）となった。

一方で、非正規留学生数（学位取得を目的としない短期留学生）は、平成22年度から増加傾向にあり、平成26年度には前後期トータルで約19%増となった。これは、平成25年度を上回り、平成26年度の外国人留学生合計数を押し上げる要因となった。



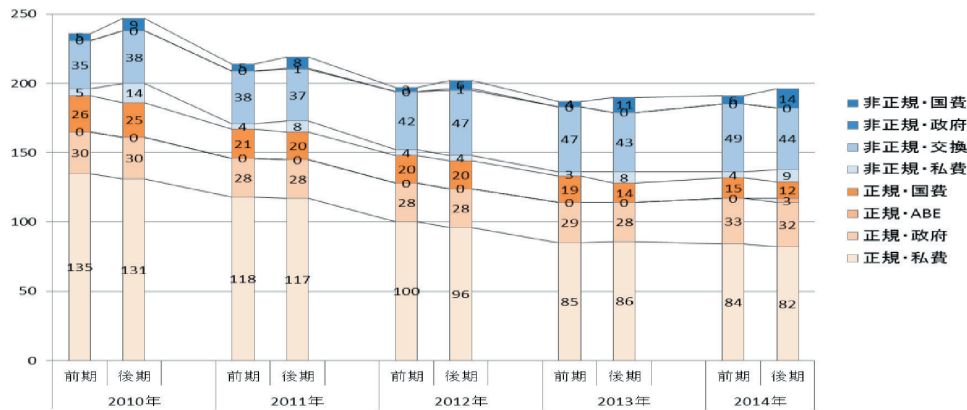
図Ⅲ－２ 外国人留学生数（正規生・非正規生）推移

留学に係る費用をどのように負担しているか、学費支弁方法別による外国人留学生在籍状況は以下【図Ⅲ－3】の通りである。

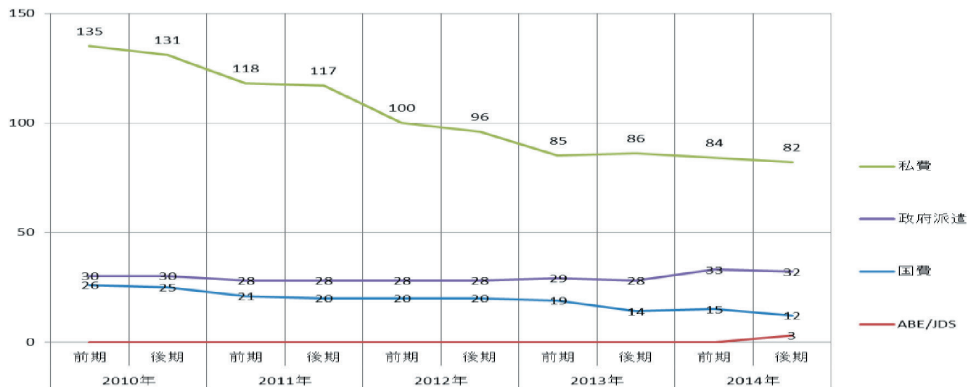


図Ⅲ－3 外国人留学生在籍状況：学費支弁方法別（平成26年度5月現在）

さらに図Ⅲ－4、5は、外国人留学生数の推移について、正規生、非正規生を学費支弁方法別で分類している。平成22年度から平成26年度までの間に「私費」正規生数が約38%減と顕著である。また、「国費」正規生数が約47%も減少している。「ABE/JDS」なども加えた政府関連奨学金を受給している正規生数は、ほぼ横ばいと安定していることを示している。

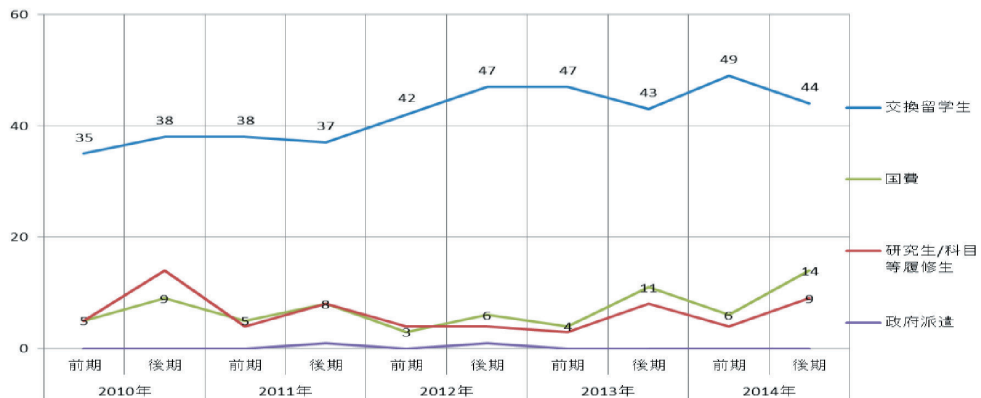


図Ⅲ－4 外国人留学生数推移：学費支弁方法別



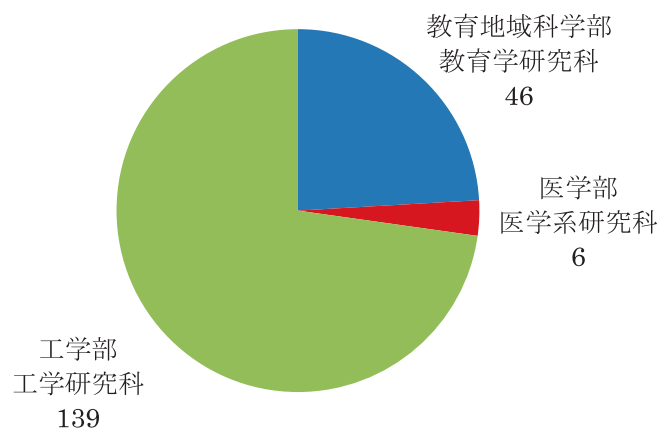
図Ⅲ－5 外国人（正規）留学生数推移：学費支弁方法別

一方、非正規生の増加は、学術交流協定校からの交換留学生数（非正規・短期）の増加によるものであり、平成22年度から平成26年度までに約27%増加している。



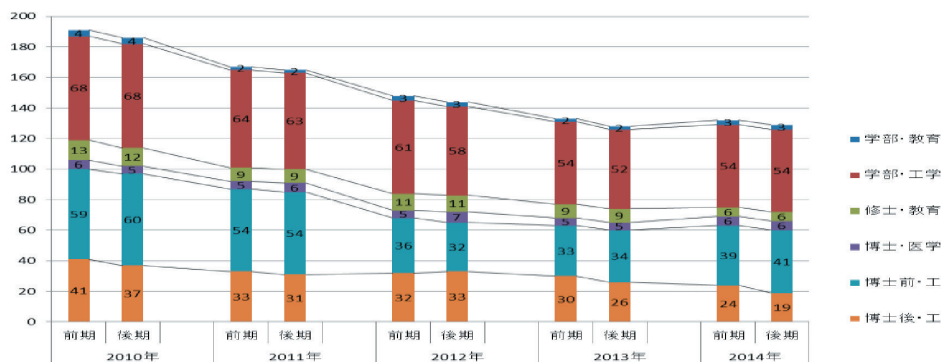
図Ⅲ－6 外国人（非正規）留学生数推移：学費支弁方法別

専攻分野別における外国人留学生在籍状況は以下である。



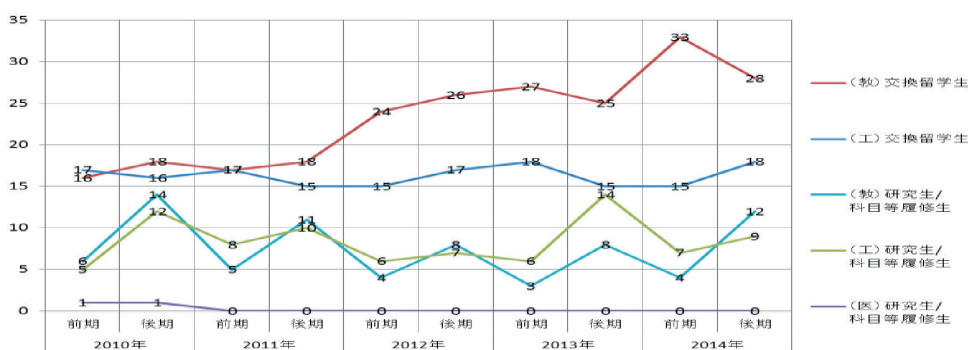
図Ⅲ－7 外国人留学生在籍状況：専攻分野別（平成26年5月現在）

正規生留学生数の専攻分野別推移では、平成22年度から平成26年度までに、全学部・研究科で減少あるいは横ばいというところであるが、工学部の減少幅が軒並み「大」である。工学部で約21%、博士前期課程で約33%、博士後期課程で約45%の減である。



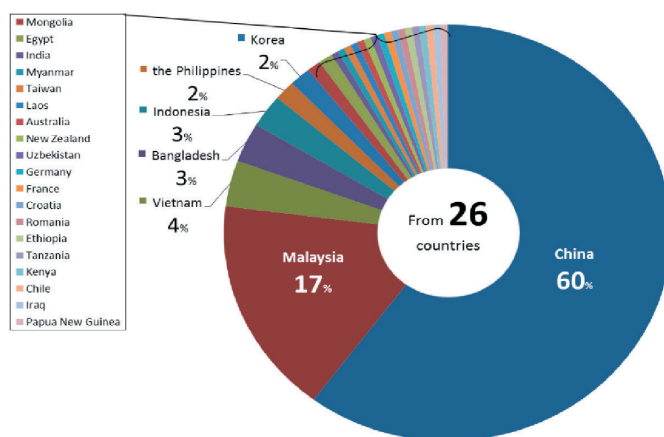
図Ⅲ-8 正規留学生数推移：専攻分野別

非正規留学生数については、工学部、医学部については、ほぼ横ばいであるが、教育地域科学部については、平成22年度から平成26年度にかけて約43%の増となっている。



図Ⅲ-9 非正規留学生数推移：専攻分野別

平成26年10月1日現在、26カ国・地域から留学生が本学で学んでいる。国別占有率では、中国が60%、マレーシア17%、ベトナム4%、インドネシア、バングラデシュ共に3%と続く。中国人学生数が圧倒的であるが、出身国数が増加し、文化的多様性が拡大している。



図Ⅲ-10 非正規留学生数推移：国別占有率

2-2. プロモーションとリクルート

(1) 正規留学生

i. 情報発信

国際交流センターは、各学部のウェブページ（日本語・英語）を国際交流センターホームページに掲載、各プログラムについて情報発信を行うと同時に、募集要項、入学案内、奨学金、ビザ、生活一般、学生サービス等の情報提供の多言語化（日、英、中）を進めている。また、世界13支部に広がる同窓会ネットワークを通じて、本学のプロモーションを行っている。

ii. 学術交流協定

平成26年5月、ベトナム教育訓練省と福井大学の間で、ベトナム人学生を福井大学大学院に正規生として受入れるための学術交流協定を締結した。国際交流センターでは、ベトナム教育訓練省との協定交渉を行った。外国人留学生数、とくに正規生数の減少傾向にストップをかける協定として期待される。今後も、本学学部、および大学院へ、正規生の入学を促進するようなネットワーク構築、および学術交流協定の締結を進めていくことが望まれる。

平成26年11月には、国際交流センター教員がタイのカセサート大学附属学校を訪問、同校生徒の福井大学新学部あるいはその他学部への入学促進についての協力関係について協議を行った。指定校推薦を受け付ける海外の拠点校作りを目指す。またこのような流れをASEANを中心に今後の国際戦略として位置付けていきたい。

(2) 非正規留学生

平成25年9月に新規採用された国際交流センター教員（平成26年度4月より、国際課長兼務）と国際課受入担当チームが協力して、交換留学制度、および研究生・科目等履修生、さらに国費・外国政府派遣生等の受入体制を整備するとともに、情報発信を効果的、かつ継続的に行ってきた。その成果は、非正規留学生の継続的な増加（平成27年度見込みも併せて）、および出身国数の拡大という形で現れている。

i. 交換留学制度と貸借バランス

交換留学制度は、学術交流協定校との授業料相互不徴収によって、学生を交換する制度である。したがって、派遣生は原籍教育機関にその授業料を支払えば、受入教育機関にその授業料を支払うことなく、在籍することが出来る。毎年、このようなセメスター（学期）の貸借が均衡になることは困難であるし、均衡にこだわることで学生交流の柔軟さとダイナミズムを失ってしまうために、協定校間では、セメスターの貸借バランス表を作成し、複数年間でその均衡をゼロにするように努めている。交換留学制度において、貸借バランス表は学生交流のバックボーンである。

福井大学では、平成25年9月に、貸借バランス表のコンセプト（貸借バランスに基づく戦略的で、持続可能な学生交流）を浸透させるとともに、貸借バランス表の作成を開始、貸借バランスから様々な交渉を引き出すべく協定校との間で様々な協議を開始し始めた。つまり、貸借表は1セメスターを「1」と数え、「派遣超過」、「受入超過」、そして「均衡」といった管理を

行うことで交換留学制度を持続可能なものに維持することを目的とするとともに、学生、および大学のための重要な交渉道具でもある。

福井大学の交換留学プログラムは以下A、およびBである。

A：福井大学短期留学プログラム（UFSEP）：

交換留学制度枠内で英語開講科目を履修する留学生を対象としたプログラムである。したがって、留学を希望する学生には、英語で開講される学部レベルの授業を成功裡に履修することのできる英語運用力を求めている。受入は10月の年1回のみ、在籍期間は1年間。専門分野の英語開講科目に加え、日本語教育科目（初級～中級）を履修する。

B：交換留学生（UFSEP）：

交換留学制度枠内で日本語開講科目を履修する留学生を対象としたプログラムである。したがって、留学を希望する学生には、日本語能力試験2級の日本語運用能力を求めている。受入は、4月と10月の年2回。在籍期間は1学期間から2学期間。共通教育科目、および専門分野から日本語開講科目、および日本語教育科目（中級～上級）を履修する。

*交換留学枠（授業料不徴収）：

福井大学では、一つの学術交流協定校から交換留学枠で受け入れることのできる学生は各学期3名まで、としている。ある学期に一つの大学から4名以上が在籍する場合は、4人目から授業料が発生する。

ii. 商品、諸手続・方針の明確化

ウェブサイトやファクトシートを通じて、以下について明確な情報の提供に努めた。

- ・福井大学の『商品』としての授業、アカデミックプログラム、学生サービス
- ・シラバスなど『商品』の内容、効能などについての説明書、保証書
- ・それら『商品』のコスト、入手方法、手続案内、条件
- ・商品についての問い合わせ、クレーム先等の案内
- ・情報保護・情報公開とアカウントビリティの方針…等。

iii. 連絡窓口の一元化

交換留学に関する協定校との交渉、協定校への情報発信、およびコミュニケーションは、国際交流センターと国際課で共有している方針を元に、国際課の担当者が窓口となり対応にあっている。さらに、困難な交渉や、学術交流協定校間とのトラブルシューティングにおいては、国際交流センター教員が直接対応を行う。

iv. オリエンテーションの充実

平成26年春学期より、新規留学生のためのオリエンテーションの充実に取り組んだ。

- ・オリエンテーション期間を4日間とし、授業開始前に十分な休養、適応、そして準備期間

を設けることを目的とした。

- ・オリエンテーションの項目によって、学内外の人々に関わってもらいながら、学生が学外に出ず、学内で様々な手続きを終えることが出来るように調整した。
 - a. 布団注文 → 布団業者による注文の受付と配達
 - b. 携帯電話購入 → 携帯電話会社によるプレゼンテーションと販売
 - c. 住民登録等の代理申請 → 福井市役所
 - d. 銀行口座開設 → 福井銀行
 - e. 国際交流活動 → 福井県内の国際交流団体
 - f. 安全・危機管理 → 福井県警察署
 - g. 履修登録 → 教務課
- ・さらに、平成26年度から留学生サポーター（スチューデント・アシスタント制度）を新設、オリエンテーションや必要時の外国人留学生のサポートを提供できるシステムをスタートさせた。

v. 学術交流協定、学生交流、インターナショナルオフィス

平成26年度4月より、国際交流センター教員と国際課国際連携チームと協力して、部局間協定、大学間協定について、その交渉から締結までを担当している。一連の交渉の中で、各学部教員の狙いとする教員間の教育・研究交流ばかりではなく、両校の交換留学プログラムを成立させるための制度作りと、情報収集のためのコミュニケーションを行っている。

さらに、協定交渉の一連の流れ（コレスポネンス）は、全てプリントアウトし、各大学用に作成されたファイルに保管、記録として、先の交渉のエビデンスとして残している。これらのコレスポネンスファイルは、協定締結後も両大学担当者間の様々なコミュニケーションの記録を紙ベースで残していくものとなるため、両大学の交流の歴史書としての役割を担うことになる。

（3）短期留学プログラム（受入）

①福井大学サマープログラム（浙江理工大学学生用プログラム）

平成23年度に、本学学術交流協定校である浙江理工大学において短期派遣プログラムとして実施したサマープログラムに、平成24年度より本学への受入プログラムを追加し、以降毎年受入プログラムを実施している。対象は浙江理工大学で主に日本語を学習している学生で、平成24年度の参加者数は8名、平成25年度は10名、平成26年度は16名と、年々増加している。実施期間は7月中旬から2週間で、プログラム内容は大きく1) 日本文化・日本事情の講義、2) 福井の伝統産業・文化体験、3) 地元企業訪問、4) 本学学生との交流（グループワーク・発表）の4つで構成される。本学からの単位付与はないが、国際交流センター教員の評価により一定水準を満たした参加者には、本プログラムの修了証を授与する。

平成26年度からは、プログラム費用を抑えるため授業料相互不徴収のプログラムとして実施している。参加した学生からは、日本のお茶や座禅体験などフィールドトリップへの参加を通して、日本文化を深く理解することができた、との意見が多く得られた。

②『さくらサイエンス』プラン

正式名称は「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」。科学技術振興機構が平成26年度に開始した。産学官の緊密な連携により、優秀なアジアの青少年を日本に短期間招へいし、未来を担うアジアと日本の青少年が科学技術分野で交流を深めることを目指す。日本の最先端科学技術に対するアジアの青少年の関心を高め、日本の大学・研究機関や企業が必要とする海外からの優秀な人材の育成を進め、もってアジアと日本の科学技術の発展に貢献することを目的としている。

平成26年度の招へい対象国は、中華人民共和国、インドネシア共和国、カンボジア王国、シンガポール共和国、タイ王国、大韓民国、中華民国、フィリピン共和国、ブルネイ・ダルサラーム国、ベトナム社会主義共和国、マレーシア、ミャンマー連邦共和国、モンゴル国、ラオス人民民主共和国。招へい対象者は、高校生、大学生、大学院生、ポストドクター、教員などで、原則として日本に初めて滞在することになる40歳以下の青少年。

①『さくらサイエンス』プラン 平成26年1回目

実施主担当者：福井大学大学院工学研究科繊維先端工学専攻・教授 末 信一郎

被招へい者：台湾 大学院生2名（国立成功大学）

大学生2名（中国医薬大学）

中国 大学院生2名（天津工業大学）

マレーシア 大学院生4名（プトラ大学、モナシュ大学）

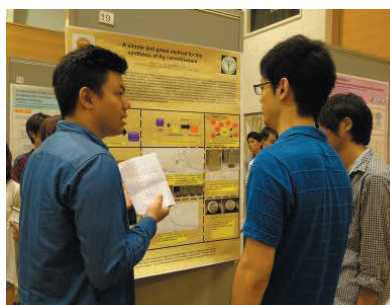
ベトナム 教員2名（ハノイ理工大学）

計12名

受入期間：平成26年7月28日～8月6日（9泊10日）

プログラム概要：工学研究科繊維先端工学専攻、生物応用化学専攻、材料化学専攻が中心となり、バイオ・化学（特に本学が強みとしている繊維化学・高分子化学）を核として異分野の研究領域を結集した共同研究を実施。一見関わりがなような異なる研究分野の学生を本学で受入れ、学生レベルで研究交流を行うことにより、新たな問題と可能性を見出すことのできる工学系人材育成を目指した。

学内研究施設見学、県内企業見学、実験、文化交流等を実施。



ポスターセッションで
各自の研究分野を紹介



日本人学生を交えた体験実習



日本の文化・和紙すきを体験

②『さくらサイエンス』プラン 平成26年2回目

実施担当者：福井大学大学院 工学研究科 原子力・エネルギー安全工学専攻

准教授 桑水流 理、准教授 浅井 竜哉

被招へい者：ベトナム 大学生8名

教員2名（電力大学）

計10名

受入期間：平成26年9月21日～9月28日（7泊8日）

プログラム概要：工学研究科原子力・エネルギー安全工学専攻および附属国際原子力工学研究所にて実施。原子力人材育成を中心とした連携強化を目的に、講義・実習を行ったほか、嶺南地域の日本文化を学ぶとともに、原子力関連施設を見学した。



学生交流会でベトナムのダンスを披露



美浜電子力PRセンターを見学



本学附属国際原子力工学研究所にて、充実した内容の特別講義を受講

③『さくらサイエンス』プラン 平成26年3回目

実施主担当者：福井大学大学院 工学研究科 電気・電子工学専攻・教授 橋本 明弘

被招へい者：中国 大学院生10名

教員1名（西安理工大学）

計11名

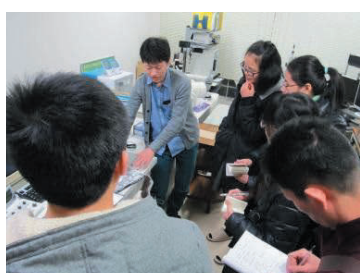
受入期間：平成26年12月7日～12月13日（6泊7日）

プログラム概要：光エレクトロニクス、流体工学分野や半導体工学など、日本が世界の最先端を走る分野において学术交流を行った。特に、ライダー計測やその光源となるマイクロチップレーザー、流体工学分野を中心に、今後の中国における環境問題の解決に資することを目的とした。

電気・電子工学専攻および機械工学専攻研究室での専門研修、日本語講座、県内企業見学、文化交流等を実施。



歓迎交流会でアイスブレイク



研究室紹介に熱心に聞き入る



初等日本語講座の様子

本学において、さくらサイエンスプランは、新規学術交流協定校との最初の学生交流プログラムとして、または、交換留学制度上の受入プログラムとしてを実施されている。

新規学術交流協定校との最初の学生交流として本事業を利用する場合、特に経済的な理由で来日をためらう学生が多いときは、本事業のめぐまれた支援がたいへん喜ばれる。また、単に最初の学生交流という位置づけだけでなく、本学での講義・研究や福井での生活を実際に体験してもらい、中・長期の留学生のリクルートにつなげるという明確な狙いを持って計画されている。受入期間中に本学の留学制度の紹介を行うこともある。ただし、被招へい者からは、中・長期の日本留学についても、さくらサイエンスプラン同様にめぐまれた奨学金制度を求める声が多いため、担当教員は情報提供に苦心している。

海外の学術交流協定校等と、双方向の短期研修プログラムを継続して実施している教員にとっては、相手先からの受入プログラムを実施する際に、被招へい者が利用できる支援金制度が少ないこと、またその支援金額も限られていることが、様々な面で負担になっている。特に本学からの派遣プログラムにおいて相手先から多大な支援を受けた場合は、相手先からの受入プログラムに対しても同様の支援が期待されるため、さくらサイエンスプランは学術交流協定校等との相互交流において重要な役割を果たしていると考えられる。

2-3. 今後の課題

(1) 外国人留学生（正規生）を増加させるために以下の取組を行う必要がある。

- ①各学部のプログラムのアウトカムを明確にし、プログラムの商品としての魅力を、ホームページ（多言語）、英文パンフレット、フェイスブック、同窓会、留学フェア参加などを通じて、高校生、大学生に伝える。
- ②入試課と協力のもと国内外の日本語学校や、アジアの日本語学科、あるいは日本語専攻を持つ高校や大学に福井大学のプロモーション、および学部入学、学部編入、大学院入学などの情報提供およびリクルートを積極的に行う。
- ③学部と入試課、国際課が協力して、海外に推薦入試枠を設けた指定高校および、編入学枠を設けた指定短大・大学を作る。そのような高校、短大、大学には、本学学生をインターンや、PBL、交換留学制度を通じて派遣し、福井大学ファンを育てる仕掛け作りをする。
- ④予算枠内において可能な限り、ある一定の成績を収めれば、授業料の減免や奨学金受給が継続できるような制度の構築。
- ⑤生活環境としてのキャンパスの整備。緑化計画はもとより、学生や一般のお客様が集える場所の提供。例えば、（生協学生食堂ではなく）カフェテリアやインターナショナルフードコート建設など。民間資本の利用をキャンパス構築の中に取り入れることで、ワクワクするような、時間を過ごしたくなるような空間の創出が急務である。
- ⑥国際通用性のある教育・研究、教務システム、学生サービス、および質保証の構築。国内外のネットワークを構築することで、ヒト、モノ、カネが集まる大学を構築する。
- ⑦教職員の意識改革と国際化。

(2) 外国人留学生（非正規生）を増加させるために以下の取組を行う必要がある。

①英語開講科目数の増加。

②工学部で提供している英語開講科目のプログラム化と積極的な広報。

現在約60の英語開講科目を提供することが可能とのことで留学生に案内している。しかし、受講希望者がいれば開講、いなければ開講しない、といったスタンスのため、各科目の質保証ができておらず、同時に受講した学生のレビューが思わしくない。60科目をテーマ化あるいは、体系化して、プログラムとして再構築、しっかりと時間割の中に組み込み学生募集をすることで多くの交換留学生の履修が見込まれる。

③学術交流協定校および学術交流の拡大（日本語学科・日本語専攻を持つ大学との連携、および、インターナショナルプログラムを持つ大学との連携）。日本語、英語、母語と、正規・非正規留学生も日本人学生もトライリンガルを目指す。

④ハウジングの整備

大学宿舎に留学生用の部屋を確保・拡大する。さらに、福井市・福井県そして国と連携して、留学生用宿舎の確保・拡大を進める。

(3) 迅速な意思決定プロセス

大学の国際化や国際交流に関する多くの委員会やワーキンググループを削除、合併するなど、ゼロベースで見直すことで、大学の国際戦略を統一されたものにすると同時に、責任の所在を明確にすることで、グローバル化時代に見合った迅速な意思決定が可能になると考える。

3. 留学生支援

3-1. 相談業務

(1) 相談・交流業務の人員配置

福井大学国際交流センターでは相談交流業務の担当として虎尾教員1名が配置されている。他方、国際課には課長以下職員が10名、事務補佐員が3名いる。事務補佐員3名のうち1名は国際交流センターで執務している。国際課には主に事務手続き関係の質問が行き、相談・交流担当教員の方には、より複雑な問題について、腰を据えてゆっくり相談したい場合にやってくる。それぞれの相談に費やす時間は1回30分から1時間程度である。

(2) 相談の場所と時間帯

いわゆる相談専用室はなく担当教員の研究室で相談を受ける。研究室には5人用のソファースセットがあり、寛いだ雰囲気を提供できる環境にある。相談時間帯は国際交流センターホームページ (<http://ryugaku.isc.u-fukui.ac.jp/>) に掲載されている。また、研究室入口ドアには「いつでもどうぞお入りください。」と掲示されている。つまり、下記時間外でも、授業中や来客中でない限り相談を受けている。

表Ⅲ－１ 相談の時間帯

曜日	午前	午後
月	10：00～12：00	要予約
火	10：00～12：00	要予約
水	10：00～12：00	要予約
木	10：00～12：00	
金	10：00～12：00	

(3) 相談状況

前任の相談・交流担当教員の本学着任日（平成12年8月1日）以降の全相談データを記録し、身分別、内容別に分類してあるので、いつでも統計資料が作成できる状態になっている。

①身分別相談状況

平成22年度～26年度における身分別相談状況は下記の通りである。

以下相談件数はすべて、相談・交流担当教員の研究室来訪による相談のみである。e-mailによる相談、国際課における相談等は含まれていない。

表Ⅲ－２ 平成22年度～26年度の留学生身分別相談状況

(相談件数)

	医学部 医学系研究科		教育地域科学部 教育学研究科		工学部 工学研究科		小計		合計	割合
	男	女	男	女	男	女	男	女		
大学院生	0	1	3	30	152	55	155	86	241	46.8%
学部学生	0	0	6	1	87	50	93	51	144	27.9%
研究生	0	0	2	20	10	8	12	28	40	7.8%
特別聴講生	0	0	28	42	12	8	40	50	90	17.5%
小計	0	1	39	93	261	121	300	215	515	100.0%
合計	1		132		382		515			
割合	0.2%		25.6%		74.2%		100.0%			

さて、在学留学生の身分別の割合が、概ねそのまま、身分別相談件数の分布割合と符合している。

ただ、一般的に、大学院生の場合は、母国で学部教育を受けた後来日し、半年ないし1年の研究生生活を経て、院生になる学生が多いため、日本滞在期間が短く、日本語力も低い。適応力がついていないことから、相談に来訪することが多い。更に、修了者の大半が日本国内就職を目指すこと、研究の壁にぶつかることが多いこと、それらも相談件数の増加要因となっている。

他方、学部生は、工業高専からの編入や、日本語学校を経て日本語力を身につけ日本語による留学生試験を突破して入学し、授業もすべて日本語で受講するなど、日本語力もある上に、日本滞在経験も長く問題解決力も身につけているので、相談件数は少ない傾向にある。

また、大学院生や研究生の場合は、研究室に所属しているので、指導教員や研究室仲間との緊密な人間関係が構築できるが、そのような環境にない特別聴講学生は周りに相談する相手が少なく、孤立することがある。

尚、医学部・医学研究科の場合、留学生数自体が少ないこと、それに両キャンパスが地理的に離れていることから相談はほとんどない。全員が大学院生で、研究室に所属し、指導教員や

研究室の仲間の支援を受けていると思われる。平成25年度は医学部留学生担当係からの要請により、イスラム教徒女子学生の環境不適應案件の相談のため松岡キャンパスに1回だけ足を運んだ。尚、学内交流活動や地域交流活動には医学研究科の留学生も積極的に参加している。相談・交流担当教員から交流関係情報が常時メールで配信されているからである。

②内容別相談状況

平成22年度～26年度における内容別相談状況は下記の通りである。

表Ⅲ－3 平成22年度～26年度の相談内容別相談状況

(相談件数)

	医学部 医学系研究科		教育地域科学部 教育学研究科		工学部 工学研究科		小計		合計	割合
			男	女	男	女	男	女		
研究・学習	0	0	2	5	60	13	62	18	80	15.5%
就職・アルバイト	0	0	11	41	76	37	87	78	165	32.0%
奨学金・授業料	0	0	1	2	16	17	17	19	36	7.0%
生活一般	0	1	1	11	13	15	14	27	41	8.0%
入学・進学	0	0	3	6	21	11	24	17	41	8.0%
交流活動	0	0	4	14	32	23	36	37	73	14.2%
ビザ・在留	0	0	3	11	18	18	21	29	50	9.7%
事件・事故	0	0	14	3	9	3	23	6	29	5.6%
小計	0	1	39	93	245	137	284	231	515	100.0%
合計	1		132		382		515			
割合	0.2%		25.6%		74.2%		100.0%			

i. 研究・学習

研究学習に関する相談は例年多いが、院生からの相談がほとんどである。研究室内の人間関係、研究テーマそのもの、学位論文執筆の壁、などがある。特に、博士論文の場合にはかなりの学生がノイローゼ気味になる。査読の結果が届かない、今のテーマでは論文が書けない、などである。研究テーマや指導教員を変更したいということで、関係者と協議の上、結局研究室を変更するケースもある。

近年目立っているのが、博士の学位が取れずに、失意のまま帰国するケースが増えていることである。学ぶ側だけでなく、指導する教員の方に問題点があると思われるケースもある。本国政府の奨学金を受給している場合は、大使館等とも連絡調整しながら、本人の将来設計への影響を最小限にすべく対応している。

また、毎年工学部留学生が単位不足のために進級できないという相談が何件かある。

ii. 就職・アルバイト

本学留学生の近年の国内就職者数は、平成19年度30名、平成20年度20名、平成21年度15名、平成22年度21名、平成23年度20名、平成24年度21名、平成25年度16名、平成26年度16名となっている。健闘しているとは言え、就職環境は年々厳しくなっている。エントリーシートを提出しても、なかなか面接まで行けない。面接まで行っても落ちてしまう。連戦連敗の就職戦線に

行き詰まり、自信を喪失し、いわゆる就活疲労症候群に陥る学生も多い。そのような学生に対して、心のサポートをすることが増えた。

一方、どんなに心のサポートをしても、就職が決まらなると問題は解決しないので、国際交流センターラウンジにおける個別企業会社説明会を実施したり、希望分野の会社をインターネットで一緒に検索したり、商工会議所等で講演したりして、側面から支援している。

就職に関する相談が例年相談件数のトップであるが、商工会議所、福井労働局、名古屋入国管理局福井出張所の連携、特に産業界とのネットワークを通して支援している。

iii. 奨学金・授業料

奨学金・授業料の相談件数が少ないのは、まず奨学金案件そのものが少ないこと、また、授業料免除は国際課が窓口であるためと思われる。ここ数年目立ってきたのが、授業料が払えずに除籍処分になって大学を去る学生が増えていることである。アルバイトもしないでのんびり過ごして、納入期限の土壇場で相談に来るなど、資金計画、生活設計の習慣が身につけていないことがその主な原因であった。成績も芳しくなく、授業料免除もなく、バイトもせず、という学生への対応に苦慮している。

iv. 生活一般

生活一般に関する相談は少ないが、健康問題、アパート隣人とのトラブル、異国での生活による情緒不安定、結婚直後に妻を残しての来日、子供を母国に残しての来日、また、逆に、日本語が出来ない妻を同伴したことによる問題、乳幼児を同伴しての単身留学来日等々、その問題発生要因は多岐にわたる。目的喪失や学業不振による引きこもりも最近増えている。

住宅賃貸契約における保証人問題は外国人留学生支援会発足により機関保証制度が整っているため、皆無である。

v. 入学・進学

一般的に入学進学に関する相談は学内進学、国内他大学進学、更には第三国への進学相談がある。相談内容は、指導教員の探し方、研究計画作成の指導、推薦状作成依頼がほとんどである。卒業留学生からも進学のための推薦状作成依頼が毎年数件あり、対応している。

vi. 交流活動

学生の地域理解や親日感は、パーティ等に招待されることからではなく、地域の国際化への積極的貢献から生まれるとの認識から、小中学校や県内機関に留学生を一日講師として積極的に派遣している。相談内容としては、小学校等での発表方法や、準備内容等に関するものが多いが、その他に、引き受けたいが、指導教員が厳しくて許可がもらえそうにないというものもある。指導教員が交流活動と研究活動のバランスに苦慮している面がうかがえる。

vii ビザ・在留

各種ビザの取得・更新手続き等に関しては国際課国際教育担当が中心に処理しており、その段階で解決されているが、相談担当教員への相談は、家族や友人のビザ取得に関する相談が

中心である。具体的には保証人になってほしいというものが多い。友人のビザ取得に関しては、その身分が明確でないことから保証人にはならないが、家族の来日においてはまず指導教員に依頼するよう指導している。それでも毎年10件ほど相談担当教員が保証人になっている。在職証明書を添えて、保証人欄に署名するが、ビザ申請書の写しを手元に保管して対応することになっている。なお、これまで問題になった事案はない。

viii. 事件・事故

事件事故に関する相談は全般に少ないが、その大半は交通事故案件である。被害者としてだけでなく、加害者の場合もあり、対応が難しい。また、数年に一度ほど万引きや盗撮などの事件がある。最近は、店舗側の対応や接客態度の悪さからもめ事に発展する事案も起きている。いずれの場合も、国際課職員、指導教員、保険会社、警察などと緊密な連携をとりながら対処している。

ix. その他

海外から直接メールが入り、修士課程、博士課程への入学等に関する問い合わせや相談を受けることも多い。主に工学部・工学研究科に関するもので、指導教員を紹介してほしいというものである。その場合には、当該専攻の留学生委員会委員に情報を転送し、専攻内全教員に受入意思を確認するように依頼している。毎年このような形で2、3名が本学研究科に入学している。

(4) 相談業務における課題

- ①学生を支援するためには、幾重もの人的ネットワーク作りを更に推進することが必要である。
- ②国際交流センターの施設が分散し、且つ、日本語教育の教室から離れた場所に、相談担当教員の研究室があるため、留学生が相談に来ても不在なことがある。相談業務を含め、センター業務全体が有機的な機能を果たすためには、センター施設の集中化が望まれる。
- ③相談・交流部門は人員一人で多岐にわたる事業を担当し、且つ、授業も担当しているため、時間的及び精神的余裕に欠け、学生が相談に来にくい状況があったが、日本人学生の海外派遣を担当する教員が採用されたため、その問題は緩和された。

3-2. 就職支援

(1) 支援の考え方

社会・経済のグローバル化が進む中で、地域経済界が生き延びる、更に発展するためには、各企業の国際化は喫緊の課題である。そして、その柱となるのが、国際戦略を担う人材確保である。他方、留学生も卒業後、実務経験を身につけたい、更には、人生設計を日本の産業界に求めたいという学生が増えている。国際交流センターは双方のニーズを調整しながら、留学生支援および経済界特に県内企業の国際化支援を行っている。

表Ⅲ－４ 就職支援の流れ（平成26年度の例）

5月中旬	留学生向け就職説明会実施
	<p>内容：過去の就職実績・平成25年度（2013年度）の内定状況について</p> <ul style="list-style-type: none"> ：これからの就職活動と相談について（就職の心構え、就職ナビ登録、履歴書作成法、自己PR書の書き方、内定後の注意事項等） ：各種資料配布 「就職活動の手引き2015年」福井大学作成 「外国人留学生のための就職活動ガイドブック」ランスタッド作成 ：就職が内定している先輩の就職活動体験談 ：就職希望者リスト登録
6月	福井大学就職希望留学生一覧を県内企業140余社に送付
随時	求人票、会社説明会等をe-mailで配信、及び個別に就職相談を受ける。
随時	国際交流センターラウンジにおいて、県内企業及び中部・近畿圏の個別企業採用説明会を実施。
内定決定	虎尾研究室に内定決定を連絡後、在留資格変更手続き等の相談を受ける。

（２）就職希望者リスト送付と留学生向け個別会社説明会

毎年就職希望者リストを県内140余社に送付して就職先開拓をしているが、県内外の企業から求人関係の問い合わせがあれば、可能な限り来訪いただき、本学国際交流センターラウンジに留学生を集め、個別会社説明会をお願いしている。平成26年度は2社の来学説明会と24社の代理説明会を実施した。

（３）福井大学留学生就職支援プログラムの実施

平成21年度より継続実施しているが、平成26年度も社団法人中部産業連盟と連携して下記のとおり実施した。

プログラム名	： 福井大学留学生就職支援プログラム
期 間	： 平成26年10月3日～平成27年3月20日全19回
日 時	： 毎週金曜日13：30～15：30
会 場	： 福井大学国際交流センターラウンジ
参加者数	： 15名（工学部1名、工学研究科12名、教育地域科学部1名、教育学研究科1名）
内 容	： キャリアデザイン、ビジネス日本語、面接対策講座、社会人基礎力等

（４）就職内定者アンケート

中期計画に基づき、企業研究、会社説明会、エントリーシート、筆記試験、面接等、就職活動全般について内定獲得までのプロセスに関する詳細なアンケートを実施し、国際交流センター

ラウンジコンピュータ6台で見られるようにした。

(5) 就職支援室との連携

本学では就職支援室が全学の就職支援活動を展開しているが、留学生関係の求人情報、就職フェア情報などは随時就職支援室から情報提供を受けており、留学生はキャリアサポートシステムに登録すれば会社説明会等の情報が逐次メール配信されるようになっている。また、就職支援室からの要請で、日本国内外の就職先を問わず、全留学生の就職先の確認作業を毎年実施している。

(6) 就職実績

留学生の国内就職実績は平成22年度21名（同7名）、平成23年度20名（同10名）平成24年度21名（同7名）、平成25年度は16名（同3名）、平成26年度は16名（同3名）であった。詳細は国際交流センターホームページに掲載してある。

(7) 就職支援における課題

- ①就職支援の最大のポイントは求人会社の確保である。平成19年度より、それまでの合同会社説明会形式を改め、本学国際交流センターラウンジでの個別会社説明会に力点を移しているが、その呼び込みを更に推進する必要がある。
- ②個別会社説明会開催時には十分な数の学生に参加させる必要がある。
- ③本学就職支援室との連携をさらに推進する必要がある。
- ④県内企業採用担当者のメーリングリストの拡充が必要である。
- ⑤就職後熱意をもって仕事を継続できるように、働くことの意義、動機付け教育を推進することも課題である。
- ⑥各国同窓会支部網を通しての母国企業への就職支援も強化する必要がある。

3-3. 留学生支援会

(1) 支援会発足の経緯

平成18年9月の教育研究評議会決議を経て福井大学外国人留学生支援会が正式に発足した。

従来、留学生が賃貸住宅に入居する際には、主に指導教員が賃貸契約の保証人になっていたが、連帯債務の可能性等があり、その精神的な負担は大きかった。支援会発足に伴い機関保証制度が確立し、その重圧から開放されることとなった。また、重篤な病気による帰国、入院・手術、火災、事故、事件など、多額の経費負担を伴う場合に支援できる態勢が整った。

(2) 支援実績

平成22年度：高額医療費助成2件。

平成23年度：なし。

平成24年度：留学生住宅総合補償金の一時立て替え1件。

平成25年度：留学生住宅総合補償金の一時立て替え1件。支援金貸付1件。

平成26年度：留学生住宅総合補償金の一時立て替え1件。

(3) 留学生支援会の課題

- ①事故・事件被害者への対応、または重篤病気罹患者の支援等を賄えるだけの資金確保のために、教職員の理解や寄付金の募集等を如何に進めるかが課題である。
- ②更に、このような支援の必要性が発生しないような、予防活動を如何に展開できるかが最も大きな課題である。

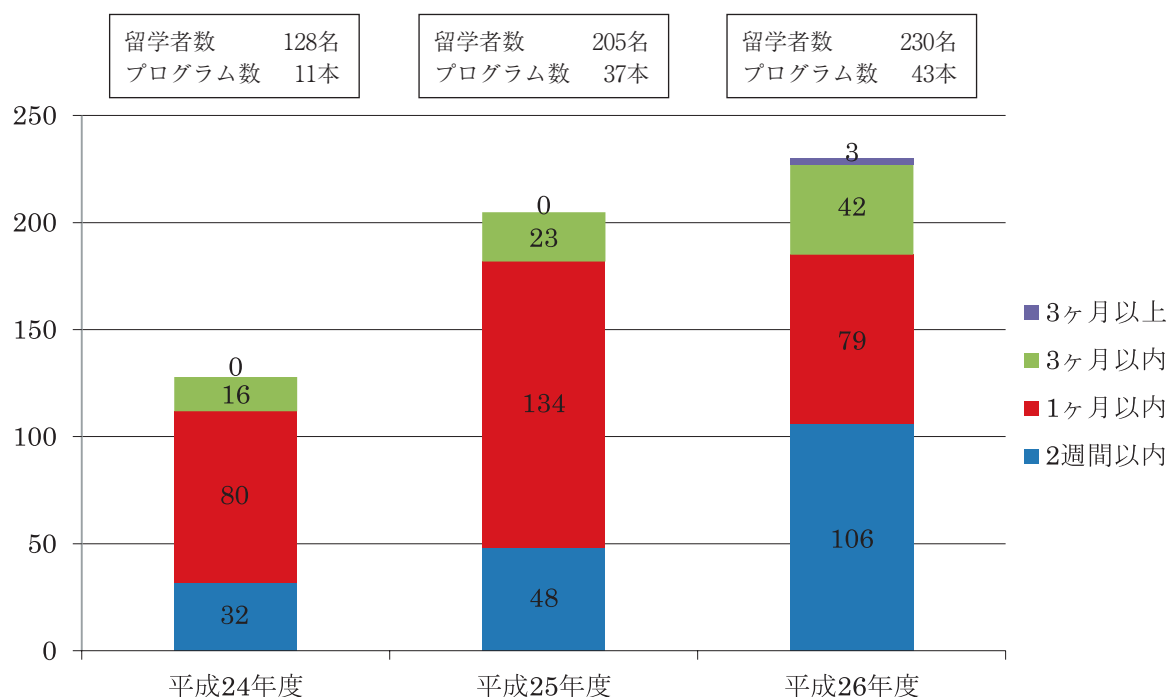
4. 日本人学生の海外留学支援

平成22年度の留学に関する相談件数は工学部から3名、医学部から1名の、延べ5件、平成23年度の相談件数は6件。相談内容は、概ね英語圏への語学留学、留学先との単位互換などであった。平成22年、23年の2年間は、短・中長期に関わらず、海外留学については停滞していた。

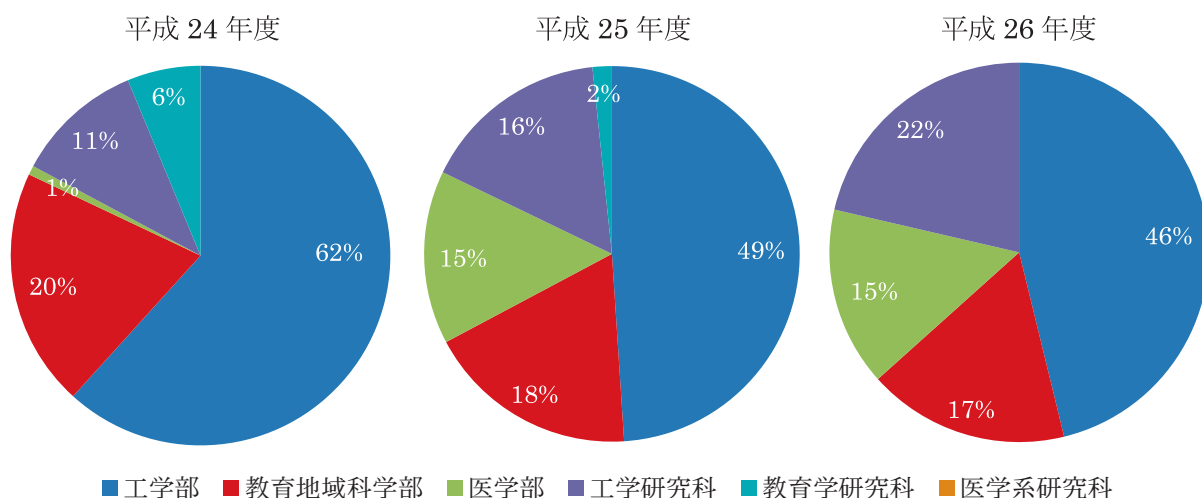
平成24年度に福井大学がグローバル人材育成推進事業（「スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に名称変更、以下GGJと表記）に採択されたことを契機とし、福井大学生の海外留学状況は一変する。国際交流センターでは、全学的なグローバル化推進体制の整備、特に実践的グローバル人材育成プログラムの開発・実施および海外留学関連事務体制の強化に努めてきた。ここでは、①平成24年度春季以降にGGJの一環として実施した短期海外研修プログラム、②交換留学、③その他の留学の紹介と、それぞれに関する取組みおよび学生支援について述べる。

4-1. 短期海外研修プログラム

■ 留学者実績



■ 所属別留学者の割合



GGJ採択以降、留学者数は毎年度大幅な増加（平成24年度より128名、205名、230名）を続けている。また、所属学部・研究科別の留学者数を見ると、年度毎にその割合が全学の所属別在籍学生数の割合に類似してきていることから、特に平成25年度以降は全学部・研究科の一定割合の学生が短期海外研修プログラムに参加したと言える。

■ 短期海外研修プログラム

年度毎の例として、平成25年度には37本の短期海外研修プログラムを実施した。派遣国は、留学者数が多い順に、アメリカ、タイ、中国、マレーシア、台湾、カナダ、オーストラリア、ドイツ、韓国、ニュージーランド、英国、フィリピン、ベトナム、スイス、インドネシア、シンガポールの16か国であった。以下に特徴的なプログラムを分類型（後述）毎に紹介する。

語学研修型：ポートランド州立大学（アメリカ）

英語力の向上を目的とした約1ヶ月の語学研修。午前中は、英会話や発音、ボキャブラリーなど日本人の苦手な点に特化した授業、午後は選択テーマに応じた課外活動に参加する。滞在中はホームステイを通してアメリカ文化を多面的に理解するほか、習得した英語を日々の実践により研鑽する。



文化体験・交流型：浙江理工大学（中国）

初心者向け中国語講座、中国・江南文化に関する講義及び文化体験、現地学生との交流などを通して、中国や江南地域の言語・社会・文化について学ぶ2週間のプログラム。同年代の中国人学生の考え方や文化的な差異に触れることで、異文化及び自国文化について考察し、理解を深める。



グローバル教養型：キングモンクト工科大学（タイ）

約2週間、東南アジア諸国、中国、台湾、日本からの大学生とともに、語学レッスン（タイ語および英語）、文化歴史遺産の訪問や地方の学校等でのコミュニティ活動に参加することで、英語でのコミュニケーション能力、協調性、柔軟性、異文化理解力を身につける。



専門分野型：上海理工大学（中国）

大学院進学を予定する工学部4年生および工学研究科生対象の大学院導入教育プログラム。中国の大学に2週間滞在し、中国語・文化講座、英語・日本語による工学系講義、海外企業経営・技術論講義、海外インターンシップなどを通して、語学力の向上及び実践的・国際的な思考力の育成を目指す。



研究・発表型：アジア複数大学（中国、台湾、マレーシア等）

敢えて自分の専門とは異なる分野の研究室に2週間滞在し、現地学生との研究活動やプレゼンテーションを通して、論理的に思考し、発表するプロセスについて学ぶ。異なる研究分野の知識・背景を持つ現地学生と議論をする中で、自分の専門分野について理解を深め、新たな気づきを得ることを目的とする。



■ これまでの取組み

<人員体制>

国際交流センターにおける事務を行う国際課では、平成24年度より留学経験および海外での滞在経験、高い語学力を持つ国際交流コーディネーターを配置し、平成25年度からは2名のコーディネーターがGGJ関連事務、短期海外研修プログラムおよび交換留学関連事務、学生派遣に関する学術交流協定校との連絡・調整、留学個別相談等の派遣業務を担当している。さらに、GGJ関連事務補佐として、英文資料作成等を行える語学力のある事務補佐員を国際課に配属したことで、国際課業務を円滑に進めることができるようになった。

また、日本人学生の海外留学を支援する専任教員は、平成25年8月まで配置されていなかった。それまでは、同センター副センター長が「相談・交流部門」（平成25年度より「グローバル人材育成部」）を担当し海外留学支援に携わっていたほか、日本語教育部の教員も留学に関する業務を担当していたが、平成25年9月にグローバル人材育成部の専任教員として新規に教員が着任し、その後、国際課長を兼任するなど国際課と連携して業務に当たっている。

<体制整備>

平成25年度に短期海外研修プログラムの体系化を行い、各学生が自らのニーズ、専門知識や

語学面での学習段階、将来設計に応じて、適切な時期に最適な研修を選択して参加できるようなプログラム分類を以下のとおり確立した。

分類型		主な研修内容・目的	対象学年(目安)	対象語学レベル(目安) ※参加条件ではない	重点的強化スキル	
0	語学研修型	語学力の向上を目的とした研修	全学年	全レベル	基礎的知識・教養(初・中級)、コミュニケーション能力(初・中級)	
1	文化体験・交流型	文化体験・交流型	文化歴史遺産の訪問、文化体験・交流などを通し、グローバルな環境に慣れ理解を深める	学部1、2年	全レベル	基礎的知識・教養(初級)、コミュニケーション能力(初級)、異文化に対する理解・自己アイデンティティの確立(初級)
2	教養・専門型	グローバル教養型	特定地域の社会文化に関する講義やフィールドワーク等への参加を通して、グローバル人材としての教養を養う	学部2~4年	TOEIC 400点	基礎的知識・教養(中・上級)、自己学習力・問題解決能力、コミュニケーション能力(中・上級)、異文化に対する理解・自己アイデンティティの確立(中・上級)
3		専門分野型	専門分野の講義や実験への参加、関連企業への訪問等を通して専門分野への理解を深める			専門的知識・能力(初級)、自己学習力・問題解決能力、コミュニケーション能力(中・上級)
4	実践・研究型	実践・インターンシップ型	就業体験などの実践を通して、高度専門職業人としての専門性や創造性を高める	学部4年~ 博士前期2年	TOEIC 600点	専門的知識・能力(中・上級)、創造力、社会的責任・使命感
5		研究・発表型	学会への参加や共同研究、発表などを通して高度専門職業人としての専門性や創造性を高める			専門的知識・能力(中・上級)、創造力、社会的責任・使命感

各短期海外研修プログラムをその内容や目的に基づき6つに分類しており、番号順により高い語学力や専門性を有していることが参加の前提となる。この分類を参考に、学生は各自の4年間もしくは6年間の履修計画に合わせて、段階的に各短期海外研修プログラムへの参加を考えられるようになり、現状の自分に合った留学を経験することでより効果的な能力の向上が期待できるようになった。

実施プログラムについては、国際交流センター所管プログラムのほか、平成25年度より本学の全教員を対象としてプログラムの設置申請を受け付けている。これにより、平成24年度は11本であったプログラム数が、平成25年度は37本、平成26年度は43本に増加した。プログラムは、語学研修(英語、ドイツ語、タイ語)、現地文化の理解および現地学生との学生交流を目的とするものや、産業経済に関するテーマ調査、国際コンペティションでのオリジナル橋梁の設計・製作についての発表、現地学生との共同研究、国際学会における英語での発表を行うものなど、多種多様な内容にて実施したほか、平成26年度には中期(約3ヶ月)のプログラム数も増えたことで、内容および期間ともに充実化を図ることができた。学生のニーズに合うプログラムを十分に提供できるようになったことは、直接的に留学者の増加に寄与したと言える。

さらに、プログラム数や担当教員数が増えたことを踏まえ、平成26年度には「海外研修プログラム実施ガイドライン」を制定した。これにより、プログラムが安全かつ公平に実施できる体制が整い、多様なプログラムを発展的に継続できるようになった。

<動機づけ>

学部1年次から、留学を視野に入れた学習・履修計画ができるよう、入学直後の新入生オリエンテーションでの留学制度の説明、短期海外研修プログラムに関する資料の配布、留学関連イベントの開催、学内でのポスター掲示、プログラム説明会での留学経験者の発表を通し、全

プログラム番号	派遣国・地域	派遣大学	参加者																					
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
1	アメリカ	OLED (Conference on Lasers and Electro Optics)、スタンフォード大学	2																					
2	アメリカ	カリフォルニア工科大学	2																					
3	アメリカ	サンフォードバーナム医学研究所、カリフォルニア大学サンディエゴ校	3																					
4	ドイツ	ハンブルク大学																						
5	大韓民国	東亜大学校																						
6	タイ	キングモンクト工科大学トンブリ校																						
7	ドイツ	ドイツ国立物理工学研究所	2																					
8	オーストラリア	サザンクロス大学																						
9	マレーシア	プトラ大学マレーシア	2																					
10	マレーシア	マラヤ大学	2																					
11	マレーシア	モナシュ大学マレーシア	1																					
12	台湾	中国薬学大学	2																					
13	中国	天津工業大学	2																					
14	ベトナム	ハノイ工科大学	1																					
15	マレーシア	トゥンクアブドゥルラーマン大学																						
16	スイス	Europhoton、ノイチャテル大学、スイス連邦工科大学	1																					
17	アメリカ	ボートランド州立大学																						
18	ニュージーランド	ワイカト大学																						
19	大韓民国	釜山大学校																						
20	インドネシア	アイランガ大学	1																					
21	アメリカ	ジョンズホプキンス大学	2																					
22	タイ	スリーパトナム大学																						
23	タイ	チュラロンコン大学																						
24	台湾	国立成功大学	2																					
25	中国	浙江理工大學																						
26	中国	浙江大學	1																					
27	台湾	国立高雄大学																						
28	アメリカ	マサチューセッツ大学、B-Bridge International, Inc.	1																					
29	タイ	ラーヨン産業保健・環境保健センター	2																					
30	英国	バーミンガム市立大学、レスター大学、グレンフィールド病院、セントクリストファーズホスピタル	3																					
31	アメリカ	アルゴンヌ国立研究所	1																					
32	フィリピン	国立フィリピン大学物理学研究所																						
33	シンガポール	南洋理工大學	1																					
34	中国	西安理工大学																						
35	中国	ASSL (Advanced Solid State Lasers)、上海交通大学、浙江大學、理工大學																						
36	カナダ	トロント大学																						
37	タイ	タマサート大学																						
38	カナダ	オカナガン大学																						
39	オーストラリア	ディキンソン大学																						
40	アメリカ	ボートランド州立大学																						
41	中国	上海理工大学																						
42	タイ	チャントラカセム・ラチャット大学																						
43	タイ	キングモンクト工科大学 ラートクラバン校																						

平成26年度の短期海外研修プログラム参加者の各奨学金の受給者数、支給額は以下のとおりである。

- 日本学生支援機構海外留学支援制度（短期派遣） 受給者：107名、支給額：9,320,000円
- 福井大学学生海外派遣支援金 受給者：100名、支給額：5,900,000円

＜学生指導・危機管理＞

本学で実施する短期海外研修プログラムの参加者には、事前オリエンテーションへの参加を義務付けている。国際課が実施する事前オリエンテーション（共通）では、プログラム参加手続き、渡航にあたっての注意点、危機管理に関する情報提供を行い、全学生が不安なく準備・留学できるよう支援および指導をしている。その他、プログラム別に事前学習を目的としたオリエンテーションや渡航国によっては危機管理に特化したオリエンテーションを実施しており、これらを通し、留学の効果が最大限になるよう努めている。

短期海外研修プログラム参加にあたっての海外旅行保険への加入は長らく必須としていたものの、万が一、事件や事故が発生した際に、渡航者全員に対して迅速かつ適切な対応を可能とすることを目的とし、海外旅行保険の購入窓口および加入保険の種類の一元化を行うため、平成26年度に保険会社および取扱代理店によるプレゼンテーション審査会を実施した。海外旅行保険の補償内容は、本学における留学プログラムの特徴を踏まえた専用プランとし、平成27年度からの一元購入に備えた。

前述のとおり、短期海外研修プログラムは実施数が多く、派遣時期や派遣国が多岐に渡っている。各プログラムの実施にあたって、プログラム担当教員には海外研修プログラム実施ガイドラインに基づき、「海外研修プログラム実施計画書」の提出を義務付けており、国際課にて各プログラムの実施体制の把握や危機管理体制の構築を行っている。平成26年度には、タイ・バンコクでのデモ、バングラデシュ・クルナでの政情不安、イスラム国による欧米の主要ショッピングセンターでのテロ予告などの状況を受け、研修の実施可否の判断や学生への注意喚起を行った。中には外務省、現地日本国大使館、受入大学、現地報道機関等からの情報を総合的に

判断したうえで、本学として海外派遣中止を決定したプログラムもあった。

また、プログラム参加学生および引率教職員は、危機管理サービスに加入し、24時間対応の万全なサポート体制のもとに渡航している。

<目標管理・能力向上>

GGJにおいて、本学が育成を目指すグローバル人材を「Global IMAGINEER（歴史や文化が異なる地域においても、世界の人々と協働して生き生きとした暮らしづくりに貢献できる高い専門能力と創造力・実践力を有した技術者）」と概念化しており、このGlobal IMAGINEERが持つ資質と能力を（1）基礎的知識・教養、（2）自己学習力・問題解決能力、（3）コミュニケーション能力（語学力含む）、（4）異文化に対する理解・自己アイデンティティの確立、（5）専門的知識・能力、（6）創造力、（7）社会的責任・使命感の7つと定義している。

これらの能力を学生が在学中に意識的かつ最大限に向上させるための一つの指標として、平成25年度にルーブリック法による独自の「福井大学グローバル・コンピテンシー・モデル」を作成した。当モデルは、各能力を5つのレベルに分け、それぞれのレベル毎に達成されるべき行動例を示したものである。本学の短期海外研修プログラム等に参加する学生は、渡航前後に当モデルを用いた自己評価を行い、国際交流コーディネーターがその記載について助言等を行いながら、留学中および帰国後の目標管理および成長度測定を行っている。

グローバルスキル	詳細	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
基礎的知識・教養	グローバル社会で活躍する上で基礎となる知識・教養	日本のニュース、映画、WEBなどから時事問題などについて日々情報を得ている	国内の時事問題等がどのような背景・理由で起こっているかを自分なりに見立てて考え、世界で起こる出来事についても日々情報を得ている	得た情報の信頼性、妥当性を判断し、その上で、日本、世界について豊富な知識・教養を身につけ、幅広く自分なりの意見を持っている	基礎的知識・教養を踏まえて世界の様々な問題を客観的に考え、自分の意見をもとに積極的に意見を述べることができる	
	主体性・積極性・チャレンジ精神、物事に進んで取り組む力	自分の成長を他人に働きかけ巻き込む力	現状を分析し、目的や課題を明確にイメージし、それに向けて具体的な目標、計画を立てることができる	課題解決に向けた目標、計画の作成を客観的に分析し、改善点を今後の継続的・発展的な行動に繋げることができる	グローバルな問題に臨んで課題解決を導き、英文・多文化を背景に持つ関係を築きながら課題を解決することができる	
自己学習力・問題解決能力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	現状を分析し、目的や課題を明らかにし準備する力	現状を分析し、目的や課題を明確にイメージし、それに向けて具体的な目標、計画を立てることができる	課題解決に向けた目標、計画の作成を客観的に分析し、改善点を今後の継続的・発展的な行動に繋げることができる	グローバルな問題に臨んで課題解決を導き、英文・多文化を背景に持つ関係を築きながら課題を解決することができる	
	目的を達成し確実に行動する力	自分の成長を他人に働きかけ巻き込む力	自分の成長を他人に働きかけ巻き込む力	自分の成長を他人に働きかけ巻き込む力	自分の成長を他人に働きかけ巻き込む力	
コミュニケーション能力	相手の話をよく聞き、相手の意見を丁寧に伝える力	相手の話をよく聞き、相手の意見を丁寧に伝える力	相手の話をよく聞き、相手の意見を丁寧に伝える力	相手の話をよく聞き、相手の意見を丁寧に伝える力	相手の話をよく聞き、相手の意見を丁寧に伝える力	
	異文化に対する理解、差別や偏見を排除し異なる見識・文化を理解する力	異文化に対する理解、差別や偏見を排除し異なる見識・文化を理解する力	異文化に対する理解、差別や偏見を排除し異なる見識・文化を理解する力	異文化に対する理解、差別や偏見を排除し異なる見識・文化を理解する力	異文化に対する理解、差別や偏見を排除し異なる見識・文化を理解する力	
異文化に対する理解・自己アイデンティティの確立	自己アイデンティティの確立、自分の出身地域や背景について自己理解し、誇りと自信を持って自己や自国、自国文化について発信する能力	自己アイデンティティの確立、自分の出身地域や背景について自己理解し、誇りと自信を持って自己や自国、自国文化について発信する能力	自己アイデンティティの確立、自分の出身地域や背景について自己理解し、誇りと自信を持って自己や自国、自国文化について発信する能力	自己アイデンティティの確立、自分の出身地域や背景について自己理解し、誇りと自信を持って自己や自国、自国文化について発信する能力	自己アイデンティティの確立、自分の出身地域や背景について自己理解し、誇りと自信を持って自己や自国、自国文化について発信する能力	
	協働性・柔軟性、意見や立場の違いを理解し、知識・情報の共有、協働、協力を行う力	協働性・柔軟性、意見や立場の違いを理解し、知識・情報の共有、協働、協力を行う力	協働性・柔軟性、意見や立場の違いを理解し、知識・情報の共有、協働、協力を行う力	協働性・柔軟性、意見や立場の違いを理解し、知識・情報の共有、協働、協力を行う力	協働性・柔軟性、意見や立場の違いを理解し、知識・情報の共有、協働、協力を行う力	
グローバルスキル		プロフェッショナルスキル				
		専門的知識・能力				
		創造力				
		社会的責任・使命感				

<今後の展望・課題>

前述のとおり、本学では平成24年度より短期海外研修プログラム実施における体制整備を積極的に進めてきた。グラフが示す通り、プログラム数や留学者数が大幅に増加していることは特筆できる成果であろう。ただし、これまではGGJによる補助金を利用し、これらの体制整備に努めてきたが、平成28年度末に控えるGGJの終了を前提に、さらに検討していかなければならない点が複数ある。

第一に、短期海外研修プログラム実施にかかる必要経費の削減、特に、教職員による学生引

率費の削減である。年度を経る毎に引率者の人数および旅費金額の縮小に努めているものの、平成26年度には37本のプログラム中25本にて本学教職員が学生引率を行った。派遣国・地域に熟知している引率者が付くことで学生の安全が確保され、移動および事務の効率化やプログラムの質の確保につながっていると言える一方、今後の長期的なプログラム実施にあたっては、高額となる引率経費を鑑み、引率体制の見直しを図らざるを得ない。平成26年度からは、引率費に上限を設定することで、引率有無の再考や引率日数の短縮を促進しているが、受入れ大学とのさらなる調整や、学生相互派遣による授業料免除の可能性の模索など、最低限の経費で安全かつ発展的に学生派遣ができる体制の構築を進める必要がある。

次に、学生においては、現在は日本学生支援機構海外留学支援制度（短期派遣）や福井大学学生海外派遣支援金をプログラムの参加費に充てる学生が非常に多いが、今後の長期的かつ継続的な学生派遣を見据えると各種奨学金の確保のほかにも、派遣先大学での授業料免除によるプログラム実施のための調整や受入れ大学との相互協力を確認・依頼する必要があるであろう。例えば、学術交流協定校における交換留学枠を活用した短期海外研修プログラムの実施や留学費用の積立制度など、本学の短期海外研修プログラム体制に合った新たな手段を検討する必要がある。

さらに、平成25年度以降は全学学内委員会において、各短期海外研修プログラムの実施可否について審議を行ってきたが、今後は全学学内委員会での審議前に各学部がプログラム内容や派遣先、付与単位数等について確認し、全学学内委員会においてそれらを総合的に評価することで質の高いプログラムを発展的に継続実施する仕組みを作ることも急務の一つである。このような管理体制が円滑に機能すれば、より多種多様なプログラムの実施、つまり現時点では実施できていない産学官連携プログラムや海外企業インターンシップ等、新たなプログラムの開発・実施にもつながるはずである。

また、危機管理マニュアルを見直し、各機関・部署がそれを認識することで、危機管理体制の強化を図ることも急速に取り組むべき課題である。幸いにも、本学ではこれまでに海外での大きな事故や事件の発生事例はないが、プログラム数や留学者数が増加し、派遣国が多様化する中、発生のリスクは必然的に高まっている。危機・危険を回避するための対策および万が一それらが起こった場合の対応策（メディア対策および保護者対応等）をあらかじめ全学的に検討・共有し、学生の安全な留学の実現に努めていく。

4-2. 交換留学プログラム

■ 交換留学生（派遣）実績

年 度	留学先	留学国	留学期間	所 属	学 年
平成22年度	クレムソン大学	アメリカ	2010.8～2011.5	教育地域科学部	4年
	フィンドレー大学	アメリカ	2010.8～2011.5	教育地域科学部	4年
平成23年度	クレムソン大学	アメリカ	2011.8～2012.5	教育学研究科	1年
	クレムソン大学	アメリカ	2011.8～2012.5	教育地域科学部	4年
	フィンドレー大学	アメリカ	2011.8～2012.5	教育地域科学部	4年
	フィンドレー大学	アメリカ	2011.8～2012.5	教育地域科学部	4年

平成24年度	クレムソン大学	アメリカ	2012.8～2013.6	教育地域科学部	4年
	フィンドレー大学	アメリカ	2012.8～2013.5	教育地域科学部	4年
平成25年度	クレムソン大学	アメリカ	2013.8～2014.5	教育地域科学部	4年
	フィンドレー大学	アメリカ	2013.8～2014.5	教育地域科学部	4年
	フィンドレー大学	アメリカ	2013.8～2014.5	教育地域科学部	4年
平成26年度	フィンドレー大学	アメリカ	2014.8～2015.5	教育地域科学部	4年
	ハンブルク大学	ドイツ	2014.10～2015.3	教育地域科学部	3年

上記のとおり、平成22年度から26年度の交換留学（派遣）は、アメリカのクレムソン大学およびフィンドレー大学への派遣が多数を占めている。また、学生の所属学部および学年も教育地域科学部4年生、中でも学校教育課程（言語教育コース・英語教育サブコース）の留学者が多い。

■ これまでの取組み

<動機づけ>

交換留学においては、長期的かつ段階的な留学計画・準備が必要であるため、入学直後の新入生オリエンテーションでの制度説明のほか、全学的に留学関連イベントや交換留学説明会を実施することで、留学関心層の増加に努めている。

特に、交換留学者の多くが、交換留学前に短期海外研修プログラム等への参加経験を有していることから、短期海外研修プログラム参加者を対象とした帰国後オリエンテーションでは、参加プログラムの振り返りのほか、次のステップとして交換留学や中・長期留学への挑戦を促すなど、内容を工夫して実施している。

<情報提供>

平成24年度に、海外留学についての基礎情報、手続きやスケジュール管理のための情報を掲載した「海外留学ロードマップ」を作成し、翌年度以降も全学的に配布を継続している。当海外留学ロードマップを利用することで、留学に関する情報を得られるほか、冊子内のワークシートの利用により各学生が希望する留学について整理することができ、指導教員や国際交流コーディネーターが学生の関心やニーズに応じた留学個別相談をしやすくなった。

平成25年度に作成した「国際交流・留学ホームページ」では、本学が育成を目指すグローバル人材像、学術交流協定校リスト、海外留学体験記等を掲載し、情報提供を行っている。当ホームページは、平成26年度以降もさらなる充実化を図っている。

平成25年度には、国際課執務室前に留学情報掲示板、学術交流協定校の大学パンフレットや関連資料、留学情報誌や各種留学関連資料等を学生が常時自由に閲覧できる情報スペース「留学OASIS」を設けた。留学OASISでは、国際交流コーディネーターによる留学個別相談も随時行っており、必要に応じて適切な資料を利用することにより、的確な助言ができる体制が整った。また、タッチパネル式のデジタルサイネージも設置し、各種留学プログラムの参加者募集情報や関連動画を掲載することでより広く学生に情報提供を行えるようになった。

このほかにも、中・長期留学の検討にあたっては、留学検討初期から渡航直前まで、十分な情報提供が必須であることから、交換留学募集要項や募集ポスター等についてもその都度見直

しを行い、情報提供の方法および掲載情報には特に工夫しながら進めてきた。

<体制整備>

交換留学者（派遣）の募集は、平成23年度までは年1回のみ行っていたが、平成24年度からは年2回とし、秋学期留学開始希望者は1月頃、春学期留学開始希望者は9月頃に募集・選考を行っている。募集の回数を増やすことにより、より多くの学生に交換留学制度について周知する機会ができ、交換留学を視野に入れた中・長期留学についての相談件数の増加につながっている。

また、新たな交換留学先となり得る学術交流協定校の増加および既存協定校との連携強化を目指し、平成26年度には国際交流コーディネーターが国際教育フェアや国際会議に参加した。平成27年3月に中国・北京で開催されたAPAIE 2015では、アジア、北米、ヨーロッパの高等教育機関等の担当者約1,000名が集まり、世界の国際交流の動向を把握し、相互に学生交流や研究交流の可能性を模索した。本学は、アジアを中心とする高等教育機関との連携を目標に約40大学との打ち合わせを行った。学術交流協定締結を前提とした協議や既存協定校の交換留学プログラムの最新情報を入手できたことは、本学の交換留学制度の充実化および留学者数の増加につながる成果である。

さらに、アジア太平洋地域における高等教育機関間の学生・教職員の交流促進コンソーシアムであるUMAP（University Mobility in Asia and the Pacific：アジア太平洋大学交流機構）を活用すべく、UMAP-USCO参加に向け、平成26年度にUMAPと協定書を取り交わした。平成26年度現在、アジア太平洋地域の約60大学がUMAP-USCOに参加しており、本学からもこれら参加大学への交換留学が可能になるなど、留学先の拡大につなげることができた。

また、希望する交換留学先が提示する語学要件を満たすことが難しく、交換留学を断念せざるを得ない学生が多く存在する状況を踏まえ、平成26年度からは、本学においてTOEFL ITPを年2回実施し、また新規に学術交流協定を締結する際に、語学要件としてTOEFL ITPの利用を交渉することで、より多くの学生が交換留学を視野に入れることができる体制・環境づくりを進めている。

<学生指導・危機管理>

交換留学者や長期留学者は、留学決定から渡航まで半年程度の期間があることが多いため、渡航までに入学手続きや査証取得等の準備を着実に行う一方、留学前に語学力や各能力の向上に努めることにより、現地で最大限の学びを得られるよう、事前オリエンテーションを複数回実施している。また、長期留学者にも、短期海外研修プログラム参加者と同様に福井大学グローバル・コンピテンシー・モデルを用いた自己評価を課している。自己評価は出発までに計2回、1回目は留学決定後、2回目は渡航直前に行うことで、目標および達成度を段階的に管理し、確実な成長を促している。また、危機管理については、一般的な注意事項のほか、海外での長期生活において予測されるカルチャーショック・逆カルチャーショック等についても取扱い、留学中および帰国後の学生生活が円滑に進められるよう指導している。

＜今後の展望・課題＞

交換留学については、近年においても本学からの留学者数は数名に留まっており、派遣先や派遣者の所属・学年も限定的である。要因としては、①既存の学術交流協定校と本学学生の留学希望の不一致、②不均衡な貸借バランス、③単位互換・認定制度の整備不足、④学生の語学力の欠如、⑤国際交流専門職員の不足などが考えられる。

- ①現状、本学においては、多くの学生が留学を希望する欧米の学術交流協定校が少ない。これまでは、教員による研究交流を目的としたアジアの大学との学術交流協定の締結が主であったことから、現状の学術交流協定校の国・地域には大きな偏りがあり（アジア：48、ヨーロッパ：12、北米：6、南米：1、オセアニア：1、中東：1、アフリカ：1）、英語圏の大学は、実質クレムソン大学とフィンドレー大学（いずれもアメリカ）に限られている。また、非英語圏の大学の場合、英語開講科目が限定的である大学では、学生が自らの専門分野や興味に応じた科目の履修が満足にできない場合がある。これらを解決するためには、本学学生のニーズにあった交換留学先を拡大することが必須である。そのために、前述のとおり、APAIEやNAFSA等の国際教育フェアへの参加やUMAP等の学生交流コンソーシアムを最大限に利用することで、世界で進む高等教育のグローバル化におけるアジア高等教育機関の今後の動向を複眼的に考察しながら、今後の本学の国際化を進めていく。
- ②本学学生の主な留学先であるクレムソン大学とフィンドレー大学については、本学からの派遣超過が続いているため、不均衡な貸借バランスを鑑み、派遣者数を制限せざるを得ない状況がある。一方、アジアの大学については、受入超過となっている学術交流協定校が多い。このような不均衡を解消し、長期的な学生交流を継続するためには、交換留学枠を利用した授業料免除による短期プログラムの実施など、相互の大学や学生のニーズを考慮しつつ柔軟に検討を進める必要がある。
- ③本学における単位互換制度が不十分であることも、学生が交換留学を踏みとどまる大きな要因の一つである。単位互換・認定制度が十分でなければ、留学先での取得単位が互換できず、本学での在籍を延長せざるを得ない。交換留学を行った場合でも、標準年数内で卒業・修了できる仕組みを構築することが急務である。この点について、平成28年度設置予定の新学部である国際地域学部では、海外留学を活かした学びを特長としていることから、標準年数の在籍で交換留学が行えるよう単位互換制度の見直しを行っている。国際地域学部における新たな単位互換制度を全学的に波及させることで、他学部においても交換留学者の増加に繋げられるよう取り組む。
- ④交換留学を希望する学生についても、交換留学応募時の語学力が十分でない（希望派遣先大学の語学要件を満たしていない）、TOEFLスコアを有していない等、語学力が理由で交換留学を諦めざるを得ない場合も多い。現状、長期留学希望者に対するTOEFL・IELTS対策コース等は実施できておらず、学生の自主学習に委ねている。国際地域学部では、1年次に集中的な英語科目の履修およびTOEFL対策講座の受講により、語学力の底上げを図り、留学先での日常生活および学業生活に支障のない語学力を身に付けるカリキュラムが組まれる予定であるが、他学部の学生を対象とした対応についても検討が必要である。
- ⑤最後に、国際交流分野における業務については、高度な語学力や世界の教育市場と教育のグローバル化に対する深い知識、鋭い感性を持つ国際交流専門職員が極めて重要になる。世界

やアジア地域の高等教育の発展・変化を理解し、その展開に日本の高等教育がどのように戦略的な関わりを持つべきかを考え、それをもって、本学のグローバル化を牽引していくことのできる職員の育成が必須である。

4-3. その他の留学プログラム

国際交流センターでは、上述の短期海外研修プログラムおよび交換留学以外にも、外部の国際交流・留学プログラムや奨学金制度等への申請を積極的に行い、以下のような海外留学等の機会を学生に提供することにより、グローバル人材育成の促進に努めてきた。

■ KAKEHASHI プロジェクト

平成25年度に北米地域との青少年交流の一環として外務省が推進する「KAKEHASHI Project -The Bridge for Tomorrow-」の米国短期派遣事業に本学が採択され、学生12名及び引率教員2名が米国に2週間派遣された。同事業は、北米地域との青少年交流を通し、日本に対する潜在的な関心を増進させ、訪日外国人の増加を図るとともに、日本的な価値や強み・魅力等を伝え、国際理解を増進させることを目的として実施されたもので、派遣学生は日本の魅力に関する英語のプレゼンテーションを米国各地の大学で実施し、日本への関心層の拡大に貢献したほか、大学での学生交流や米国企業や歴史・文化施設等への訪問等を通して、異文化への理解を深めた。また、国際交流基金からの要請を受け、平成26年度には米国派遣学生の訪問先の一つであったピッツバーグ大学より25名（学生23名、引率2名）を本学にて受入れ、学生交流や文化体験を中心とした学校交流プログラムを実施した。米国派遣学生及び外国人留学生を含む本学学生30名が学生ボランティアとして企画詳細の立案、事前準備、当日対応にあたり、訪日学生及び本学学生の双方が日本や地域、大学の魅力に対する理解と関心を深め、また双方が短時間の中で密な交流を行い、長期的な日米間のネットワークを作るきっかけとすることができた。

■ 官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN～日本代表プログラム～

平成26年度に開始された官民協働型の海外留学支援制度である「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」に、平成26年度（第1期）には本学から6名が応募し、そのうち2名が合格した。1名（工学部4年生）は、米国・マサチューセッツ大学にて次世代エネルギー開発に関する研究およびシリコンバレーの企業でのインターンシップを合計約3ヶ月間行った。1名（医学部4年生）は、インドにて発展途上国での医療補助および公衆衛生（公害病）に関する実習を1ヶ月間行った。

当学生らは、帰国後も第2期以降の募集時の支援や学外での留学啓蒙活動等に従事しており、当制度の目的通り、日本および本学の留学機運を高めることに貢献しながら、将来は世界を視野に入れて活躍できる人材になるべく活動している。

<今後の展望・課題>

国をあげてグローバル人材育成の施策が進められる中、今後も政府や地方団体による留学支援・促進制度、産学官の連携に基づく支援制度、本学独自の制度等を最大限に活用することで、

世界や日本における国際教育分野の動向を把握しながら、本学のグローバル化およびグローバル人材育成の取組みに寄与できるよう戦略的な国際交流を推進していく。

5. 学術交流等協定

平成26年（2014年）1月までに、国際課国際連携担当と国際交流センター・グローバル人材育成部教員が連携し、学術交流協定の交渉、締結、運用、更新等を一元管理する体制を整えた。新規学術交流協定締結の流れは、次の①～③である。

①教員が新規に学術交流協定の締結を希望する場合、教員は国際課国際連携担当および国際交流センター・グローバル人材育成部教員に相談する。その段階で、協定の種類（部局間協定または大学間協定）、交渉内容及び妥協点（ゴール）、交渉人、手続き及び署名までの流れとタイムライン等について具体的な決定とコンセンサスづくりを行う。②上記①の決定項目について国際交流センター長の承認が取れ次第、学術交流協定締結に向けた手続きを開始する。③全てのコミュニケーションは共有され、ファイルに紙ベースで記録、保存する。

このような明確な役割分担と協力体制の確立により、平成26年1月～平成27年3月までの15ヶ月間で、5つの大学間協定と5つの部局間協定、合計で10の学術交流協定が締結された。平成25年12月までの学術交流協定締結数の推移を見れば、平成26年1月以降の15ヶ月間の新規協定締結数の増加は特筆すべきものであることがわかる。

さらに、平成26年1月以降の新規学術交流協定締結の特徴は、その増加数ばかりではなく、交換留学制度に基づく学生交流を、研究および教員交流と同様に、学術交流協定の重要な柱として位置づけ、それを協定書に盛り込んでいることである。それまで、教員が学術交流を行う最大の目的は、研究（教員）交流であり、学生交流は2次的な存在であった。しかし、国際交流センターおよび国際課国際連携担当が学術交流協定締結交渉を行うことで、年間交換人数・授業料相互徴収・宿舎確保・査証取得支援、緊急時対応策、などの必要項目を確認し、学術交流の骨子を協定書に盛り込むようになった。

学生交流を盛り込むという新規学術交流協定の交渉における新しい流れは、これまでの学術交流協定締結におけるひとつの問題を示唆していた。それは、教員交流を主たる目的としているために、教員が選ぶ学術交流協定校とその国が、学生が留学を希望する大学や国と一致しておらず、教員間と学生間に「ズレ」が生じていた点である。これでは、学生交流の拡大を期待することは出来ず、学内における単位認定の問題やカリキュラムや教務システムの国際通用性についての議論が発生することはなく、そもそも問題意識さえ生まれぬ。

そこで、国際交流センター・グローバル人材育成部は、交換留学制度の下で学生交流を行うことを主たる目的とした新規学術交流協定の締結を模索することとした。そのために、国際課国際連携担当ばかりではなく、国際課国際教育担当とも連携し、その体制を強化した。その第一弾が、UMAPコンソーシアム型交換留学制度（USCO：UMAP Student Connection Online）への加盟である。これにより、加盟大学と、年間2名まで（希望すれば最大5名まで）の学生の派遣・受入が可能となる。USCOは、2大学間交換留学制度のような（累積）貸借バランスを考慮する必要が無いために、学生を積極的に派遣する仕組みとなっており、留学を必須とする

新学部を設置した本学にとっては有利な条件をもった学生交流協定である。

今後は、学生が留学を希望するアジア有力校および欧州、北米の大学との間で、交換留学制度に基づく学生交流を目的とした学術交流協定の拡大を目指す。そのことにより、文部科学省が推奨する中長期の派遣生を増加させ、本学のグローバル人材育成に寄与する。

6. 留学生と日本人学生の学内交流活動

6-1. 定期交流活動

(1) 国際交流ラウンジ

平成13年度から平成23年度前期までは、毎月第1、第3及び第5木曜日に「国際交流ラウンジ」を実施していたが、福井大学語学センターの発足に伴い、平成23年度後期よりその活動を語学センターに移管した。ただ、その活動案内の本学留学生への配信については、国際交流センター相談・交流担当教員が引き続き行っている。

案内文（和文例：実際には和英併記でメール配信を行う）

留学生及び日本人学生の皆さん

下記の通りお話し会「第95回国際交流ラウンジ」を行います。

英語・日本語のレベルアップに、お友達づくりに。

ぜひ、お誘い合わせの上、ご参加ください。

日 時	12月3日（木曜日） 18：15～19：15 （毎月第1、第3及び第5木曜日18：15～19：15開催）
場 所	国際交流センター ラウンジ
参加者	留学生及び日本人学生
内 容	前半30分は英語、後半30分は日本語によるグループ自由会話
話 題	『冬、12月』
参加費	無料（飲み物、お菓子付）
主 催	福井大学留学生会

福井大学生協 S O S E N 部

(2) ビデオショウ

平成13年度より平成24年度まで、毎週第2、第4木曜日に「ビデオショウ」を実施していたが、インターネット上で世界中の映画を容易に観賞できるようになったこと等もあり、参加者が減少したため、平成25年度以降は実施されていない。

案内文（和文例：実際には和英併記でメール配信を行う）

留学生及び日本人学生の皆さん

下記のとおり、第95回ビデオショウを行います。

お誘い合わせのうえ、おいでください。

日 時 1月15日（木曜日） 18：15～20：30

題 名 スラムドッグミリオネア

（本編英語、日本語字幕付き） <http://saludo.gaga.ne.jp/>

場 所 国際交流センター ラウンジ

参加費 無料（コーヒー、お菓子付き）

** いい映画の推薦をぜひお願いします。

（国内外、どこの国の映画でも）

Fady Alnajjar,

Secreratry,

University of Fukui International Student Association (UFISA)

6－2．その他学内活動

その他の主な活動としては、福井大学留学生会主催による8月の国際交流サマーキャンプ（1泊2日、越前海岸での水泳、国見岳宿泊、バーベキュー。毎年2～30名参加、参加費3,000円）、2回の国際交流スキー旅行（本学よりバスで約1時間のスキージャム勝山への日帰旅行。毎回3～40名参加、参加費1,000～9,000円）がある。その他に、サッカー、バレーボール、バスケットボールなどのスポーツ大会、歓送迎会、忘年会などを実施している。特に平成20年度から福井大学留学生事務局において種目別スポーツ委員会が編成され、毎週日曜日午後15：00～19：00に本学体育館にて各種スポーツ競技が行われ、毎回20名前後が参加している。平成25年度後期以降は、体育館の使用の都合上、実施できていない。

6－3．福井大学留学生会

（1）設立背景と事務局構成

平成15年11月に福井大学留学生同窓会が発足したことを機に、同窓会事務局の提案により、福井大学留学生会が平成16年4月に発足した。その目的は、留学生間の相互の交流と相互扶助、日本人学生および地域社会との交流である。福井大学留学生会の会長は福井大学中国人留学生学友会会長が務めることになっているが、事務局長およびその他の事務局員は毎学期開始時に事務局会議を開催して選任される。そして、各種行事毎の実行委員会が編成され、実行委員会を中心に行事を企画運営している。

(2) 福井大学留学生会の活動

福井大学生協学生組織SOSEN部などと協力しながら、国際交流ラウンジ、歓送迎会、国際交流キャンプ、国際交流スキー旅行、各種スポーツ大会などを実施している。また、地域社会との交流活動としては、県内国際交流団体が主催する行事に積極的に参加している。また、地震・津波等災害救援のための募金活動などもその都度行っている。

6-4. 学内交流活動の課題

- (1) 相談・交流担当教員は日本人学生との授業等を通じた接点がないこともあり、連絡体制の構築が難しい。現在は、各種活動に参加する日本人学生から個別に情報を収集しネットワークを構築している。
- (2) 留学生の大半は私費留学生であり、その多くが生計維持のためにアルバイトをしなければならず、実験やレポートなど課題が多く、活動に参加する時間が取れない学生が多い。
- (3) 留学生個々人が様々な活動に参加できないと、相談交流担当者との接触が薄くなり、徐々に顔が見えなくなる。そして、ある日突然大きな問題を抱えて相談に来ることになる。
- (4) 従って、各種交流活動に参加しなくても、常に、目の届くような体制構築が課題である。
- (5) 学内外の交流活動に参加するあまり研究が疎かにならないかと懸念する指導教員もいるので、それも考慮する必要がある。

IV. 研究

1. 国際交流センターとしての研究活動

1-1. 研究紀要の刊行

国際交流センターでは、平成17年度から平成25年度まで『福井大学留学生センター紀要』、平成26年度からは『福井大学国際交流センター紀要』を刊行している。掲載論文全文を国際交流センターホームページに掲載している。

平成22～26年度の掲載論文題目は以下の通りである。

平成22（2010）年度

- ・「留学生同窓会の活動、その役割と方向性について」 中島清
- ・「地域在住外国人に対する日本語ボランティア養成講座における脱『日本語教師養成講座』の試み」 桑原陽子

平成23（2011）年度

- ・「漢字2字熟語の意味推測に及ぼす語構成に関する知識の影響－主要部の位置との関わりから－」 桑原陽子

平成24（2012）年度・平成25（2013）年度（合本）

- ・「漢字2字熟語の意味の透明性の調査」 桑原陽子

平成26（2014）年度

- ・「非漢字系上級日本語学習者による漢語動名詞の意味推測の困難点－『する』の有無が推測に及ぼす影響－」 桑原陽子
- ・「三岡八郎宛ウィリアム・エリオット・グリフィス書状再考」 膽吹覚

1-2. 助成金によるプロジェクト

国際交流センターの各教員は、個々に外部助成金を申請し研究活動を行っている。それらについては、巻末の個人データを参照されたい。

国際交流センターの日本語プログラムに関わる助成金として、福井大学内の競争的配分経費が1件採択されている。

- ・平成23年競争的配分経費・教育「入門期の日本語学習者のためのかな学習用教材“Japanese KANA workbook”対応音声教材の作製」（研究代表者 桑原陽子）200,000円

この経費により、平成19年に作成したかな教材「Japanese KANA workbook ひらがな・カタカナれんしゅう」の音声教材を作成した。得られた効果は以下のとおりである。

- ・国際交流センターホームページから音声教材を自由にダウンロードできるようになり、学習者が容易に教材を入手できるようになった。
- ・音声教材CDの複製と学習者への配布（海外も含む）が容易になった。

1-3. 研究大会等開催

国際交流センターはその規定第3条（業務）第6項に「外国人留学生と地域社会の交流に関すること」及び第7項に「留学生ネットワーク構築に関すること」を掲げている。更に、中期目標として「国際交流センターに国際交流機能を持たせ、国際交流の一層の推進を図る。」を掲げている。国際交流センターでは、国際交流推進とネットワーク構築を目指し、下記①、②の研究大会を主催開催した。

①福井大学留学生同窓会世界大会

福井大学留学生同窓会世界大会は、福井大学留学生同窓会13支部内、支部相互及び福井大学とのネットワークを通じた協働、特に「グローバル人材育成」について考え、また、同窓会支部相互間及び福井大学教職員学生間において情報共有し、親睦を深めることを目的として開催された。大会では、1)各支部の活動の現状と今後、2)支部相互間の活動の現状と可能性、3)各支部及び帰国留学生全体のネットワーク構築、4)「グローバル人材育成」のための協働、という4つのテーマについて活発な意見交換が行われた。参加者からは、母校である福井大学への思いや、これまでの支部活動や自らの日本での留学体験を基に、福井大学の留学プログラムへの協力についての提案などがあった。（詳細は別刷報告書参照）

開催日時	平成25年9月8日（日）13：30～17：00
会場	福井大学文京キャンパス 総合研究棟 I 13F会議室
支部代表者	ノル・ディアナ・ビンティ・ヤーコブ（マレーシア支部） タマサック・タンマ（タイ支部） ナスラー・イドリス（インドネシア支部） 韓進旭（韓国支部） 程文（西安支部） 国慶志（上海支部） 朱麗君（北京支部） 孫愛静（浙江支部） 陳耿明（台湾支部） シャットシュナイダー・ザンドラ（ハンブルグ支部） 符茂島（日本支部） モハンメド・アブ・ユスフ（バングラデシュ支部） キン・ラット（ミャンマー支部） オルダリア・トモエ・オクノ（ブラジル） ファニー・エディス・ヘルナンデス・バイト（メキシコ） 曹志揚（福井大学留学生会会長）
コーディネーター	中島清（福大学国際交流センター教授）
出席者	約100名（福井大学留学生同窓会関係者、卒業留学生、在学留学生、本学関係者等）
主催	福井大学国際交流センター、福井大学留学生同窓会
共催	福井大学留学生会

②グローバル人材育成シンポジウム「福井から世界へーグローバル化への課題ー」

グローバルに活躍する本学卒業生及び福井県産業界、行政、高等教育機関のそれぞれの観点から、グローバル化に伴う組織上あるいは人材育成上の課題を確認し・共有し、今後の取り組み活かすことを目的として開催された。まず、基調講演では、日本が高等教育改革等において遅れをとっていることや、若者の「内向志向」の原因等について指摘があった。次に、「地元産業界との連携」、「アクティブな留学生同窓会との連携」、福井大学が目指す「Global Imagineerの育成」についての講演があり、引き続き演者をパネラーとしたパネルディスカッションが行われた。パネラーたちのディスカッションに対し、フロアの聴衆からも多くのコメントが寄せられて終始活発な意見交換がなされ、今後福井大学が進めていくグローバル人材育成推進事業の方向性が見出された。（詳細は別刷報告書参照）

開催日時	平成25年9月9日（月）13：30～17：00
会場	福井大学文京キャンパス 総合研究棟 I 13F会議室
基調講演・パネラー	「欧州（ドイツ）からみた日本のグローバル化への課題」 イリス・ヴィーツォレック（株式会社IRIS科学・技術経営研究所 代表取締役社長）
講演・パネラー	岩堀 一夫（株式会社シャルマン 取締役専務執行役員） 于 平（福井大学留学生同窓会上海支部 事務局長） 飛田 英孝（福井大学大学院工学研究科 教授）
コーディネーター	橋本 明弘（福井大学大学院工学研究科 教授）
出席者	約130名（本学教職員、在学生、留学生、地元産業界、教育関係者等）
主催	福井大学
共催	福井県留学生交流推進協議会
後援	福井県、福井商工会議所

また、上記の研究大会の他に下記の研究会を開催した。

③日本語教育学会北陸地区研究集会

開催日時	平成23年6月18日（土）
会場	福井大学総合研究棟 I 13階会議室
主催	日本語教育学会
研究発表	3件
講演	「JSL児童生徒に対する日本語指導と教科学習支援の関係ー教科学習を意識した「読み書き」支援活動を考えるー」
講師	池上摩希子氏（早稲田大学教授）
参加者	72名

④日本語教育学会北陸地区研究集会

開催日時	平成26年6月21日（土）
会場	福井大学総合研究棟 I 13階会議室
主催	日本語教育学会

研究発表 3件

活動報告 4件

講演：「外国人への接し方と話し方 ～日本語教育の根っこを考えよう～」講師：
荒川洋平氏（東京外国語大学教授）

参加者：76名

2. 各教員の研究活動

各教員は、以下のような各分野の研究を行っている。各教員の業績の詳細については、巻末資料の個人データを参照されたい。

- ・日本語教育部

桑原 陽子：日本語教育

膽吹 覚：日本文学

- ・グローバル人材育成部

虎尾 憲史：日本語教育

小幡 浩司：国際交流

3. 課題

研究紀要の掲載論文が少なく、掲載論文数が増えることが望ましい。特に、国際交流センターの日本語プログラムの授業実践や教材作成について、その妥当性や効果を検討した論文・実践報告がさらに増えることが望まれる。学内の競争的配分経費の獲得によって、音声教材が作成されたことは大きな成果であった。

平成25年度に開催された福井大学留学生同窓会世界大会は、グローバル人材育成推進事業の評価・推進を目的に平成28年度にも開催される予定であるが、次の世界大会を有意義なものとするためには、新たな同窓会支部の開設による支部網の拡大・充実とともに、そのネットワークの相互有効利用法の開発と展開が課題となろう。

V. 社会貢献

1. 社会貢献活動の概要とその考え方

国際交流センターはその規程第3条（業務）第6項に「外国人留学生と地域社会との交流推進に関すること」及び第7項に「留学生ネットワーク構築に関すること」を掲げている。更に、中期目標として「国際交流センターに国際交流機能を持たせ、国際交流の一層の推進を図る」を掲げている。

本項では、社会貢献活動を「1. 留学生諸活動を軸とした社会貢献活動」と「2. 各教員の社会貢献活動」に分けてそれぞれ概説する。

「留学生諸活動を軸とした社会貢献活動」における、その事業推進の基本理念は、「地域の産官学民各層とのネットワーク、福井大学留学生同窓会各国支部網とのネットワーク、在学留学生組織である福井大学留学生会を軸とした学内ネットワーク、以上3つのネットワークを活用して地域産官学民との重層的な交流活動を展開し、地域社会の国際化に貢献すること」である。それは、地域社会の国際化にとどまらず、在学留学生の日本理解と日本人学生の異文化理解を深化させ、帰国留学生各国との交流を促進し、世界平和を構築すると共に、わが国の国際的な地位確立に貢献するものである。国際交流センターには相談・交流部門の教員（平成25年度まで中島清教員、平成26年度から虎尾憲史教員）が1名配置され、主にその担当教員と国際課が連携しながら、これらの事業を積極的に展開している。

他方、本学は福井県における基幹大学として、地域各界の諸活動に対して、各教職員がその専門性を活かした支援や連携活動を展開することを推奨している。そして、国際交流センター教員も個々の専門性を活かした社会貢献活動を展開している。

2. 留学生諸活動を軸とした社会貢献活動

2-1. 地域社会との相互支援交流活動

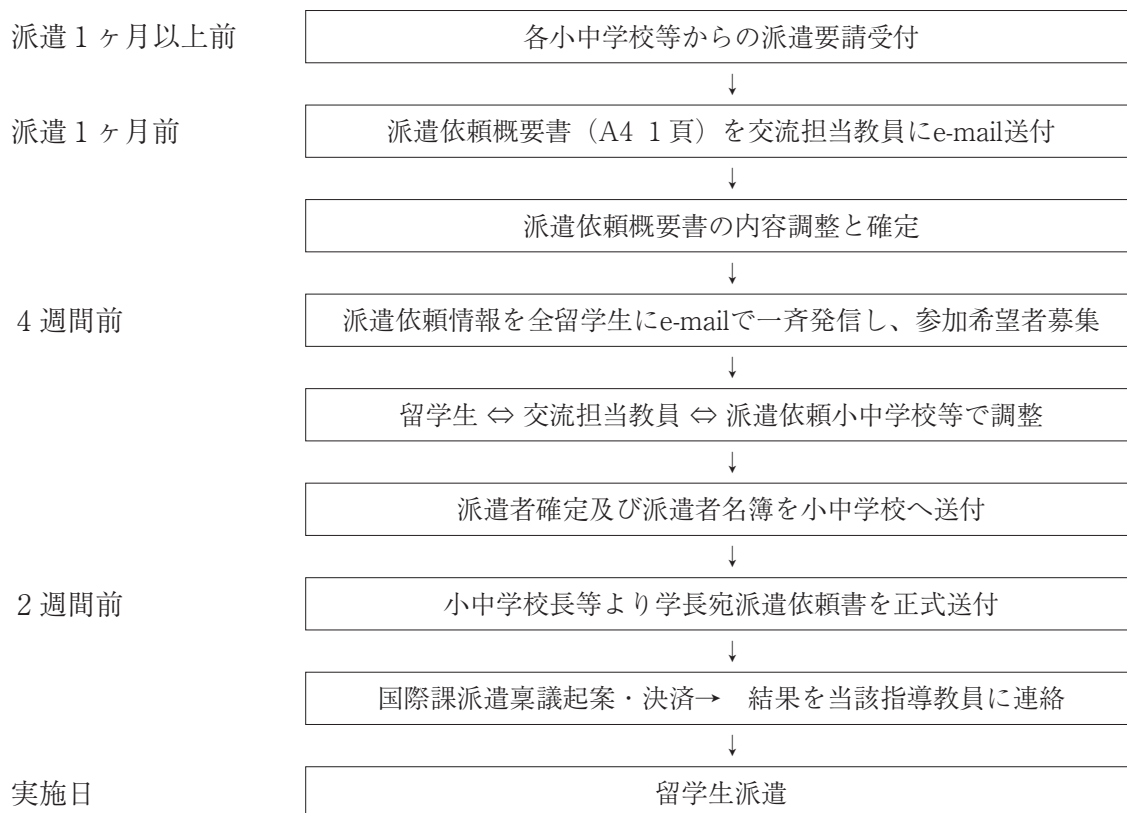
地域社会は温かく留学生を迎え、受入れ、支援してくれている。留学生も地域の国際化のために、何かをし、喜んでもらう。その満足感、達成感、充実感こそが自己の存在意義、社会貢献の証しとして懐かしい思い出となる。ギブ&テイクのベクトルは常に双方向の満足感を伴うが、ギブによる思い出こそが知日派、親日派を育てると認識している。その認識から、小中学校の総合学習、企業への通訳・語学講師派遣など、地域社会の国際化支援活動を展開している。

国際交流センターとしての留学生派遣状況は平成14年度（25件）から全て記録してあるが、本報告書該当年度での派遣実績は平成22年度50件、23年度54件、24年度52件、25年度42件、26年度43件となっている。

尚、これらの件数はあくまでも、相談・交流担当教員が直接介在して派遣したもので、地域社会との関係が重層に構築される中で、国際交流センターを通さず、留学生が直接、地域各交

流協会の語学講座講師や文化教室講師、また公民館や幼稚園の活動等に参加している例も多い。
派遣の流れと、派遣実績は下記表V-1及び表V-2の通りである。

表V-1 留学生派遣の流れ



表V-2 平成26年度の留学生派遣実績

1	5月21日	ふくい市民国際交流協会「中国の遊び紹介」 昭和幼稚園	1
2	5月31日	インターナショナルさかい「国際グラウンドゴルフ大会とBBQパーティ」	1
3	6月18日	ふくい市民国際交流協会「マレーシアの遊び紹介」 昭和幼稚園	2
4	6月22日	ふくい市民国際交流協会「ワールドツアー・スポーツ交流」ふくい健康の森	1
5	7月7日	ふくい市民国際交流協会「韓国水原市とのスカイプによる市民語学交流会」	1
6	7月12日	ふくい市民国際交流協会「ゆかたの着付け教室、交流会」 湊公民館	1
7	7月12日	ふくい市民国際交流協会「韓国のお菓子作りと韓国の紹介」 湊公民館	1
8	7月12日	福井県国際交流協会「ホームビジットプログラム」	14
9	7月19日	インターナショナルさかい「市民とのボウリング交歓会」	3
10	7月26日	ふくい市民国際交流協会「韓国の料理作り」 たんぼぼ児童館	1
11	8月2日	福井県国際交流協会「浴衣で歩こう！」	13
12	8月11日	ふくい市民国際交流協会「韓国水原市とのスカイプによる市民語学交流会」	1
13	8月12日	ふくい市民国際交流協会「ワールドツアー夏休み企画」旧春山保育園	1
14	8月23日	ふくい市民国際交流協会「ワールドツアー・世界地図を作ろう」	11
15	8月24日	福井県国際交流協会「和菓子作り体験」	14
16	9月18日	ふくい市民国際交流協会 多文化共生セミナー「HAFU」上映&ディスカッション	4
17	9月27日	ふくい市民国際交流協会「ワールドツアー夏休み企画」旧春山保育園	2

18	10月3日	ふくい市民国際交流協会「中国の紹介」 ふれあいサロン六条	1
19	10月6日	ふくい市民国際交流協会「韓国水原市とのスカイプによる市民語学交流会」	1
20	10月18日	福井国際交流フェスティバル 「ごみ問題に関する国際アンケート」	60
21	10月25日	日本赤十字社福井県支部「高校生国際交流のつどい」	5
22	10月26日	福井国際交流フェスティバル「Nature Game」 ボランティアスタッフ	8
23	11月7日	ふくい市民国際交流協会「マレーシアの紹介」 ふれあいサロン六条	1
24	11月15日	ふくい市民国際交流協会 多文化共生のまちづくり「和菓子作り」 湊公民館	4
25	11月23日	永平寺町吉野公民館「第20回おらが村でも国際交流」	5
26	11月27日	ふくい市民国際交流協会 多文化共生セミナー「世界の国々と比べよう、日本」	2
27	12月1日	ふくい市民国際交流協会「韓国水原市とのスカイプによる市民語学交流会」	1
28	12月12日	ふくい市民国際交流協会「中国の紹介」 清水東デイホーム	1
29	12月20日	ふくい市民国際交流協会「ワールドツアークリスマス」旧春山保育園	3
30	12月21日	福井県国際交流協会「和楽器を体験しよう！」	10
31	12月26日	国際交流センター餅つき大会	4
32	1月19日	ふくい市民国際交流協会「韓国水原市とのスカイプによる市民語学交流会」	1
33	1月24日	ふくい市民国際交流協会 多文化共生セミナー「やさしい日本語&節分交流会」	5
34	2月1日	福井市日本中国友好協会「日中友好交流会『春節の集い』」	30
35	2月2日	ふくい市民国際交流協会「韓国水原市とのスカイプによる市民語学交流会」	1
36	2月12日	ふくい市民国際交流協会「クロアチアの紹介」 昭和幼稚園	1
37	2月15日	日中友好協会福井支部「春節祝賀日中友好交流会」	40
38	2月27日	ふくい市民国際交流協会「フィリピンの紹介」 円山デイホーム	1
39	3月2日	ふくい市民国際交流協会「韓国水原市とのスカイプによる市民語学交流会」	1
40	3月8日	ふくい市民国際交流協会「郷土歴史博物館と養浩館見学ツアー」	9
41	3月14日	福井観光コンベンションビューロー「おもてなし英会話講座」福井商工会議所	4
42	3月17日	附属中学校第1学年プロジェクト「日本文化」文化交流部門校外学習国際交流	4
43	3月26日	ふくい市民国際交流協会「フィリピンの紹介」 東安居公民館	1

2-2. 福井県等官界とのネットワークと交流活動

福井県、その傘下の福井県国際交流協会、同嶺南センター、その他各自治体の国際交流協会との連携交流活動を積極的に実施している。

(1) 福井県との連携活動

- ①「観光庁2020年オリンピック・パラリンピックに向けた地方の『おもてなし』向上事業による福井県における外国人旅行者受入環境改善に関する調査」への協力

意見聴取会議実施時期 平成26年11月
 モニターツアー実施時期 平成27年2月
 調査協力対象者 在学留学生、教職員
 協力者数 8名
 調査実施団体 (協)アドビジネスセンター
 県側連携部署 福井県観光営業部

- ②「スプリングプログラムin 上海」を共同事業として実施

本学日本人学生の国際性涵養をはかるため、大学院入学前導入教育として、平成20年度

に第1回を開催以来、継続して実施している。2週目は本学側が企画・運営を担当し、教職員が全期間上海に出張し調整に当たっている。本講座の履修科目は「工学研究科共通科目」として単位認定される。今後も毎年継続実施する予定である。

(26年度の例)

講座開設期間	平成27年3月8日から21日まで2週間
講座開設場所	上海理工大学（中国、上海市）、宿泊先も同大学ゲストハウス
参加者	福井大学工学部4年生21名、工学研究科1年生5名
内容	1週目 「中国語・中国文化」「工学関係の講義」 2週目 「海外企業経営・技術論」及び「海外インターンシップ」
講師	1週目 上海理工大学講師 2週目 福井県上海事務所長、現地進出福井県企業経営者 及び福井大学留学生同窓会上海支部会員（会社経営者）
共同事業者	福井大学、上海理工大学、福井県、福井大学留学生同窓会上海支部、 県側連携部署 福井県観光営業部国際・マーケット戦略課、及び福井県上海事務所

③福井県国際交流会館指定管理者選定委員会に委員長として支援

福井県国際交流会館を管轄する福井県観光営業部観光振興課より委嘱され、指定管理者選定委員会の委員長として中島教員が平成25年8月6日及び11月1日の両日選定委員会に参加し、指定管理者の選定に当たった。

④公財）福井県国際交流協会外部評価委員会に委員長として支援

福井県国際交流会館を管轄する福井県観光営業部観光振興課より委嘱され、外部評価委員会委員長として中島教員が平成26年3月17日、虎尾教員が平成27年3月25日の委員会に参加し、事業評価と評価書作成に当たった。

2-3. 商工会議所等産業界とのネットワークと交流活動

社会・経済のグローバル化が進む中で、地域経済界が生き延びる、更に発展するためには、各企業の国際化は喫緊の課題である。そして、その柱となるのが、国際戦略を担う人材確保である。

他方、留学生も卒業後、実務経験を身につけたい、更には、人生設計を日本の産業界に求めたいという学生が増えている。日本社会が抱える少子化、そして、世界的な人的移動と人材確保競争の中で、国際交流センターとしては、地域国際化支援の核として、地域産業界への人材供給と留学生の就職支援を目的に、平成13年、14年、18年に「県内企業と留学生の交流会」を実施した。その結果、留学生の国内就職者は、次のように推移してきている。

表V-3 国内就職留学生数の推移

年 度	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
国内就職者数	8	6	16	23	9	26	30	19	15	21	20	21	16	16
うち県内就職者	4	2	9	9	4	7	11	8	6	7	10	7	3	3

平成13年度以降、19年度までは着実に増加していたが、それ以降、20年度、21年度は減少した。22年度以降やや持ち直したが、25年度から再び減少に転じている。しかし、この数字は必ずしも就職活動自体が厳しかったということではなく、平成19年度をピークに減り続けている留学生数の減少に呼応したものと認識している。今後も商工会議所、JETRO等と連携しながら、留学生の国内就職、特に県内企業への就職を推進していきたい。

2-4. ネットワーク誌「こころねっと」の発行及び地域・国際交流ネットワークの構築

① ネットワーク誌「こころねっと」の発行

卒業留学生、在学留学生、教職員、日本人学生、地域産官学民各界とのネットワーク構築のために国際交流センターネットワーク誌「こころねっと」を創刊号の平成13年秋号以降毎年発刊している。平成22年から26年には第11号から第15号をそれぞれ発行した。「こころねっと」の概要は下記の通り。

表V-4 「こころねっと」概要

発行部数	2,300部
体 裁	A 5 版、46ページ、カラー印刷
配 布 先	卒業留学生、在学留学生、本学教職員学生、地域国際交流機関・個人、 県下全小中高校、各大学国際交流センター、他
編 集	在学留学生中心の編集委員会（約10名）
内 容	在学・卒業留学生投稿記事2／3、センター行事等1／3が目安。 行事感想、生活・旅行・映画・読書等体験、各国文化・社会紹介 各国挨拶紹介、各国料理紹介、帰国留学生からのメッセージなど

② 地域・国際交流ネットワークの構築

地域・国際交流活動を推進するため、卒業留学生を含むネットワーク構築とその活用を図っている。構築媒体として、「国際交流センターホームページ<http://ryugaku.isc.u-fukui.ac.jp/>」の役割も大きい。ネットワーク構築の基盤となるのが、住所及びメールアドレスの登録と管理である。eメールによる受発信で全世界の仲間たちと常時交信し、心の絆を醸成し日々のコミュニケーションを行っている。

その登録状況は下記のとおりである。

ネットワーク誌「こころねっと」発送等のための登録住所概数（ラベル打出用）

帰国及び在日卒業留学生 1,200件

県内小中高、企業、機関等 700件

情報発信、交流促進のためのメールアドレス概数（携帯等重複）

帰国及び在日卒業留学生 1,300件

在学留学生（携帯等重複） 200件

その他 500件

また、近年その利用者が世界的に拡大しているフェイスブックについても、その有効利用の可能性と問題点等を探るため、平成26年度より虎尾教員が個人アカウントによる試用を開始しているところである。

2-5. 福井大学留学生同窓会活動

①福井大学留学生同窓会設立の背景

昭和45年に福井大学第1号留学生Lim Kim Teck氏が工学部繊維染料学科に入学して以来、約1960名の留学生が福井大学で学び、約1,500名が帰国し、約220名が卒業後日本国内に就職して勤務中である。平成13年秋のネットワーク誌「こころねっと」創刊に当たり、帰国留学生全員の住所ラベルを作成し、冊子を送付した。その中に、「福井大学留学生同窓会登録用紙」を同封したところ、多数の返信があった。そこが設立の出発点である。

②福井大学留学生同窓会設立

文部科学省より特別配分予算を受け、平成15年11月30日に「第1回福井大学留学生同窓会大会」を開催。招聘した帰国留学生13名及び在学留学生計91名が参加し、同窓会設立宣言文を採択した。そして、劉丁会長以下事務局を選任した。

③支部設立の動き

平成16年12月マレーシアのクアラルンプールで「福井大学留学同窓会マレーシア支部設立大会」が開催され、支部設立宣言文の採択と事務局選出が行なわれた。その後、タイ、インドネシア、韓国、西安、上海、杭州、台湾、北京、ハンブルク支部が設立され、平成20年11月に日本国内支部、そして、平成21年12月にバングラデシュ支部、平成23年12月にはミャンマー支部が設立された。現在13支部が活動を展開している。

④同窓会の活動

同窓会支部に期待される活動としては、①支部会員相互の情報交換、交流や連携活動、②他（国）支部との情報交換、交流や連携活動、③福井大学との交流や情報交換、相互協力、④福井大学留学生会（在学留学生組織）との交流や情報交換、⑤福井県や県民との経済、文化、友好交流活動の推進などがある。

⑤福井大学留学生同窓会世界大会の開催

Ⅳの1-3①でも記載したとおり、平成25年9月8日、福井大学留学生同窓会13支部の代表等、卒業生27名を含む参加者100名が福井大学文京キャンパス13階会議室に集い、親交を深めた。平成15年11月30日に福井大学留学生同窓会設立大会を開催してから丁度10年の節目にあたり感慨深いものがあった。

「福井大学留学生同窓会13支部内、支部相互及び福井大学とのネットワークを通じた協働」について考える。特に「グローバル人材育成」について考える。また、「同窓会相互間及び福井大学教職員学生間において情報共有し、親睦を深める」というのが大会の趣旨である。

まず、13支部代表、およびメキシコとブラジルの代表が活動状況について報告し、コーヒースブレイクの後、意見交換を行った。（詳細は別刷報告書参照）

世界大会のテーマの一つとして「グローバル人材育成」を掲げた。日本人若者の内向き志向を打破し、グローバル人材として育成するための文部科学省「グローバル人材育成推

進事業」に本学が採択されたこともあり、日本人学生のグローバル化教育に留学生先輩たちの支援をお願いした。

⑥グローバル人材育成シンポジウム「福井から世界へーグローバル化への課題ー」

Ⅳの1-3②でも記載したとおり、平成25年9月9日、本学に博士留学生として研究留学経験のあるイリス・ヴィーツォレック氏を基調講演者・パネラーに、福井大学留学生同窓会上海支部事務局長の于平氏を講演者・パネラーに迎えて行われた。両氏にはその講演でもディスカッションでも、示唆に富むご意見、ご指摘をいただいた。（詳細は別刷報告書参照）

⑦「スプリングプログラムin 上海」

2-2 (1)-②で記載したとおり、26年度も第7回「スプリングプログラムin 上海」を実施した。今後も継続実施の予定である。このプログラムは上海理工大学、留学生同窓会上海支部、福井県（特にその上海事務所）、及び現地進出福井県企業、4者の共同事業であり同会活動のモデル事業と位置付けている。受講科目は工学研究科博士前期課程入学後、履修科目として単位認定される。また、本プログラムの最終日には関係者への感謝を込めて、交流会を実施しているが、福井大学留学生同窓会上海支部会員も毎年15名ぐらいが合流している。

⑧「浙江理工大学サマープログラム」

平成23年度より浙江理工大学との協定に基づき中国語学習を中心とした「浙江理工大学サマープログラム」を共同実施している。応募者が少なくて実施できなかった平成25年度以外毎年実施されており、今後も福井大学留学生同窓会浙江支部とも連携しながら継続実施の予定である。平成26年度は「中国江南地域文化体験」短期研修プログラムとして、他の協定大学からの学生（今回は佐賀大生1名）と合同で実施された。

(26年度の例)

講座開設期間	平成26年9月14日から27日まで2週間
講座開設場所	浙江理工大学（中国、杭州市）、宿泊先は同大学留学生寮
参加者	福井大学工学部5名、工学研究科1名、教育地域科学部3名
内容	午前 「中国語講座」及び「中国文化講座」 午後 「中国文化体験」及び「フィールドトリップ」

⑨独立行政法人日本学生支援機構主催「平成23年度留学生交流実務担当教職員養成プログラム」にて講演

本学の同窓会を中心とした帰国留学生ネットワークが高く評価され、雑誌への投稿、講演を依頼されることが多いが、平成24年度は下記のとおり東京と大阪で講演した。

日時	大阪：平成24年3月3日（金）13：30～17：00 東京：平成24年3月5日（月）13：30～17：00
場所	大阪：チサンホテル新大阪 東京：東京ガーデンパレス
演題	「帰国留学生ネットワーク構築」について ～ 構築、フォローから相互交流、そして共同事業展開へ～ (14：25～15：15)
参加者数	大阪65名、東京91名

講演者 中島 清（福井大学国際交流センター教授）

⑩福井大学留学生同窓会タイ支部設立10周年記念総会の開催

現在13支部を擁する福井大学留学生同窓会の第2番目の支部として平成16年12月に設立されたタイ支部が昨年末で10周年を迎えたことから、同支部設立10周年記念総会が平成27年3月14日にバンコク市内で開催され、岩井善郎理事・副学長（研究・国際担当）、虎尾憲史国際交流センター教授、竹本拓治産学官連携本部准教授らが出席した。

在タイ日本国大使館から2名、ふくいバンコクビジネスサポートセンターから2名の来賓も出席し、タイ全土から駆け付けた同窓生らと共に10周年を祝いつつ、改選された新支部長アニワット・ハスーク氏（ラジャマンガラ工科大学イサン校教授）のもと、福井大とだけでなく、タイに進出する福井の企業・団体や県民との交流、連携、協力関係をも更に進展させるべく、盛んな意見交換が行われた。

2-6. 福井県留学生交流推進協議会

県内産官学民の計30団体機関が会員となり、「福井県における留学生の円滑な受入れの促進及び留学生と地域住民との交流活動を推進する」ことを目的として活動しているが、国際交流センターからは、センター長及び相談交流担当の虎尾憲史教員がその運営委員会委員として参画している。また、福井大学国際課がその事務局となっている。

その主な活動としては、「留学生救済援助金」による国民健康保険料助成、情報交換などである。また、毎年、「福井県留学生だより」を国際課が編集し、発行している。センターの諸活動もそこに掲載し地域に発信している。

2-7. 高志高校のSGH海外研修プログラム支援

平成26年1月25日（日）～2月1日（日）の期間で、タイ王国においてSGH海外研修プログラムを実施した。高志高校生4名は引率教員1名と共に、カセサート大学附属学校（マルチリンガルプログラム）、マヒドン大学インターナショナルカレッジ、マヒドン大学附属学校を訪問した。生徒達は、授業、プレゼンテーション、ホームステイ体験を通してタイ文化を学ぶと同時に、タイの教育制度、外国語・異文化理解教育についても理解を深め、同時に、「違い」から新たに探究すべき課題を得た。また、生徒はプレゼンテーションや、ディスカッションを通して、日本文化についての紹介を行うなど、異文化コミュニケーションにも自信をつけたようである。1週間のタイ研修を通して、生徒たちは大きく成長してくれたとの報告を受けた。

平成26年3月、高志高校はスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受けた。平成26年6月には、同校教諭および福井県庁より、SGH海外研修をタイで実施したいので、将来的な姉妹校協定締結の可能性も視野に入れて、①派遣先高校あるいは大学の紹介と、②SGH海外研修実施の交渉を行ってほしいとの依頼を受けた。

国際交流センターでは、平成26年9月までに、高志高校が実施を希望するプログラム内容を吟味し、上記2附属学校と大学を選考、次にSGH海外研修プログラム実施の合意を取り付けた。平成26年11月には、高志高校教員による研修実施予定の学校・大学の訪問に同行、それぞれの

学校代表を紹介するとともに、平成26年1月実施のプログラム詳細について最終の協議を行った。

平成27年8月には、SGH海外研修プログラムで約20名の高志高校生をタイの高校、大学に派遣予定であるが、タイ王国教育省高等教育局の支援も得ながらその準備を進めている。

2-8. 課 題

①地域社会相互支援活動と留学生の学習・研究活動のバランス

留学生の本分は学習・研究等であるため、交流活動によってそれが阻害されてはならない。交流活動に熱中し過ぎて研究論文作成が疎かになっているという苦情を時折指導教員よりいただく。その意味で、募集においてはあくまで学生個々に直接依頼せず、一斉メールで募集し、派遣稟議決済後その写しを指導教員に回付することになっている。

又、留学生は遠方の派遣先に自転車で向かうことが多いことから、事故等に備えて派遣先に一日傷害保険をかけるよう依頼徹底している。

実験などに追われる留学生は交流活動に参加する余裕がなく、小学校等からの要請に沿う留学生を確保するのはなかなか難しい。従って、余り積極的な派遣活動を展開することは出来ず、そのバランスが大切である。

②同窓会各国支部網の活用

同窓会各国支部網、ネットワーク誌「こころねっと」を通したネットワーク、帰国及び在日卒業生の住所やe-mailアドレス網は本学、及び地域社会の国際化戦略における重要なインフラと考えている。小規模大学が海外事務所を持つことは難しいが、同窓会支部には本学の海外支部としての役割を期待し、それを既にお願している。

③今後の活動方向

- ・同窓会及び在学生在が連携して、地域社会の国際化に貢献できるような活動の模索が必要である。

上海支部及び西安支部が編成し来訪したミッション型交流もそのプロトタイプであると言えるが、ミッション型交流をいかに継続実施できるかも課題である。

- ・本学教員が各国支部と協力して、現地で産官学民の参加者を集めて、シンポジウムや講演会を実施し、その中から国際共同研究のシーズを発掘し、更にそれに県内企業を巻き込むような活動も望まれる。
- ・同窓会支部網の活性化と、活動内容に関する情報交換のために、福井大学同窓会世界大会の開催の必要性を訴えてきたが、平成25年度に実現した。グローバル人材育成推進事業の評価・推進を目的に平成28年度にも世界大会を開催する予定である。世界大会を有意義なものとするためには、新たな発想による事業展開が課題となる。

3. 教員の社会貢献に関する活動

3-1. 地域在住外国人のための日本語ボランティアスタッフの育成

福井県の地域在住日本語学習者の日本語学習支援は、福井県国際交流協会及び各ボランティア団体が中心で行っており、日本語学習支援者育成のための講座が、各種団体により開講されている。平成22～26年度は、桑原陽子准教授が以下の講座の講師を担当した。

- ・平成22～26年度 福井県国際交流協会主催 「日本語ボランティア入門講座」基礎Ⅰ，基礎Ⅱ
(平成18年度より継続)
- ・平成25年度 NPOインターナショナルさかい主催「日本語指導ボランティア養成講座」

3-2. 教員免許状更新講習

福井県教員免許状更新講習において、平成21年度から平成24年度まで、今尾ゆき子教授と膽吹覚准教授、桑原陽子准教授が以下の講義を担当した。

「小学校国語科授業力育成講座 ー広がりのある学習活動に向けてー」

- ・国語学の知見を生かした表現学習の構想（今尾ゆき子）
- ・国文学の知見を生かした言語活動の構想（膽吹覚）
- ・日本語教育の知見を生かした言語活動の構想（桑原陽子）

3-3. 国際ゾンタ福井クラブ主催「留学生論文」審査

国際有職婦人奉仕団体である国際ゾンタクラブ福井は、福井県内の留学生を対象とする留学生論文募集事業を行っている。平成14年度より今尾ゆき子教授が参画して、ゾンタクラブ役員とともに論文審査を行っており、平成22～24年度も引き続き審査を担当した。

3-4. 経済産業省主催「教育機関における留学生支援関係者研修会」における講演

本学の留学生就職支援活動が評価され、講演を依頼されることが多く、平成24年度は下記のとおり大阪で講演した。

日 時	平成24年7月31日（火）13：00～17：00
場 所	大阪合同庁舎第一別館3階第4会議室
演 題	福井大学における留学生就職支援について（14：50～15：40）
参加者数	90名
講演者	中島 清（福井大学国際交流センター教授）

3-5. ふくい市民国際交流協会主催「多文化共生セミナー」における講演

福井市多文化共生推進プランに基づき、市民への多文化共生の意識啓発と、市民主体の多文

化共生活動や外国人市民の自立と社会参画を促すことを目的として、日本人市民と外国人市民に多文化共生についての理解を深める機会を提供する「多文化共生セミナー」において下記のとおり講演した。

①多文化共生セミナー第1回：「H A F U」上映会とパネルディスカッション

日 時 平成26年9月18日（木）18：00～20：30
場 所 福井県国際交流会館第1・第2会議室
参加者数 40名
講演者 福井市在住外国人、ハーフの方4名
虎尾憲史（福井大学国際交流センター教授）

②多文化共生セミナー第2回：「世界の国々と比べよう、日本」

日 時 平成26年11月27日（木）18：00～20：30
場 所 福井県国際交流会館第1・第2会議室
参加者数 40名
講演者 西出有由美（JICA北陸国際協力推進員）
虎尾憲史（福井大学国際交流センター教授）

3－6．家庭裁判所における家事調停活動

平成26年12月31日現在福井県内に外国人登録者が11,335人（内福井市3,753人）いるが、国際結婚のカップルも多い。福井家庭裁判所では離婚、親権、養育費、婚費分担、婦権侵害等々家庭における様々な問題の調停を行っているが、中島清教員は平成14年10月に福井家庭裁判所家事調停員、平成16年1月に同参与にそれぞれ任命され、それ以降平成25年度末の退職まで家事調停及び家事審判業務を行っていた。

留学生や研修生等国際関係業務に35年間携わった経験を生かし、また、海外生活10年の経験を生かして、その語学力を活用しながら、主として国際結婚における夫婦関係調整の調停を担当した。

調停業務は申立人と相手方の双方から話を聞きながら、お互いに譲り合いを促し、合意点を構築していく作業であり、裁判官と協議しながら進める仕事である。申立人や相手方は弁護士を代理人として同席させることもある。そして、調停の結果である調停条項は裁判における判決と同等の拘束力を伴う。

月1、2回、そして1回3時間ほどの業務であるが、異文化摩擦に起因する夫婦関係の調整をするという社会的貢献だけでなく、調停作業を通して調停員自身の社会規範等に関する認識を深めることもできるので、本学での相談業務にも役立っていた。

3－7．学外者による来訪各種相談

福井大学国際交流センターでは、県内産官学民レベルの国際交流や国際化を推進しているが、各界との連携業務を展開していく中で、学外者が幅広いテーマについて相談に訪れる。県内各層の関係者が相談交流担当教員の研究室に各種相談のために来訪している。

交流活動に関する相談が50.3%、留学生採用に関する相談が34.7%で、この二つで85%を占めているが、その外に、研究への協力依頼とか、事件・事故の加害者や被害者の来訪相談もある。

例えば、小学校等で交流活動を開始するに当たって、内容や時間配分、注意点や謝礼金の是非等についての相談があれば、過去の例を提示しながら、アドバイスするようにしている。

留学生採用について相談があれば、過去の成功例、失敗例を提示しながら、アドバイスするようにしている。事業計画が未熟な場合には、留学生採用には時期尚早であるとした上で、福井県海外駐在員事務所、福井大学留学生同窓会各支部事務局を紹介するなどして、Feasibility Studyを十分やるように促している。

3-8. 課 題

各教員の社会活動は、平成22年度以前と比較すると多様化している。さらにその活動は一回限りのものではなく、継続して行われていると言える。これは、各教員の専門を生かした活動が、地域に根付いた結果であり、評価されるべきであると考え。今後もこれらの活動を各教員が継続していくと同時に、教員個人の活動から国際交流センター全体としての活動へと発展させていくことが望まれる。

資料 1

前回外部評価（平成20年6月）以降の改善点

I.	管理運営	105
II.	教育・研究	111
III.	学生支援	117
IV.	社会貢献	121

VI. 前回外部評価（平成20年6月）以降の改善点

I. 管理運営

1. 将来構想に関する事項

	改善を期待する点	改善点
1	留学生センターの業務は、留学生の日本語教育を中心とした教育業務に重点が置かれているのが現状である。今後は、日本人学生の海外派遣や海外の交流協定校及び地域社会の国際化推進への関わりなどが一層求められるものと思われる。留学生センターの将来計画の観点から、センターが今後果たすべき役割について、国際交流推進機構において十分な検討がなされることを期待する。	留学生センターは平成23年度に、学内で実施する学内委員会及び役員会によるセンター等の評価において、外部評価委員からと同様の評価を受け、「国際交流活動をより積極的・機動的に推進するため、全学を上げて有機的・総合的に国際交流を推進する新たな組織の在り方」を検討し、既存の留学生センターを発展的に改組し、平成25年4月に国際交流センターを設置した。
2	留学生センターの将来構想の検討はなされているか？また、全学の国際戦略の上で留学生センターは今後どのような役割を求められているか？	平成25年2月に、福井大学国際交流戦略理念と目標を次のように掲げた。 【理念】
3	多くの大学で留学生センターを国際交流センターに改組する動きがあるが、福井大学独自の国際戦略構想の中で、例えば、国際交流推進機構において、全学的な観点から留学生センターの将来計画について議論する必要がある。	福井大学は、活発な国際交流および国際水準での教育・研究を推進し、国際社会に貢献し得る人材を育成することと、独創的にかつ地域の特色に鑑みた先端的な教育地域科学研究、工学研究及び医学研究や医療の実践を通して世界的に優れた成果を発信することにより、国際社会に貢献します。
4	配置教員の専門性及びセンターの業務内容から判断すれば、受け入れ留学生に関する業務、特に留学生の日本語教育に重点を置いたセンターとして位置付けられている感が強い。全学的観点からの国際戦略や国際交流活動における留学生センターの関わりや位置付けを再検討すると共に、留学生センターの将来計画についても配置教員数や専門性について業務内容と共に検討することも必要である。	【目標】 1. 教育： 国際的な水準で教育を実施し、21世紀のグローバル社会における高度専門職業人として活躍できる人材を育成する。 2. 研究： 教育地域科学・医学・工学の分野において、伝統や地域特性を活かした研究拠点を育成し、特色ある研究で世界的に優れた成果を発信する。 3. 社会貢献： 優れた教育、研究、医療を通して、地域の国際化及び豊かな国際社会づくりに貢献する。

2. 組織・管理運営に関する事項

1	<p>留学生センターの業務が留学生教育に重きが置かれているが、それ以外にも大学教育の国際化推進活動（例えば、公募への申請や地域との国際的連携活動など）の中心的役割を果たす組織とすることについて検討する。</p>	<p>国際交流センターに、国際教育部門と国際連携部門の2つの部門を設置している。</p> <p>国際教育部門には、日本語教育部とグローバル人材育成部があり、外国人留学生に対する日本語教育、外国人留学生及び海外留学を希望する本学学生に対する修学上及び生活上の指導助言を行っているほか、地域との国際的連携活動などを積極的に実施している。</p>
2	<p>留学生センター長は教育・学生担当理事の兼任となっており、留学生センターの日常業務は、主に副センター長が実質的に中心となって活動している。留学生センターの活性化を表るためには、センター長の役割や在り方などについて、選考方法も含めた検討を期待する。</p>	<p>国際連携部門では海外との研究交流等を推進するため、海外大学等との学術交流、海外教育研究機関等との連携、本学研究者等の派遣・海外からの研究者等の受入れ、国際的な研究評価への対応、その他国際交流等の検討・支援等を行っています。</p>
3	<p>留学生センターの運営には、センター長、副センター長、理事、副学長など様々な役割が関わっている上、学内の留学生や国際交流に関する委員会も多岐にわたっているため、大学の国際交流活動全体における留学生センターの位置付けや役割分担などを明確にする必要がある。</p>	<p>センター長は学内規定により、学長が副学長又は教授等の内から選考することとなっており、現在は研究・国際担当の理事・副学長がセンター長を、教育・学生担当理事・副学長を副センター長に当て、センター専任教員と共に、留学生、本学学生の海外派遣に係る事業への対応及び大学のグローバル化、地域のグローバル化の牽引を担うよう備えている。</p>
4	<p>留学生センター教員は1名が工学部、4名が教育地域科学部の授業や研究指導を担当するなど、教育面での学部との連携は強いようである。今後、留学生センター独自で地域の国際交流組織と連携した地域貢献事業などを充実させて行く上で支障にはならないか？</p>	<p>国際交流を推進する上で学部との連携は必須であるが、センター設置後に新たに採用している専任教員は学部には属しておらず、全学的立場でセンターの業務が実施できるような体制としている。</p>
5	<p>留学生センターの運営には、理事・副学長・センター長・副センター長などが関わっており、留学生に関する委員会も全学的な委員会から各学部や研究科における委員会まで多種にわたっている。全学的な観点から、留学生及び留学生センターに関する委員会の簡素化を表り、留学生センターが主体的となった委員会組織や運営体制に向けての検討を期待する。</p>	<p>「国際交流推進機構」は、産学官連携本部と留学生センターの2組織のみが関連組織であったため本機構を廃止し、平成22年に学長、常勤理事、各学部長、研究科長等を構成員とする「国際交流企画会議」を新設し、全学の国際交流に係る一元的な企画・検討を行う体制を整えた。当会議に、これまでの国際交流委員会と国際交流推進機構企画会議の機能を統合し、国際交流に係る全学的な活動方針を策定することとした。また、当会議に専門部会を置き、学術交流協定に関する事項、国際交流活動に関する事項等を審議している。さらに、当会議のもと、教育面の国際交流は「留学生委員会（現国際交流センター運営委員会）」で、研究面は「研究推進委員会」でと、各々に個別問題委員会で審議することとして役割を明確にした。</p>

6	<p>平成19年度に国際交流推進機構が設置されているが、留学生への日本語教育を担う留学生センターと共同研究の活性化及び外部資金の導入を目指す他のセンター等が国際交流推進機構を構成することにより、留学生センターの独自性や教育活動の一層の活性化が表れているか？また、他のセンター等との具体的な連携強化は可能となっているか？</p>	<p>平成25年に留学生センターを発展的に改組し、国際交流センターを設置した。当センターの円滑な運営を図るために「国際交流センター運営委員会」を置いており、センター長、副センター長、センター専任教員、各学部選出の委員により組織されている。当委員会と国際課の連携により、国際交流センターの運営に係ることの他、留学生の受入れや本学学生の海外派遣に係る事項等について協議している。その他、センター専任教員会議を毎月開催しており、種々の情報共有を図っている。</p> <p>他センターとの連携については、当センターの教員が、共通教育センターの共通教育委員会や共通教育自己点検・評価実施小委員会、地域環境研究教育センターの地域環境研究教育センター全体会議、高等教育推進センターの学生支援部門会議、語学センターの運営委員会の委員を務めるなどの実績がある。さらに、各センターが実施する公開講座や講演・パネルディスカッション開催等の事業等への協力などの他、語学センターからは、各種情報の英語化における協力を得るなどの相互連携が図られている。</p> <p>また、語学センターとの連携により、言語開発センター（LDC）に日本語教材を配置しており、留学生の語学学習環境の整備を行い学習サービスの向上を図っている。</p>
7	<p>留学生センター教員の採用及び昇任人事に関する規定及びその手続はどのように行われているか？</p>	<p>全学において、大学教育職員の採用・昇格に係る人事手続きに関する要項が定められており、センター長が人事計画を作成し、人事計画に基づき採用・昇格の当該ポストの人事方針及び公募条件について学長に申請することとなっている</p>
8	<p>留学生センター予算はどのように決められているか？</p>	<p>前年度実績に基づき、財務課において各センター予算が配分されている。センター内においては、前年度実績、事業予定等を参考にセンター専任会議で協議し、センター長の承認を得る。</p>
9	<p>留学生が関わった事件、事故等についての対応マニュアルはあるか？また、どのような対応がなされているか？</p>	<p>国際課では、留学生の対応においても本学学生に係る関係諸規定等に基づき対処しており担当の学生サービス課において一部マニュアル化されているものもある。個々の案件については、先例等を参考に対処し、重要なものはセンター長、副センター長の判断を得ている。</p>

10	日本語と英語によるホームページであるが、世界中から留学生を集めている状況を考えると、他言語、特に中国語によるホームページも必要であると思われる。	受入学生向けホームページにおいては、一部中国語による情報を掲載しているが、平成28年度からの第3期には中国語のホームページの充実も計画を予定している。
11	留学生に関する事業への担当教員の負担を軽減し、より効率的かつ効果的に事業を実施するため、事務職員と留学生センター教員の連携強化を表ることが必要である。	平成24年4月の国際交流センター設置後の7月に国際課を設置し、事務局との連携のもと事業を推進している。 また、26年4月からは国際交流センター教員が国際課長を兼任しており、一層の連携強化が表られている。

3. 施設に関する事項

1	施設面に関して、留学生センターが部門別に別棟になっているのは、早急に改善していただきたいと願う。留学生の問題は、通常、日本語学習、専門、生活問題等、様々なことが重複している場合が多いため、日常的に教職員間でのコミュニケーションが重要になってくる。コミュニケーションが不足すると危機管理にも重要な問題が生じる。	改善の必要性は承知しているが、予算の都合でこれまで対応できていない。概算要求で国際交流センター全体が集合できる棟の建設を高順位で要望している。 日常的な教職員間でのコミュニケーションについては、毎月の専任教員会議で情報交換・情報共有に努めている。
2	センター施設、教員の研究室が異なるビル内に散在している状態では、業務を有機的に機能させるのは困難である。改善が望ましい。	
3	留学生センターとしてまとまった施設が必要である。現状では、日本語教育等を行う教室すら不足していることが明らかであり、早急に改善を期待する。	
4	国際交流推進機構の設置による国際交流関係組織の一元化と併せて、現在学内に分散している施設の一元化を実現し、留学生の就学及び生活支援体制の強化を実現することを期待する。	

4. 国際交流・日本人学生派遣に関する事項

1	学術交流協定の締結や教職員及び日本人学生の海外派遣など、留学生を含めた教育・研究活動以外の国際交流活動において、留学生センターはどのような役割を果たしているか？また、大学の国際戦略などの策定に留学生センターはどのように関わっているか？	国際交流センターの設置により、学術交流協定の締結や教職員及び日本人学生の海外派遣などもセンター業務に含まれるが、現在は文部科学省の事業（経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援）に採択されたこともあり、主に国際課及び支援事業運営の委員会等を中心に推進している。 大学の国際戦略などの策定については、学長を主査とする国際交流機会会議が担当している。
---	---	---

2	<p>日本人学生の派遣は「ポスト10万人計画」に位置付けられている我が国の重要な留学生施策であるが、受け入れ留学生の支援に比べて、日本人学生の派遣には、福井大学の明確な戦略性、独自性が見られない。全学的な観点から人的、経済的支援の強化が必要である。</p>	<p>日本人学生の派遣については、文部科学省の事業（経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援）に採択されたこともあり、積極的に取り組んでいる。語学インストラクターの採用や留学を支援するコーディネータの採用の他、学生が適切な時期に最適な研修に参加できるよう海外研修プログラムの充実を表っている。</p> <p>また学生には政府や地域の奨学金利用のサポートをしている他、本学独自の奨学金制度も用意し、その結果、多くの学生が活用して海外研修に参加している。</p>
3	<p>留学生と日本人学生の交流推進のためには、日本人学生から主体的に関わることが重要である。留学生センターの支援の下で、日本人学生独自の国際交流組織を強化し、その活動を活性化させる必要がある。</p>	<p>留学生をサポートするチューター制度や、留学生のガイダンスやイベントをサポートする留学生サポーター制度でも、日本人学生に留学生と交流するきっかけづくりを作っている。センターで実施するサマープログラムに参加する短期研修留学生との積極的な交流を表るため、グループワークやフィールドトリップ、ウエルカム／さよならパーティへの本学学生の参加・企画者を募集するなど、交流の機会の提供を表っている。また、語学センターでは、グローバル・ハブにて留学生と日本人学生の交流推進のためのイベントの開催等を実施している</p>
4	<p>留学生センターとしての活動は受け入れ留学生が中心となったものであるが、全学的な国際交流活動への留学生センターとして独自の提案や企画・実施はできないか？</p>	<p>国際交流センターでは国際課との連携により、留学生の受け入れのみならず、全学的な国際交流活動への提案や企画・実施を進めている。</p>
5	<p>国際交流活動を今後一層推進させるためには、全学的な理解と協力が必要であるが、このための「全学的なポリシー」は策定されているか？</p>	<p>平成25年2月に、福井大学国際交流戦略理念と目標を掲げ、ホームページに掲載している。</p> <p>また、平成27年4月には学長が全教職員向けに、本学のグローバル化に向けてのメッセージを発信している。</p>
6	<p>他大学との連携による留学生センター独自の国際交流事業の実施は考えられないか？</p>	<p>平成27年4月から6月までの3ヶ月間と9月に実施予定の大学連携リーグ「ふくい企業学」に、国際交流センター教員が講師として参加することで調整を行った。このイベントは県内の大学教員と福井県起業家が集まり、県内大学生を対象とし、レクチャーやディスカッションを通して、グローバリゼーションやグローバル人材育成について学ぶ機会を与えるものである。国際交流センター教員は、レクチャーと、「ふくい企業学」に福井大学留学生を参加させ、より多文化な交流空間を創出する役割を担う。</p>

7	日本人学生の海外留学支援相談は、担当者の健康上の事情もあって、相談件数が極端に少なく、実際に交換留学生として送り出す学生も毎年数名にすぎないと書かれている。福井大学の理念「・・・国際社会に貢献し得る人材の育成」を実現するためには、何らかの工夫が必要であろう。	国際課にコーディネータ2名を配置し、海外留学支援相談の対応を実施している。文部科学省の事業採択もあり、積極的に海外留学を推奨し様々な取組・支援の結果、平成26年度の留学者数は227名と大幅に増加している。
---	---	--

5. 留学生受入れに関する事項

1	日韓共同理工系学部留学生の受入れに関してなにか尽力しているのだろうか。それとも無理をする必要はないという方針なのか。	これは、韓国の学生側に留学希望大学の選択権があり、都会の一流大学志向が強い。したがって、尽力のしようがなく、無理をしようにもできない案件である。
---	--	--

6. 地域連携に関する事項

1	留学生支援の充実を表るには、地域の各種国際交流組織との連携強化も必要であるが、この点に関する留学生センター独自の取組みを積極的に展開、強化する必要がある。	(公財)福井県国際交流協会、(公財)福井県アジア人材基金等、県内国際交流組織との連携表り、留学生に向けての支援(交流イベント、日本語能力診断試験の受験料助成や就職活動支援等)の広報・手続き支援等を実施している。
2	福井県・福井市など地方行政機関が地域の国際化について留学生センターに期待する点も多いと思われるが、地方行政機関との関係強化に対する具体的な方針はあるか?	第3期中期目標に、地域のグローバル化を牽引する核となる大学になることを掲げている。また、地(知)の拠点の事業において、地方行政機関との連携強化ができており、グローバル化の牽引に向けて取り組んでいく。

7. 学生支援に関する事項

1	新入学の留学生に配布する「留学生生活ガイドブック」を発行しているか。	新入学の留学生を対象に、3～4日のガイダンスを実施しており、「留学生生活ガイドブック」を配付し、生活の注意事項の説明等を実施している。もっとも大事な市役所や銀行の手続きについては、大学内で手続きが完了できるようガイダンス内で実施している。
2	福井大学留学生250人の約60%は中国人であるが、中国人留学生148人のうち131人(88.5%)が私費留学であることなどを考慮すれば、更なる資金援助が望まれる。	大学においても交換留学生は入学金、授業共に免除であるが、交換枠外の協定校の交換留学生については入学金免除としている。 日本学生支援機構(JASSO)等の奨学金獲得の努力をしている他、本学独自の奨学金制度を用意している。 また、短期ではあるが科学技術振興機構(JST)のさくらサイエンスプラン等にも積極的に応募し、無料の留学機会の提供にも努めている。

8. 研究・教育に関する事項

1	この4年間の研究業績が無い教員もいるが、論文の本数等がある程度義務化することはできないだろうか。	19～26年度に、センターとして学内外の資金を獲得した実績は、以下の通りである。 〔学内〕
2	留学生センター教員の個人研究以外に、学内外及び国内外との共同研究の実施など、より幅広い研究体制の構築を期待する。	・平成19年度福井大学競争的配分経費（教育に関する評価経費）「初級学習者向け仮名教材の作成」（代表者：桑原陽子 金額200〔千円〕）
3	今後、研究費の確保は一層困難な状況になることが予想されるが、留学生センターとして外部資金の導入に向けた独自の取り組みが必要である。	・平成19年度福井大学学術地域交流支援金「福井大学留学生同窓会上海支部交流ミッション受入れ事業」（代表者：中島清 金額：250〔千円〕）
4	留学生センター教員の研究費として外部資金を獲得するため、留学生センターとして各種公募事業へ応募した経験はあるか？また、計画はあるか？	・平成23年度福井大学競争的配分経費（教育評価に基づく競争的経費）「入門期の日本語学習者のためのかな学習用教材“Japanese KANA workbook”対応音声教材の作製」（代表者：桑原陽子 金額：200〔千円〕）
5	研究と教育の整合性が求められているが、留学生センター教員の学部、研究科における研究成果は留学生教育にどのように活用されているか？	〔学外〕 ・平成19年度中島記念国際交流財団助成留学生地域交流事業「福井大学及び福井大学留学生同窓会上海支部と福井地区産官学民各界との相互ネットワーク整備事業」（代表者：中島清 金額：520〔千円〕）

II. 教育・研究

1. 日本語教育部所属教員の管理運営に関する事項

	改善を期待する点	改善点
1	「専任教員の突発的病気欠勤」「専任教員の突発的な病欠・休職」「長期にわたる・・・」という事態が起こったようである。そのような事態はどこでも起こりうるとはいえ、カリキュラム・シラバスや担当教員の変更、謝金の捻出、それに伴う他のコースの授業数の削減などの大きな負担をセンター全体に負わせ、同時にプログラムのレベル低下を招きかねない。健康管理などの積極的な努力と工夫が望まれる。	健康管理については、全学で年1回の一般定期健康診断、生活習慣病検診（がん検診等）、年2回の健康測定（血管年齢・ストレス測定、物忘れ相談、骨密度測定等）を実施しており、受診について周知徹底している。 その後、そのような事態は起こっていない。
2	旧福井医科大学の松岡キャンパスで行われる補講は、人事も経費もすべて医学部が管理運営している。全学の日本語教育を担う留学生センターとしては、人事とクラスの運営に関して権限を持つ必要はないだろうか。	松岡キャンパスの日本語教育については、従来どおり松岡キャンパスの中で管理・運営がなされている状況である。 今後は国際交流センターの責任ある体制の下で、松岡や敦賀のキャンパスも含めた全学の日本語教育について、人事と運営を行うように改めたい。

3	<p>センター教員はセンター省令化以前の学部専門科目等の科目を担当し、貢献している。しかし、センター教員の本務はセンターの授業であるので、全学への貢献は、あまり大きな負担とまらない程度が望ましい。(大学院・学部・共通教育が過重負担とならないよう、留学生教育とのバランスに一層配慮して欲しい。)</p>	<p>平成28年度から教育組織と教員組織の分離による新体制がスタートする。その中でセンターのミッションも議論されている。その中で、センター教員の本務は、日本語教育部は留学生に対する日本語・日本文化の教育と研究、グローバル人材部は留学生の生活指導、就職支援、地域交流、日本人学生の海外留学支援などであることが再確認された。</p>
---	--	--

2. 日本語研修コース

1	<p>自己点検・評価報告書にも年報にも、受講生の修了成績とその評価基準が示されていないのでコースの成果が外部の者にはわかりにくい。</p>	<p>修了生の修了成績の基準は、次のように決められている。日本語(文型文法)、日本語(作文)、日本語(漢字)、日本語(文化)、日本語(情報処理)の各授業担当者が、それぞれ100点満点で評価する。修了成績は、開講コマ数に応じて、次のように算出する。[日本語(文型文法)] × 0.5 + [他の4科目] × 0.125 + [修了発表実施] 10</p>
2	<p>本コースに一般の私費留学生の受講を認めていないのはなぜか。</p>	<p>日本語研修コースは、「日本語(文型・文法)」の授業を1日2コマ(1週間に計10コマ)開講している。そのうちの5コマ(毎日1限目)は全学日本語コースの日本語Iとの合同授業であり、私費留学生と協同で学習を行っている。一方、日本語研修コースは、コース修了時に日本語によるプレゼンテーションを行うことになっている。プレゼンテーションのための語彙・表現の拡充やレポート作成、発表用PPT作成など、修了発表準備に特化した学習が必要であるため、全学向け日本語コースとの合同授業以外は、私費留学生の受講は認めていない。</p>

3. 短期留学プログラム

1	<p>受講者が1～2名である「はじめての作文」のようなクラスに関しても、全学向け日本語コースや日本語研修コースと合同で行うという工夫があってもよいと思われる。</p>	<p>日本語研修コースは、秋学期(後期)のみの開講であり、「はじめての作文」等の技能クラスは春学期(前期)開講であるため、日本語研修コースとの合同は不可能である。全学向け日本語コースではこれまで技能別クラスを設けてこなかったが、現在その開講と合同クラスでの運営を併せて検討中である。</p>
---	---	---

2	日本語修得の遅れが著しい学習者に対して、平成15年度に謝金講師が無報酬で週1回90分の補講を10回行ったことは、教師側の教育に対する熱心さを表しているとはいえ、無報酬による奉仕に支えられる体制は、改善すべきだと思われる。	平成19年度以降はそのような事態は報告されていない。
---	--	----------------------------

4. 日韓共同理工系学部留学生プログラム

1	このプログラムによる留学生受入れを実現するための留学生センターとしての積極的な働きかけが必要である。	同プログラムは、学生の希望に応じて受入大学が決定されているため、開始当初から有名大学に希望と受入が集中しており、本学を希望してもらうための働きかけは難しい状況が続いている。
---	--	--

5. 全学向け日本語コース

1	全学の大学院生等の日本語能力を養成するには、わずか4段階のレベル編成では無理があり、1つの段階の留学生の日本語能力に大きな差があると推察される。経費の問題が大きいと思われるが、何らかの工夫が欲しい。	日本語Ⅰ～Ⅲは留学生のニーズも高く、それなりの受講者が確保されているが、日本語Ⅳは改善が必要であると認識している。現在、日本語Ⅳレベルを技能別クラスとして開講することを検討中である。また、平成22年度より新たに日本語能力試験対策講座（N1・N2）を開講し、留学生のニーズに応えるべく改善に取り組んでいる。
2	日本語関係の授業が他の必修科目と重なって履修できない場合がある。そのような時は例えば5限に開講することなどの工夫が必要ではないか。	本コース受講者の大半は工学研究科の大学院生である。彼らの授業・実験・研究は午後から夜間にかけて行われることが多い。日本語科目は彼らの実情に配慮して、初級レベルを午前中に、中級以上を昼間に開講することで、留学生のニーズに応えている。

6. 英語教育

1	英語力の低い留学生のための英語の授業が行なわれたが、残念ながら継続手ではない。	平成23年度に語学センターが設置され、本学の英語教育の充実が表れている。
2	留学生センターが留学生の英語能力向上への支援をすることは理解できるが、留学生センター教員の配置状況から困難な面が多いことが推測される。全学的な協力体制の下で実施する方策について留学生センターを中心に検討してほしい。	

7. 共通教育・大学院・学部科目

1	「工業日本語」のニーズも高いようであるが、40名を越す授業では効果が望めない。小規模クラスに分割したり、TAを補助教員として使うような仕組みを工夫してはどうか。	受講者数は、平成22年度以降40名を下回り、25年度以降は30名を下回って推移しており、状況は改善されている。
---	--	---

8. 研究・教育に関する事項

1	この4年間の研究業績が無い教員もいるが、論文の本数等がある程度義務化することはできないだろうか。	日本語教育部の教員はそのミッションとして留学生に対する日本語・日本文化に関する教育・研究が掲げられており、それに従って研究論文を発表することは当然であるが、各教員の専門分野の特性もあり、定量的な義務化は設定していない。また、グローバル人材部の教員は実務家教員であり、そのミッションとして研究論文を発表することの優先度は高くないが、留学生の就職や地域交流、日本人学生の海外留学などについて提案し、情報を発信していくことは必要であろう。
2	留学生センター教員の個人研究以外に、学内外及び国内外との共同研究の実施など、より幅広い研究体制の構築を期待する。	桑原教員は、国立国語研究所の研究者として「日本語非母語話者の読解コーパス」構築研究を行っている。また、他大学の研究者との共同研究により以下の科研費を獲得している。 <ul style="list-style-type: none"> ・「実践的な読解教育実現のための日本語学習者の読解困難点・読解技術の実証的研究」（基盤B 平成23年～26年、研究分担者） ・「コミュニケーションのための日本語ウェブ教材の作成と試用」（基盤A 平成24年～25年、研究分担者）。また、膽吹教員は平成21年に本学教育地域科学部教員並びに同附属学校教員等と共同で「ふくい文化研究会」を発足させ、地域教材として『越前若狭いろはかるた』を開発・製作した。その後、26年度まで継続して『越前若狭いろはかるた』を教材とした留学生を対象とした福井学（共通教育科目「日本事情」）を实践し、その授業実践報告として「日本事情におけるアクティブ・ラーニング『越前若狭いろはかるた』を使用した授業の紹介」（25年）を発表した。

3	<p>今後、研究費の確保は一層困難な状況になることが予想されるが、留学生センターとして外部資金の導入に向けた独自の取り組みが必要である。</p>	<p>19～26年度に、センターとして学内学外の資金を獲得した実績は、以下の通りである。今後も外部資金の導入に向けて、一層の努力を続けるつもりである。なお、個人が獲得した科研費などの外部資金については、巻末資料Ⅲに教員ごとに記載したので、そちらをご覧ください。</p>
4	<p>留学生センター教員の研究費として外部資金を獲得するため、留学生センターとして各種公募事業へ応募した経験はあるか？また、計画はあるか？</p>	<p>〔学内〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成19年度福井大学競争的配分経費（教育に関する評価経費）「初級学習者向け仮名教材の作成」（代表者：桑原陽子 金額200〔千円〕） ・平成19年度福井大学学術地域交流支援金「福井大学留学生同窓会上海支部交流ミッション受入れ事業」（代表者：中島清 金額：250〔千円〕） ・平成23年度福井大学競争的配分経費（教育評価に基づく競争的経費）「入門期の日本語学習者のためのかな学習用教材“Japanese KANA workbook”対応音声教材の作製」（代表者：桑原陽子 金額：200〔千円〕） <p>〔学外〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成19年度中島記念国際交流財団助成留学生地域交流事業「福井大学及び福井大学留学生同窓会上海支部と福井地区産官学民各界との相互ネットワーク整備事業」（代表者：中島清 金額：520〔千円〕）

5	<p>研究と教育の整合性が求められているが、留学生センター教員の学部、研究科における研究成果は留学生教育にどのように活用されているか？</p>	<p>桑原教員の専門領域は日本語教育であり、その研究成果は本学の留学生教育に活用されている。研究と教育の連携の具体例は、以下のとおりである。(1) 非漢字系日本語学習者による漢字熟語の意味推測研究の成果をもとに、短期留学プログラム「はじめての漢字」シラバス作成。(2) 読解研究からの知見は、共通教育科目上級日本語における読解指導で活用。(3) コミュニケーションのための日本語教育研究からの知見は、特に教員研修留学生向けの作文指導のシラバス構築で活用。また膽吹教員は学部共通教育科目「日本事情」では本学教育地域科学部教員並びに同附属学校教員等と共同で地域教材として『越前若狭いろはかるた』を開発・製作した。その後、26年度まで継続して『越前若狭いろはかるた』を教材とした留学生を対象とした福井学（共通教育科目「日本事情」）を実践し、その授業実践報告として「日本事情におけるアクティブ・ラーニング『越前若狭いろはかるた』を使用した授業の紹介」（25年）を発表した。また、本書巻末の教員個人データに掲載した通り、膽吹は日本近世文学に関する研究論文（『玉勝間』を中心に）を複数発表し、その成果を活かして大学院科目「国文学特論Ⅰ」「国文学特別研究Ⅰ」（留学生も受講）で、近世の随筆『玉勝間』の講読を行なっている。</p>
---	---	---

9. 研究

1	<p>総体として、日本語教育に関する論文が少ないと思われる。</p>	<p>非常勤講師の先生方との共著による教材開発報告や授業の実践報告の紀要論文発表を行っているが、まだ本数が少ないことは事実であり、今後も努力したい。</p>
2	<p>外部の査読付き学術論文に採用される論文数が増えることが望ましい。</p>	<p>研究分野を問わず、査読付き学術論文に採用されることが望ましいことは論を俟たない。この問題は、教員各自がその専門分野において、今後も努力し続けるしかない。</p>
3	<p>各自の専門分野の研究の他に、留学生センターとして共同で取り組む、日本語教育に関する研究があればよいのではないか。留学生センターとして外部資金の導入に向けた独自の取り組みが必要である。</p>	<p>各コースの指導内容に結び付くような学習者の言語使用に関する調査の実施や、福井方言もまじえた本学独自の日本語教科書の開発等々、センターとして共同で取り組むべき課題について、外部資金導入により実現を表っていきたい。</p>

4	福井大学留学生センターとして特徴ある日本語教材の開発を期待したい。例えば、専門別テキストなど。	以下の2つの教材を開発し、学習者に無料で提供している。 ・初級学習者向け仮名教材“Japanese KANA workbook”を（平成19年度福井大学競争的配分経費） ・“Japanese KANA workbook”音声教材（平成23年度福井大学競争的配分経費）
5	事前学習としての「ひらがな」導入について、今後は是非、データを取り、研究につなげて欲しい。	現在、学習者の多様化によって、ひらがな習得に時間がかかる学習者が増えており、それらの学習者に対する会話中心クラスの開講を検討中である。「ひらがな」の事前学習導入の効果に関する研究も重要だと考えているが、文字にできるだけ頼らない初級クラスの開講と、その後の学習の継続のための文字学習のあり方が現在の研究課題である。

Ⅲ. 学生支援

	改善を期待する点	改善点
1	施設面に関して、留学生センターが部門別に別棟になっているのは、早急に改善していただきたいと願う。留学生の問題は、通常、日本語学習、専門、生活問題等、さまざまなことが重複している場合が多いため、日常的に教職員間でコミュニケーションが重要になってくる。コミュニケーションが不足すると危機管理にも重要な問題が生じる。	平成27年3月30日現在、国際センター教員について施設面の問題は解決されていない。したがって、月1回の専任会議や、日常のコミュニケーションを通して、学生が抱える各種問題の解決、および危機管理を行っている。
2	留学生の相談業務は、指導・相談部門教員を中心に実施されているが、他の留学生センター教員の関わりが不明瞭である。	指導・相談部門教員以外の国際交流センター（留学生センター）教員も、内容によっては、学生から生活上の問題点や悩みなどの相談を直接受け、それに対応している。また、教員間で連携を取りながら、指導・相談部門教員以外の国際交流センター（留学生センター）教員は、主に以下のような相談に対応している。 ①日本語・日本文化関連分野、あるいはその他学術分野における教育・研究上の相談 ②進路相談（進学・就職） ③教員が持つ経験、ネットワーク、専門領域のために、指導・相談教員から依頼を受けた学生相談への対応、など。

<p>3</p>	<p>日本人学生の派遣は、「ポスト10万人計画」に位置づけられている我が国の重要な留学生施策であるが、受入留学生の支援に比べて、日本人学生の派遣には、福井大学の明確な戦略性、独自性が見られない。全学的な観点から人的、経済的支援の強化が必要である。</p>	<p>平成24年度に福井大学は、グローバル人材育成推進事業（「スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に名称変更、以下GGJと表記）に採択された。『Global Imagineer（その地域にあったモノを作り出す創造力あるエンジニア。文化違いを超えて互いにモノ作りを行うことのできる人材』の育成を目的とし、英語教育と海外短期研修プログラムを一つの柱として、語学、コミュニケーション、異文化理解のそれぞれの能力を身に付けさせること、向上させることを狙いとした。さらに、海外短期研修プログラムへの参加が、中長期の留学プログラムへの参加増へと繋げるという戦略も描いている。</p> <p>海外短期研修について、プログラム数も参加者人数も毎年増加している。平成24年度は11本のプログラムを実施、128名が参加した。平成25年度は37本のプログラムを実施、205名が参加、平成26年度は、43本のプログラムを実施、230名の学生が参加した。わずか2年の間で、海外短期研修プログラム参加者数は、80%の伸びとなっている。</p> <p>奨学金支給について、平成26年度は、海外短期研修プログラム参加者のうち、47%が「日本学生支援機構海外留学支援制度（短期派遣）」奨学金を受給、43%が本学独自の奨学金である「福井大学学生海外派遣支援金」を受給、さらに1%がその他の奨学金（若狭湾エネルギー研究センターによる奨学金、医学部奨励金）を受給するなど、合計で91%の参加者がいずれかの奨学金を受給されている。参加者の内、残りの9%はいずれの奨学金受給条件も満たさないこと、または受給希望がないことから奨学金の利用に至らなかった。</p> <p>参加者数に占める学部・学科別参加者の割合が、本学在籍者数に占める学部・学科別参加者の割合とほぼ一致していることから、海外研修プログラムは既に全学的な取組になっているものと考えられる。</p>
----------	---	--

4	<p>留学生と日本人学生の交流推進のためには、日本人学生から主体的に関わることが重要である。留学生センターの支援の下で、日本人学生独自の国際交流組織を強化し、その活動を活性化させる必要がある。</p>	<p>平成26年度から、留学生サポーター（スチューデント・アシスタント制度）を新設、オリエンテーションや必要時の、外国人留学生のサポートを提供できるシステムをスタートさせた。さらに、国際交流センターでは、グローバル・ハブを運営する学生、および（上記の）留学生サポーターに声をかけ、短期研修プログラム（約2週間程）で本学に留学してくる学生と本学学生の交流を目的として、共同でイベントの企画と実施を行っている。</p> <p>*グローバル・ハブ：語学センターが管理するグローバル・ハブでは、国際交流のさまざまなイベントが留学生、日本人学生によって企画、実施されている。</p>
5	<p>留学生支援の充実を表るには、地域の国際交流組織との連携強化も必要であるが、この点に関する留学生センター独自の取組を積極的に展開、強化する必要がある。</p>	<p>平成26年度から、学期開始時の留学生のためのオリエンテーションにおいて、以下の団体を本学に招聘し、留学生支援に多大なご協力をいただいている。</p> <p>福井市役所住民課：外国人登録 福井銀行：銀行口座開設 携帯電話会社：携帯電話加入申し込 福井県警察署：事故・犯罪防止と安全管理） についてのプレゼンテーション</p> <p>福井県国際交流会館：ホームビジットプログラム等、各種国際交流イベントの案内</p> <p>さらに、平成26年度には名古屋入国管理局福井出張所の所長を招待し、入国管理法とその運営について教職員へのレクチャー、質疑応答の機会を設けた。</p>

6	<p>日本人学生の海外留学支援相談 (p.57) は、担当者の健康上の事情もあって、相談件数が極端に少なく、実際に交換留学生として送り出す学生も数名にすぎない (p.58) と書かれている。福井大学の理念「・・国際社会に貢献し得る人材の育成」を実現するためには、何らかの工夫が必要であろう。</p>	<p>平成24年度に採択されたグローバル人材育成推進事業（「スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に名称変更、以下GGJと表記）により、2名の留学コーディネーターを採用、国際交流センター教員と協力して、短期海外研修プログラム、交換留学、「トビタテ」、「カケハシ」等について、説明会、オリエンテーション、帰国報告会を行っている。その成果として、学生からの各種留学相談が相当数の伸びを見せ、留学参加者も平成24年からわずか2年で80%の伸びとなった。</p> <p>また、効率良い相談が可能となるよう、留学説明会の他に、ウェブサイト、メールリスト作成とメール、留学ラウンジの解説と閲覧資料の充実等、充実した情報とその提供を行っている。</p>
7	<p>海外留学を希望する一般学生に対する積極的な働きかけ、また、留学生と日本人学生との交流活動がより活発化することを期待する。</p>	<p>新入生オリエンテーション時の留学オリエンテーション、海外短期研修プログラム説明会、交換留学説明会、ウェブサイト、メールリスト、グローバル・ハブ、留学生サポーター制度、留学ラウンジ、留学相談、国際交流イベント各種を通じて、留学への動機づけ、国際交流の活発化を推進している。</p> <p>さらに、平成26年度には、『University Lecture Series』と題して、前期30回、講義20回にわたって、語学センター教員を中心とした60分回の英語による講義を実施した。講義は60分間、人文・社会学の分野から教員が自由にテーマを選ぶというもので、受講生のほとんどが留学を希望している学生であった。講義終了と同時に、前後期それぞれ1回ずつ、TOEFL ITPを実施した。570以上が2名、550以上が2名、平均で530を上回るなど期待以上の成果を収めることが出来た。</p>
8	<p>福井大学留学生250人の約60%は中国人であるが、中国人留学生148人のうち、131人（約88.5%）が私費留学生であることなどを考慮すれば、さらなる資金援助が望まれる。</p>	<p>学生支援機構などの公的機関、および民間団体からの各種奨学金情報の周知を徹底し、申請準備を十分に行うことで、奨学金の受給を拡大していきたい。</p>

IV. 社会貢献

	改善を期待する点	改善点
1	<p>福井大学留学生センターの地域交流活動がより活発に推進されるように、チラシやポスター等で県内の学校や企業等に啓発する必要があると考える。</p> <p>例えば、現段階で学校現場が入手できる情報は、県の国際交流協会を通して得られる出張講座講師としての派遣の情報のみであり、一層柔軟で自由な活用を促す情報の提供が望まれる。</p> <p>ホームページを開かなくても、地域交流活動について自然と人々の目に入るような情報があれば、より多くの人に周知することができ、交流活動が活性化するとともに、留学生にとっても地域の国際化に貢献できる場が増えることに繋がると思われる。</p>	<p>本学は教育が本分の教育機関であり、センターも地域交流活動を本業としているわけではないので、積極的な広報・啓発活動にも限界がある。</p> <p>他方、現在では、県の国際交流協会だけでなく、ふくい市民国際交流協会が公民館や児童館と連携して更に活発に地域交流活動を展開しており、坂井市や丸岡町、永平寺町の地域交流活動にも留学生を派遣するなど、各地域の国際化支援への協力は進展しており、留学生の地域貢献の場は広がっている。</p>
2	<p>多くの大学が直面している課題でもあるが、福井県の中核大学として「留学生交流推進協議会」の活用により県、市や商工会議所などとの一層の連携強化を表って欲しい。これはさらに県内の他大学との連携事業の活性化にも繋がることも期待できる。また、県外の大学との共同事業の実施も福井大学のみならず、地域社会の国際化推進にも貢献するものである。</p>	<p>外国人旅行者受入環境改善に関する調査への協力や、国際交流協会の活動への協力など、県との連携、並びに、ふくい市民国際交流協会を通じた市との連携に比べ、商工会議所との連携が薄くなっている感があるので、強化に努めたい。</p> <p>県内他大学との連携については、留学生向け就職支援プログラムの共同開催が検討されているところである。</p> <p>県外の大学との共同事業についても、今後検討していきたい。</p>
3	<p>国際交流活動への地域社会の期待に応えるためにも留学生センターの社会貢献事業を一層充実させることが必要である。特に、地域社会との連携事業のみではなく、留学生センター独自の社会貢献事業の実施を期待する。</p>	<p>これまでのところ、国際交流センターが独自に社会貢献事業を実施するまでには至っていない。</p>
4	<p>留学生センターの社会貢献を一層活性化するためにも他の部署との連携や留学生や日本人学生も巻き込んだ活動が必要である。</p>	<p>他の部署や日本人学生も関係する活動は、これまで県国際交流協会、ふくい市民国際交流協会により実施されてきている。</p>
5	<p>個別的な活動を留学生センターの活動として位置づける方向が望ましい。</p>	<p>何をもって個別的な活動というのか分からないが、独自の活動ということなら、上記3に同じ。</p>

6	<p>特に地域ボランティア団体との関係など、教員個人のつながりが続くと教員個人の負担が増すのみならず、個人で対応できない時にはそこで関係が希薄になりがちである。留学生センターとして対応できる仕組みも考えていく必要があるのではないか。</p>	<p>この点については、平成26年度の相談・交流担当教員の交代により関係が希薄になっている団体等があると思われ、まだまだ改善の余地が残されているものと思料する。</p>
---	--	--

資料 2

1. 福井大学の外国人留学生集計表	123
2. 福井大学の入学年度別・国別外国人留学生数一覧	124
3. 学術交流協定締結状況一覧	125
4. 主な行事（平成22年度～26年度）	126
5. 福井大学国際交流センター規程	131
6. 福井大学短期留学プログラム規程	133
7. 福井大学国際交流センター紀要投稿規定	136
8. 国際交流センター専任教員会議 議事録（平成26年度） ...	137
9. 福井大学留学生同窓会登録用紙 兼 「こころねっと」向けメッセージ及び住所変更届け用紙.....	139

1. 福井大学の外国人留学生集計表

[外国人留学生数]

平成27年5月1日現在

		学部学生			大学院生				研究生(特別研究学生を含む)			特別聴講学生 (科目等履修生を含む)		合計	
		教育地域科学部	医学部	工学部	教育学研究科	医学系研究科	工学研究科		教育学研究科・ 教育地域科学部	医学系研究科・ 医学部	工学研究科・ 工学部	教育学研究科・ 教育地域科学部	工学研究科・ 工学部		
					修士課程	博士課程	博士前期課程	博士後期課程							
ハンガリー	国					2 (1)	1 (0)	1 (0)						4 (1)	6 (1)
	私						1 (0)	1 (0)						2 (0)	
マレーシア	国						1 (1)							1 (1)	31 (9)
	政		28 (8)					1 (0)						29 (8)	
	私							1 (0)						1 (0)	
インドネシア	国		1 (1)							1 (1)				2 (2)	5 (5)
	私											2 (2)	1 (1)	3 (3)	
フィリピン	国				1 (1)					1 (1)				2 (2)	2 (2)
	私													0 (0)	
大韓民国	国													0 (0)	3 (1)
	私	1 (0)						1 (1)						1 (0)	
モンゴル	国													0 (0)	1 (1)
	私							1 (1)						1 (1)	
ベトナム	国													0 (0)	5 (1)
	私		3 (0)			1 (0)	1 (1)							5 (1)	
中国	国						1 (1)							2 (1)	102 (49)
	私	1 (0)	9 (1)	7 (6)			31 (9)	7 (2)			3 (2)	24 (21)	18 (7)	100 (48)	
台湾	国													0 (0)	1 (1)
	私											1 (1)		1 (1)	
オーストラリア	国											1 (0)		1 (0)	1 (0)
	私													0 (0)	
ニュージーランド	国											1 (0)		1 (0)	1 (0)
	私													0 (0)	
ウズベキスタン	国		1 (0)							1 (0)				2 (0)	2 (0)
	私													0 (0)	
ドイツ	国													0 (0)	3 (0)
	私									1 (0)		2 (0)		3 (0)	
フランス	国							1 (1)						1 (1)	1 (1)
	私													0 (0)	
クロアチア	国											1 (0)		1 (0)	1 (0)
	私													0 (0)	
エジプト	国									1 (0)				1 (0)	2 (1)
	政							1 (1)						1 (1)	
	私													0 (0)	
カンボジア	国		1 (0)											1 (0)	1 (0)
	私													0 (0)	
タンザニア	国							1 (0)						0 (0)	1 (0)
	ABE													1 (0)	
	私													0 (0)	
ケニア	国													0 (0)	1 (0)
	ABE							1 (0)						1 (0)	
	私													0 (0)	
チリ	国									1 (0)				1 (0)	1 (0)
	私													0 (0)	
イラク	国									1 (0)				1 (0)	1 (0)
	私													0 (0)	
パプアニューギニア	国							1 (0)						1 (0)	1 (0)
	私													0 (0)	
合計	国	0 (0)	0 (0)	3 (1)	1 (1)	4 (3)	2 (0)	5 (2)	4 (1)	0 (0)	0 (0)	3 (0)	0 (0)	22 (8)	173 (72)
	政	0 (0)	0 (0)	28 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	30 (9)	
	ABE						2 (0)							2 (0)	
	私	2 (0)	0 (0)	12 (1)	7 (6)	1 (0)	35 (11)	9 (3)	0 (0)	0 (0)	4 (2)	29 (24)	20 (8)	119 (55)	
22か国		2 (0)	0 (0)	43 (10)	8 (7)	5 (3)	39 (11)	16 (6)	4 (1)	0 (0)	4 (2)	32 (24)	20 (8)	173 (72)	
		45 (10)			68 (27)				8 (3)			52 (32)			

()は女子数で内数

3. 学術交流協定締結状況一覧

平成27年4月1日

国別状況（大学間交流協定 28、部局間交流協定 42） ※部局間協定は1大学を1機関と数える。

ロシア5、ドイツ3、フランス2、ブルガリア1、ポーランド1、ラトビア1、ウガンダ共和国1、アメリカ合衆国4、カナダ1、中国21、韓国7、モンゴル1、台湾4、インド1、インドネシア3、タイ5、ハンガリー1、アラブ首長国連邦1、フィリピン2、ベトナム2、マレーシア1、ペルー1、オーストラリア1

計 69機関

1. 大学間交流協定

機関名	国名	締結年月日	学生交流
ラトガーズ大学	アメリカ合衆国	昭和56年10月7日	
西安外国語大学	中国	平成23年12月6日 (昭和60年9月9日)	学生の交流の覚書有
西安理工大学	中国	昭和60年9月21日	学生の交流の覚書有
浙江大	中国	平成3年9月25日	学生の交流の覚書有
ロシア科学アカデミー応用物理学研究所	ロシア	平成11年8月1日	
北京信息科技大学	中国	平成25年12月17日 (平成12年8月25日)	学生の交流の覚書有
浙江理工大学	中国	平成12年12月11日	学生の交流の覚書有
南昌航空大	中国	平成13年5月15日	学生の交流の覚書有
國立雲林科技大學	台湾	平成14年4月25日	学生の交流の覚書有
江南大	中国	平成14年8月26日	学生の交流の覚書有
インドネシア大学	インドネシア	平成25年3月28日 (平成14年9月30日)	学生の交流の覚書有
リヨン繊維・化学技術院	フランス	平成14年10月23日	学生の交流の覚書有
蘇州大	中国	平成14年11月27日	学生の交流の覚書有
クレムソン大	アメリカ合衆国	平成21年3月27日 (平成15年2月11日)	学生の交流の覚書有
メーン大	フランス	平成15年5月28日	学生の交流の覚書有
東華大	中国	平成16年5月25日	学生の交流の覚書有
イティハッド大	アラブ首長国連邦	平成16年9月4日 (平成14年11月10日)	学生の交流の覚書有
瀋陽師範大	中国	平成17年7月19日	学生の交流の覚書有
ジャクアラ大	インドネシア	平成17年8月8日	学生の交流の覚書有
天津科技大	中国	平成17年12月20日	学生の交流の覚書有
フィンドレー大	アメリカ合衆国	平成22年5月30日 (平成18年5月31日)	学生の交流の覚書有
武漢科技大	中国	平成24年9月3日 (平成14年6月17日)	学生の交流の覚書有
上海理工大	中国	平成17年1月31日	学生の交流の覚書有
ベトナム教育訓練省国際教育開発局	ベトナム	平成26年2月20日	
電力大	ベトナム	平成26年5月28日	
スーパトナム大	タイ	平成26年9月10日	
マラヤ大	マレーシア	平成26年11月10日	学生の交流の覚書有
UMAP (アジア太平洋大学交流機構)		平成27年3月31日	

2. 部局間交流協定

部局名	機関名	国名	締結年月日	学生交流
教育地域科学部	ハンブルク大学人文科学部アジア・アフリカ研究所	ドイツ	平成12年4月1日 (平成7年4月1日)	学生の交流の覚書有
遠赤外線開発研究センター	シドニー大学 School of Physics	オーストラリア	平成11年6月1日	
最先端エネルギー医学研究センター	ワシントン大学医学部マリンロット放射線医学研究所	アメリカ合衆国	平成21年6月1日 (平成11年6月29日)	
工学部	延世大工科大学	韓国	平成12年3月1日	学生の交流の覚書有
工学部	東亜大工学科大学	韓国	平成12年5月2日	学生の交流の覚書有
工学部	クルナ科学技術大	ハンガリー	平成12年7月1日	学生の交流の覚書有
工学部	キングモンクトン工科大学	タイ	平成12年8月1日	学生の交流の覚書有
遠赤外線開発研究センター	D.YEfremov電気物理研究所精密理工学センター	ロシア	平成12年12月1日	
工学部	天津工業大	中国	平成12年12月13日	学生の交流の覚書有
工学部	ウルシャウ工科大学化学プロセス工学部	ポーランド	平成22年12月8日 (平成13年3月1日)	学生の交流の覚書有
遠赤外線開発研究センター	カールスルーエ研究センターハルス出力・マイクロ波研究	ドイツ	平成13年3月5日	
工学部	釜慶大工学科大学	韓国	平成13年3月24日	学生の交流の覚書有
工学部	内蒙古工業大	中国	平成13年3月26日	学生の交流の覚書有
工学部	嶺南大工学科大学	韓国	平成13年6月25日	学生の交流の覚書有
工学部	モンゴル科学技術大	モンゴル	平成13年8月3日	学生の交流の覚書有
遠赤外線開発研究センター	中国電子科技大学プラズマ研究所	中国	平成13年12月1日	
遠赤外線開発研究センター	ブルガリア科学アカデミー電子工学研究所	ブルガリア	平成14年3月1日	
遠赤外線開発研究センター	シュトゥットガルト大プラズマ研究所	ドイツ	平成14年3月1日	
教育地域科学部	釜山大学校師範大	韓国	平成14年11月11日	学生の交流の覚書有
工学部	東南大動力工程系	中国	平成14年12月27日	学生の交流の覚書有
工学部	ロシア科学アカデミーシベリア地区物理学研究所	ロシア	平成17年1月17日	学生の交流の覚書有
医学部(大学部一部局間)	オタワ大学医学部	カナダ	平成22年4月30日 (平成12年3月18日)	学生の交流の覚書有
教育地域科学部	上海師範大	中国	平成17年7月12日	学生の交流の覚書有
医学部	マケレレ大学医学部	ウガンダ共和国	平成18年4月4日	学生の交流の覚書有
工学研究科	蘭州交通大学機電工程学院	中国	平成25年3月31日 (平成19年12月13日)	学生の交流の覚書有
工学研究科	國立臺灣科技大學工程學院	台湾	平成24年2月1日 (平成20年2月1日)	学生の交流の覚書有
工学研究科	成均館大工学科大学	韓国	平成25年8月19日 (平成20年8月19日)	学生の交流の覚書有
遠赤外線開発研究センター	ハルオレオ大数値・自然科学部	インドネシア	平成21年10月1日	
工学研究科	國立清華大工學院	台湾	平成22年1月7日	学生の交流の覚書有
遠赤外線開発研究センター	ソウル国立大テラヘルツバイオ応用システムセンター	韓国	平成23年3月18日	
遠赤外線開発研究センター	フィリピン大物理学研究所	フィリピン	平成23年4月11日	
医学部	インド国立薬業医学研究所・タイ王国中央胸部疾患研究所	インド・タイ	平成23年9月6日	
附属国際協力研究所	西安交通大学核科学与技术学院	中国	平成24年7月25日	
工学研究科	ラジャマングラ工科大学イサン校工学・建築学部	タイ	平成24年8月17日	学生の交流の覚書有
産学官連携本部	タマサート大東アジア研究所	タイ	平成24年10月26日	
医学部、医学部附属病院	紹興市人民病院	中国	平成24年11月18日	
遠赤外線開発研究センター	ラトビア大固体物理研究所	ラトビア	平成24年11月26日	
工学研究科	蘭州交通大学電子与信息工程学院・自動化与電気工程学院	中国	平成25年3月31日	学生の交流の覚書有
医学部	ロシア科学アカデミーシベリア支部イルクーツク州立歯学・移植外科研究センター	ロシア	平成25年8月29日	学生の交流の覚書有
産学官連携本部	サンマルコス大地質・鉱業・冶金・地理工学部	ペルー	平成26年2月28日	
遠赤外線開発研究センター	テ・ラ・サール大工学部	フィリピン	平成26年3月31日	
工学研究科	ロシア科学アカデミーカザン科学センター	ロシア	平成27年2月27日	
遠赤外線開発研究センター	國立清華大光電研究センター	台湾	平成27年3月12日	

4. 主な行事（平成22年度～26年度）

平成22年度

4月

- 短期留学プログラム授業開始（4月5日）
- 日本語能力試験対策クラス授業開始（4月12日）
- 海外留学説明会及びKSS説明会（4月13日）
- 留学生オリエンテーション（4月16日）
- 全学補講日本語コース授業開始（4月19日）

5月

- 福井大学祭文京キャンパス（5月29日～5月30日）

7月

- 日本語能力試験対策クラス授業終了（7月3日）
- 平成22年度外国人留学生進学説明会（7月22日）
- 授業終了（7月27日）

9月

- 日本語能力試験対策クラス授業開始（9月15日）

10月

- 短期留学プログラム授業開始（10月1日）
- 日本語研修コース開講式（10月8日）
- 留学生オリエンテーション（10月15日）
- 日本語研修コース授業開始（10月18日）
- 全学補講日本語コース授業開始（10月18日）
- 福井大学祭松岡キャンパス（10月23日～10月24日）

11月

- 福井大学留学生同窓会杭州支部大会（11月5日）上海支部大会（11月6日）
- 福井県留学生交流推進協議会総会・運営委員会（11月17日）

12月

- 日本語能力試験対策クラス授業終了（12月1日）
- 海外留学相談会（12月6日～9日）
- 海外留学説明会（12月10日）

2月

- 授業終了（2月3日）
- 平成22年度春季留学生見学旅行：（於）京都（2月18日）
- 日本語研修コース修了発表会と修了式（2月23日）

3月

- 留学生と教職員との交歓会（3月4日）

平成23年度

4月

- 短期留学プログラム授業開始（4月7日）
- 日本語能力試験対策クラス授業開始（4月12日）
- 留学生オリエンテーション（4月15日）
- 全学補講日本語コース授業開始（4月18日）
- 留学カフェ（4月26日）

5月

- 福井大学祭文京キャンパス（5月27日～5月29日）

6月

- 日本語能力試験対策クラス授業終了（6月29日）

7月

- 平成23年度外国人留学生進学説明会（7月20日）
- 授業終了（7月29日）

9月

- 日本語能力試験対策クラス授業開始（9月13日）
- 福井大学留学生就職支援プログラム 全15回（9月9日～1月6日）

10月

- 短期留学プログラム授業開始（10月11日）
- 日本語研修コース開講式（10月12日）
- 留学生オリエンテーション（10月14日）
- 日本語研修コース授業開始（10月19日）
- 全学補講日本語コース授業開始（10月17日）

11月

- 福井大学留学生同窓会上海支部大会（11月5日）
- 留学カフェ（11月25日）
- 日本語能力試験対策クラス授業終了（11月29日）

12月

- 福井大学留学生同窓会ミャンマー支部設立大会（12月17日）

2月

- 授業終了（2月3日）
- 平成23年度春季留学生見学旅行：（於）京都（2月17日）
- 日本語研修コース修了発表会と修了式（2月13日）

3月

- 留学生と教職員との交歓会（3月6日）

平成24年度

4月

- 短期留学プログラム授業開始（4月9日）
- 日本語能力試験対策クラス授業開始（4月9日）
- 留学生オリエンテーション（4月13日）
- 全学補講日本語コース授業開始（4月16日）

5月

- 福井大学祭文京キャンパス（5月25日～5月27日）

6月

- 日本語能力試験対策クラス授業終了（6月29日）

7月

- 平成24年度外国人留学生進学説明会（7月19日）
- 授業終了（7月30日）

9月

- 日本語能力試験対策クラス授業開始（9月12日）
- 福井大学留学生就職支援プログラム 全20回（9月7日～3月1日）

10月

- 短期留学プログラム授業開始（10月9日）
- 日本語研修コース開講式（10月11日）
- 留学生オリエンテーション（10月12日）
- 日本語研修コース授業開始（10月15日）
- 全学補講日本語コース授業開始（10月15日）

11月

- 日本語能力試験対策クラス授業終了（11月30日）

12月

- 平成24年度留学生見学旅行：（於）京都（12月8日）

1月

- 留学生と教職員との交歓会（1月24日）
- 授業終了（1月31日）

2月

- 日本語研修コース修了発表会と修了式（2月21日）

平成25年度

4月

- 短期留学プログラム授業開始（4月8日）
- 日本語能力試験対策クラス授業開始（4月8日）
- 留学生オリエンテーション（4月12日）
- 全学補講日本語コース授業開始（4月15日）

5月

- 福井大学祭文京キャンパス（5月31日～6月2日）

6月

- 日本語能力試験対策クラス授業終了（6月29日）

7月

- 平成24年度外国人留学生進学説明会（7月21日）
- 福井大学サマープログラム（7月15日～7月28日）
- 授業終了（7月30日）

9月

- 福井大学留学生同窓会世界大会（9月8日）
- グローバル人材育成シンポジウム（9月9日）
- 日本語能力試験対策クラス授業開始（9月10日）
- 福井大学留学生就職支援プログラム 全20回（9月27日～3月14日）

10月

- 短期留学プログラム授業開始（10月7日）
- 日本語研修コース開講式（10月10日）
- 留学生オリエンテーション（10月18日）
- 日本語研修コース授業開始（10月21日）
- 全学補講日本語コース授業開始（10月21日）

11月

- 日本語能力試験対策クラス授業終了（11月27日）

12月

- 平成25年度留学生見学旅行：（於）京都（12月7日）

1月

- 留学生と教職員との交歓会（1月23日）
- 授業終了（1月30日）

2月

- 日本語研修コース修了発表会と修了式（2月18日）

平成26年度

4月

- 短期留学プログラム授業開始（4月7日）
- 日本語能力試験対策クラス授業開始（4月14日）
- 留学生オリエンテーション（4月1日～4月4日）
- 全学補講日本語コース授業開始（4月14日）

5月

- 福井大学祭文京キャンパス（5月30日～6月1日）

7月

- 日本語能力試験対策クラス授業終了（7月4日）
- 福井大学サマープログラム（7月13日～7月26日）
- 授業終了（7月30日）

9月

- 日本語能力試験対策クラス授業開始（9月10日）
- 留学生オリエンテーション（9月26日～9月30日）

10月

- 短期留学プログラム授業開始（10月1日）
- 福井大学留学生就職支援プログラム 全19回（10月3日～3月20日）
- 日本語研修コース授業開始（10月14日）
- 全学補講日本語コース授業開始（10月14日）

12月

- 日本語能力試験対策クラス授業終了（12月5日）
- 平成26年度留学生見学旅行（12月14日金津創作の森他、12月21日永平寺他）
- グローバル人材育成シンポジウム（12月17日）

1月

- 留学生と教職員との交歓会（1月22日）
- 授業終了（1月28日）

2月

- 日本語研修コース修了発表会と修了式（2月18日）

3月

- 留学生同窓会タイ支部設立10周年記念総会（3月14日）

5. 福井大学国際交流センター規程

平成25年4月1日

福大規程第14号

(趣旨)

第1条 この規程は、福井大学学則（平成16年福大学則第1号）第8条第3項の規定に基づき、福井大学国際交流センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 センターは、福井大学（以下「本学」という。）における教育及び研究の国際交流に関する活動を一体的に実施することにより、本学の理念及び長期目標に沿った総合的かつ効果的な国際交流事業の推進に寄与することを目的とする。

(業務)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の業務を行う。

- (1) 外国人留学生に対する日本語・日本事情教育に関すること。
- (2) 外国人留学生に対する大学院等入学前予備教育に関すること。
- (3) 海外留学希望学生に対する日本文化教育に関すること。
- (4) 外国人留学生教育の充実及び向上のための調査研究に関すること。
- (5) 双方向留学プログラムの企画及び実施に関すること。
- (6) 学内及び地域社会との国際交流推進に関すること。
- (7) 外国人留学生関係ネットワーク構築に関すること。
- (8) 外国人留学生及び海外留学希望学生に対する修学上及び生活上の指導助言に関すること。
- (9) 福井大学留学生会館に関すること。
- (10) 外国の大学等からの研究者等の受入れに関すること。
- (11) 外国の大学等への本学教職員の派遣に関すること。
- (12) 外国の大学等との交流に関すること。
- (13) 国際的研究評価への対応に関すること。
- (14) 国際的な産官学連携に関すること。
- (15) その他前条の目的を達成するために必要な業務に関すること。

(職員)

第4条 センターに次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) 国際交流センター長（以下「センター長」という。）
- (2) 国際交流センター副センター長（以下「副センター長」という。）
- (3) 専任教員
- (4) その他必要な職員

2 前項第1号から第3号までの職員の選考に関する必要な事項は、別に定める。

(職務)

第5条 センター長は、センターの業務を掌理する。

2 副センター長は、センター長の職務を補佐し、センター長に事故があるときは、その職務を代行する。

3 専任教員は、センターの業務を処理する。

4 その他の職員は、センターの業務に従事する。

(部門)

第6条 センターに、次の各号に掲げる部門を置く。

(1) 国際教育部門

(2) 国際連携部門

2 国際教育部門は、第3条に掲げる業務のうち、主として外国人留学生及び学生支援に関する業務を行う。

3 国際連携部門は、第3条に掲げる業務のうち、主として外国の大学等との国際交流に関する業務を行う。

(運営委員会)

第7条 センターの円滑な運営を図るため、福井大学国際交流センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

2 運営委員会に関する必要な事項は、別に定める。

(庶務)

第8条 センターの庶務は、学務部国際課において処理する。

(雑則)

第9条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は別に定める。

附 則

1 この規程は、平成25年4月1日から施行する。

2 福井大学留学生センター規程(平成16年福大規程第46号)は廃止する。

附 則(平成25年6月28日福大規程第40号)

この規程は、平成25年7月1日から施行する。

6. 福井大学短期留学プログラム規程

平成16年4月1日

福大規程第73号

(短期留学プログラムの設置)

第1条 福井大学（以下「本学」という。）に、1年間の特別の教育課程を編成し、主として英語による教育を行う福井大学短期留学プログラム（以下「短期プログラム」という。）を置く。

(短期プログラムの目的)

第2条 短期プログラムは、本学と大学間交流協定又は学部間交流協定を締結している外国の大学等（協定の締結について協議中である大学等を含む。以下「協定校」という。）に在学する学生を受け入れて、当該大学間等の協力及び提携の強化を図るとともに、当該学生が本学において専門分野の知識及び我が国への理解を深めることを目的とする。

(入学資格)

第3条 短期プログラムに基づく学生（以下「短期プログラム留学生」という。）として入学することのできる者は、協定校の学部又は大学院の修士課程に在学している学生で、協定に基づく学生の交流に関する覚書による学生とする。

(受入人数)

第4条 短期プログラム留学生の受入人数は、年度を通じ30人程度とする。

(入学時期)

第5条 短期プログラム留学生の入学時期は、原則として次条に規定する秋学期の初めとする。

(学期)

第6条 学期は、次の2学期とする。

秋学期 10月1日から翌年3月31日まで

春学期 4月1日から9月30日まで

(在学期間)

第7条 短期プログラム留学生の本学における在学期間は協定で定める期間とし、1年以内とする。

(身分等)

第8条 短期プログラム留学生は、本学において特別聴講学生又は特別研究学生としての身分を有するものとする。

2 短期プログラム留学生は、第3条に規定する学部学生にあっては本学関係学部、同条に規定する大学院修士課程の学生にあっては本学関係大学院研究科（修士課程、博士前期課程及び教職大学院の課程に限るものとする。）に所属するものとする。

(出願手続)

第9条 短期プログラム留学生として入学を志願する者は、所定の期日までに、協定校の大学等の長を経て本学の学長（以下「学長」という。）に願い出なければならない。

(選考)

第10条 前条の入学志願者に対しては、福井大学国際交流センター運営委員会（以下「委員会」という。）において選考を行い、学長が合格者を決定する。

2 学長は、前項の規定により合格者を決定するに当たり当該学部又は研究科の教授会の意見を聴くものとする。

(入学許可)

第11条 学長は、前条の合格者のうち、所定の期日までに、所定の入学手続きを完了した者に対し入学を許可する。

(授業科目、履修方法等)

第12条 短期プログラムの授業科目、履修方法等については、別に定める。

(助言教員等)

第13条 短期プログラム留学生には、関係審議機関の議を経て、助言教員又は指導教員を配置するものとする。

2 助言教員又は指導教員は、短期プログラム留学生が履修を希望する授業科目又は希望する研究内容について、指導を行うものとする。

3 前項において、授業科目を履修する場合は、当該授業担当教員の承認を得なければならない。

(成績の評価)

第14条 授業科目の成績の評価は、学期末に行う定期試験と平素の学習状況とによって授業担当教員が行う。ただし、科目によっては定期試験を省略することができる。

2 授業科目の成績の評価は、秀、優、良、可及び不可の評語をもって表し、秀、優、良及び可を合格とし、不可を不合格とする。

(単位の授与等)

第15条 各授業科目の合格者に対しては、所定の単位を与える。

2 当該学部の長又は当該研究科の長は、短期プログラム留学生に対し、履修科目、成績評価及び単位数を記載した成績証明書を交付する。

(修了等)

第16条 学長は、第12条に規定する履修方法に基づき1年で30単位以上を修得した短期プログラム留学生に対して、短期プログラム修了を認定し、短期留学プログラム修了証書を授与する。

2 学長は、前項の規定により修了を認定し、修了証書を授与するに当たり関係学部又は研究科の教授会の意見を聴くものとする。

(実施体制)

第17条 短期プログラムの実施は、教育地域科学部、教育学研究科、工学部及び工学研究科の協力を得て、国際交流センターが当たるものとする。

2 短期プログラムの教育課程の編成その他教育に関する重要な事項は、委員会の議を経て関係学部教授会又は大学院研究科委員会で審議するものとする。

(学則等の準用)

第18条 この規程に定めるもののほか、短期プログラム留学生に関し必要な事項は、本学の学則、大学院学則その他学生に関する諸規則等を準用する。

(事務)

第19条 短期プログラムに関する事務は、学務部国際課において処理する。

附 則

- 1 この規程は、平成16年4月1日から施行する。
- 2 平成16年3月31日以前の福井大学において短期プログラム留学生として期間延長又は入学（以下「入学等」という。）の選考等を行い、平成16年4月1日に短期プログラム留学生として入学等を許可された者は、この規程の規定に基づき入学等を許可されたものとみなす。

附 則（平成18年4月28日福大規程第22号）

- 1 この規程は、平成18年4月1日から施行する。
- 2 平成18年3月31日以前の福井大学において短期プログラム留学生として期間延長又は入学（以下「入学等」という。）の選考等を行い、平成18年4月1日に短期プログラム留学生として入学等を許可された者は、この規程の規定に基づき入学等を許可されたものとみなす。

附 則（平成20年3月19日福大規程第66号）

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則（平成21年12月2日福大規程第51号）

この規程は、平成21年12月2日から施行する。

附 則（平成22年4月23日福大規程第30号）

この規程は、平成22年4月23日から施行し、改正後の規定は、平成22年4月1日から適用する。

附 則（平成24年3月19日福大規程第45号）

この規程は、平成24年10月1日から施行する。

附 則（平成25年2月20日福大規程第17号）

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

附 則（平成25年6月28日福大規程第39号）

この規程は、平成25年7月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

7. 福井大学国際交流センター紀要投稿規定

平成26年4月1日

1. 投稿資格：福井大学国際交流センター所属教員（非常勤を含む）及び当センターにおいて適当と認められた者とする。
2. 内 容：未発表のものであって日本語・日本事情教育、日本語学、留学生教育、異文化交流、その他当センターにおいて投稿を受けるにふさわしいと認められる内容とする。
3. 発表形態：研究論文及び研究報告、書評とする。
4. 書 式：投稿原稿は文字量でB5用紙で40字×30行で10枚程度とし、英文の場合はB5ダブルスペース25枚以内とする。ただし、図表・参考資料・参考文献・注等はこの範囲に含まない。注は文末注とする。
 - ・引用文献・参考文献は、著者－発行年－題目－雑誌等の名称－巻・号－記載ページの順に記載する。
【例】福井太郎（2001）『福井の歴史』黒龍出版 pp.30-31（著書の場合）
文京花子（2004）「北陸の自然」『日本××大学紀要』vol.22、pp.12-16.
（論文の場合）
 - ・注－参考文献の順に配置すること。
 - ・なお、原稿提出時に原稿内容をUSB（テキスト形式）に収録し原稿に添えて提出すること。
5. 要 旨：発表する本文が和文の場合は、論文冒頭に和文による要旨（400字以内）とキーワード（5語以内）を、論文末に英文による要旨（B5用紙を用い200語程度－テキスト形式）を添付すること。また、本文が英文の場合は、論文冒頭に英文による要旨（300語以内）とキーワード（5語以内）を、論文末に和文による要旨（300字程度）を添付すること。
6. 審 査：投稿された原稿は、当センターが委嘱した査読者により査読を受ける。
7. 採 否：原稿の採否は査読者の意見を参考に当センターで審議の上決定する。
8. 著 作 権：投稿された論文の著作権は本センターに帰属する。ただし、論文の著者は、その著作論文について、その内容を転載できるものとする。また、著作権に関して問題が発生した場合、本センターは著者との協議によりその処理を決定するものとする。
9. 提 出 先：〒910-8507 福井市文京3丁目9番1号 福井大学国際交流センター
紀要編集委員 膽吹 覚 Tel&Fax 0776-27-8023（膽吹教員室直通）

8. 国際交流センター専任教員会議 議事録（平成26年度）

	主要議題及び報告
第1回 (4月10日)	1. 国際交流センター自己点検評価報告書の作成時期について 2. 国際交流センター外部評価委員会の設置について 報告1. 国際交流センター紀要の年報（25年度分）の原稿締め切り：7月末日 報告2. 2013年度前期日能試験対策講座現況報告
第2回 (5月15日)	1. 国際交流センターHPについて 2. 『(26.7) 福井大学サマープログラム（対象：浙江理工大）』の開講案 3. 山中教員後任について 4. 日本語プログラム作成について 報告1. 安全衛生自主点検について
第3回 (7月3日)	1. 2014年度後期国際交流センター時間割について 2. 後期PTについて 3. 後期PT実施および後期センター授業開始時期について 4. 9月開講「日本語能力試験対策講座」について 5. 専任会議議長交代（9月～） 6. 日本語初級クラスのシラバス（英語表記）について 報告1. サマープログラム（7/13～7/26） 報告2. ゾンタ留学生論文募集の周知（学内メ切10月17日）
第4回 (9月4日)	1. 後期センターPT（案）について 2. 日本語研修コース授業開始日について 3. オリエンテーションについて 4. 全学日本語コース成績通知について 5. 平成27年度非常勤講師採用計画の作成方針（案）について 報告1. 日本語研修コース，日本語研修特別コース所属学生情報 報告2. 平成26年7月実施の日本語能力試験結果
第5回 (11月6日)	1. 平成25年度国際交流センター予算執行報告および平成26年度国際交流センター予算計画について 2. 自己点検・評価及び外部評価の日程（案）について 報告1. 平成27年度非常勤講師採用計画の作成方針（案）の確認 報告2. 「国際交流センター教員評価項目・評価基準」作成中間報告報告3. 西安理工大学「さくらサイエンスプラン」初等日本語講座
第6回 (12月11日)	1. 外部評価委員の選出について 2. 平成27年（2015年）度前期国際交流センター時間割（案）について 3. 平成25年度国際交流センター予算執行報告および平成26年度国際交流センター予算執行計画について 4. 平成27年度日本語能力試験対策講座について 報告1. 平成26年度日本語能力試験対策講座について

<p>第7回 (1月8日)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 平成27年度共通教育非常勤講師任用計画書について 2. 平成27年(2015)度前期国際交流センター時間割(案)について 3. 教員個人評価スケジュールについて 4. 平成26年度第2回国立大学法人留学生指導研究協議会兼第42回大阪大学留学生教育・支援協議会(2/5) 5. リングラフ(印刷機)について
<p>第8回 (2月12日)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 平成27年度前期国際交流センター授業開講日とプレイスメントテストについて 2. 日本語能力試験対策講座の申込みについて 3. 保有個人情報の点検リストについて 4. 平成27年度非常勤講師任用計画書について <p>報告1. 自己点検評価報告書の中島先生担当執筆分について</p> <p>報告2. 外部評価外部委員を次回の専任会議で決定する</p> <p>報告3. 共通教育第二外国語の単位(日本語も含む)が2単位から1単位になる</p>
<p>第9回 (3月5日)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 外部評価委員の推薦について 2. 日本語能力試験の団体申込みについて 3. 日本語研修コース成績評価について 4. 交換留学生PTについて 5. 福井大学人材キャリア開発支援センター(CCDS)について 6. BJTについて <p>報告1. オリエンテーション(3/31, 4/1, 4/2)</p> <p>報告2. 上海浙江理工大サマープログラムを来年度も実施予定</p> <p>報告3. 共通教育非常勤講師として敷田先生と市村先生が承認された</p>

9. 福井大学留学生同窓会登録用紙 兼「こころねっと」向けメッセージ及び住所変更届け用紙

(Form for University of Fukui Alumni Society Registration-cum-Message or Change of Address)

Mail to: Yoshinobu Torao, Professor, International Center, University of Fukui

3-9-1 Bunkyo , Fukui, Japan 910-8507 Tel/Fax 0776-27-8903,

E-mail: ytorao@u-fukui.ac.jp

氏名(Name)			
自宅 (Residence)	住所 (Address):		
	Tel:	Fax:	E-mail:
事務所 (Office)	事務所名(Name of Office/Institution):		
	住所 (Address):		
	Tel:	Fax:	E-mail:
福井大学 (University of Fukui)	在籍期間(Period of Study):		
	在籍学部名等(Name of Dept. etc.):		
	専攻(Major Field):		
通信欄(News or Message from you)			
<p>確認 : 通信欄に書かれたことを「こころねっと」に掲載してもいいですか。 Confirmation: May we print your news or message in our "Kokoronet" ? ⇒ (はい / Yes, いいえ / No)</p>			
提案・要望等 (Any Request or Suggestions?)			
<p>確認 : ここに書かれたことは「こころねっと」に掲載しません。 Confirmation: We will not print your request or suggestions here in our "Kokoronet"</p>			
確認 Confirmation	<p>あなたのe-mail アドレスを「こころねっと」に掲載してもいいですか。 May we print your e-mail address in our "Kokoronet" ? ⇒ (はい / Yes, いいえ / No)</p>		

資料 3

1. 教員個人データ (虎尾 憲史)…………… 141
2. 教員個人データ (小幡 浩司)…………… 143
3. 教員個人データ (桑原 陽子)…………… 145
4. 教員個人データ (膽吹 覚)…………… 149

虎尾 憲史 TORAO YOSHINOBU

【個人情報】

着任年月	専門分野	研究内容	所属学会
2014.4	日本語教育	語彙（漢字語）指導法、専門教育のための日本語教育、地域国際化支援	日本語教育学会、日本語教育方法研究会、台湾日本語文学会、台湾日語教育学会、韓国日語日文学会

【担当授業】

授業科目名	開講年度	特記事項
伝統産業 I	2014-2015	短期留学プログラム
工業日本語 I & II	2014-2015	工学部基礎専門科目
工業日本語 II & IV	2014-2015	工学部基礎専門科目
工業日本語特論 I	2014-2015	工学研究科共通科目
工業日本語特論 II	2014-2015	工学研究科共通科目
日本の基礎工学	2014-2015	工学研究科共通科目

【学内運営】

委員会名	役職名	就任年月	退任年月	特記事項
国際交流企画会議専門部会	委員	2014.4	現在に至る	
国際交流センター運営委員会	委員	2014.4	現在に至る	
工学部・工学研究科留学生委員会	委員	2014.4	現在に至る	
工学部・工学研究科情報セキュリティ管理委員会	委員	2014.4	現在に至る	
工学部・工学研究科ネットワーク委員会	委員	2014.4	現在に至る	
安全保障輸出管理委員会	委員	2014.4	現在に至る	
高等教育推進センター学生支援部門会議	委員	2014.4	現在に至る	

【著書】

著書名	著者名	出版社名	発行年月	著書分類	執筆形態	担当ページ	特記事項
틀리기 쉬운 일본 한자어 700 (間違いやすい日本漢字語 700)	洪珉杓	韓国文化社	2012.6	参考書、学習教材	정답 및 해설 (正答および解説) の項を監修	計104頁	

【口頭発表】

発表題目	発表者名	応募・招待	発表学会名等	主催者名	発表年月	査読有無	特記事項
韓国語母語学習者の作文に見られる「ながら」の誤用分析	虎尾憲史	応募	韓国日語日文学会2012年冬季国際学術大会	韓国日語日文学会	2012.12	有	

【講演会】

講演会名	題目	主催者名	開催年月	特記事項
平成26年度多文化共生セミナー第1回	「HAFU」上映会とパネルディスカッション	ふくい市民国際交流協会	2014.9	パネルディスカッション進行、とりまとめ
平成26年度多文化共生セミナー第2回	「世界の国々と比べよう、日本」	ふくい市民国際交流協会	2014.11	西出有由美氏（JICA北陸）との共同講演

【学外運営】

運営分類	役職名	機関名	就任年月	退任年月	特記事項
留学生交流推進	委員	福井県留学生交流推進協議会	2014.4	現在に至る	

【会議運営】

会議・講演会名	役職名	主催者名	開催年月	特記事項
2010年度第1回中等教育機関日本語教師研修会「日本語の継続学習－高校から大学へ－」	企画・運営、及びコーディネーター	(公財)交流協会台北事務所日本語センター	2010.5	台湾勤務中の業務
2010年度高等学校日本語教材、及び進捗検討会議	講師兼司会進行、とりまとめ	高等学校第二外国語科センター、(公財)交流協会台北事務所	2010.5	同上
2010年度第2回中等教育機関日本語教師研修会「高校での教室活動あれこれ」	企画・運営、及びコーディネーター	(公財)交流協会台北事務所日本語センター	2010.7	同上
2010年度第3回中等教育機関日本語教師研修会「台湾人日本語教師本邦研修参加者報告会」	企画・運営、及びコーディネーター	(公財)交流協会台北事務所日本語センター	2010.8	同上
2010年度第2回日本語教育巡回研修会「自律学習能力の育成を図る教室活動－モニタリングと自己評価の基準確立を目指して－」	企画・運営、及びコーディネーター	(公財)交流協会台北事務所日本語センター	2010.8	同上

2010年度第4回中等教育機関日本語教師研修会「高校で文法をどう教えるか」	企画・運営、及びコーディネーター	(公財)交流協会台北事務所日本語センター	2010.10	台湾勤務中の業務
2010年度第4回日本語教育巡回研修会「中上級学習者指導の留意点ー実は難しい 初級で学んだ文法と語彙ー」	企画・運営、及びコーディネーター	(公財)交流協会台北事務所日本語センター	2011.1	同上
2011年度第1回中等教育機関日本語教師研修会「高校で読解をどう教えるか」	企画・運営、及びコーディネーター	(公財)交流協会台北事務所日本語センター	2011.4	同上
2011年度第2回中等教育機関日本語教師研修会「学習者の積極的な参加を促す副教材」	企画・運営、及びコーディネーター	(公財)交流協会台北事務所日本語センター	2011.7	同上

【社会活動】

社会活動名	社会活動内容	開始年月	終了年月	特記事項
台湾全国大学生日本語スピーチ・コンテスト	審査員	2007.11	2011.7	台湾勤務中の活動
日本航空杯台湾全国大学生日本語スピーチ・コンテスト	審査員	2007.12	2011.7	同上
台湾全国大学生日本語アフレコ・コンテスト	審査員	2008.3	2011.7	同上
台湾日本研究学会主催全国大学生日本語スピーチ・コンテスト	審査員	2009.11	2011.7	同上
台湾全国大学生日本語ディベート大会	審査員	2010.5	2011.7	同上
台北市東方高級工商職業学校日本語の歌コンテスト	審査員	2011.4	2011.7	同上

小幡 浩司 KOBATA KOJI

【個人情報】

着任年月	専門分野	研究内容	所属学会
2013.9	国際教育	国際交流、大学の国際化とグローバル人材育成 チューニング (TUNING)	大学行政管理学会

【担当授業】

授業科目名	開講年度	特記事項
多文化コミュニケーションA	2013-2014	共通教育科目
多文化コミュニケーションB	2013-2014	共通教育科目
多文化コミュニケーションC	2013-2014	共通教育科目

【学内運営】

組織・委員会名	役職名	就任年月	退任年月
全学教育改革推進機構	機構長補佐	2015.2	現在に至る
全学グローバル人材育成推進委員会 海外研修部会	委員	2014.4	現在に至る
国際交流センター運営委員会	委員	2013.9	現在に至る
語学センター運営委員会	委員	2013.9	現在に至る
工学部及び工学研究グローバル人材育成推進事業実施委員会	委員	2014.4	現在に至る
工学部及び大学院工学研究科英語教育実施運営委員会	委員	2014.4	現在に至る

【論文】

論文題名	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称
国際教養大学の大学間交流－単位互換方式の確立	単著	平成19年12月 2007	独立行政法人日本学生支援機構 『留学交流』 Vol. 19 No. 12 December 2007 pp.14-17
大学の国際化－交換留学制度とその狙い	単著	平成23年3月 2011	国際連携プログラム開発推進委員会 『先進事例に学ぶ：教育のグローバル化』 報告書 pp.6-32, pp95-99
国際化：国際教養大学の場合	単著	平成24年9月 2012	独立行政法人日本学生支援機構 『留学交流』ウェブマガジン

【口頭発表】

発表題目	発表者	応募・招待	開催年月	発表学会名等
「日本の高等教育の国際化の最新事例－国際教養大学の国際化」	小幡浩司	招待	平成19年10月	第1回 UMAP Vice President Forum (Bangkok, Thailand)
「大学の国際化－交換留学制度とその狙い」	小幡浩司	招待	平成21年10月	KCAI国際シンポジウム（国際連携プログラム開発推進委員会主催）
「海外の大学との戦略的交渉－学生派遣・受入・提携・単位互換・国際交流制度－目的と手段として」	小幡浩司	招待	平成22年3月	「大学のグローバル化に関する職員研修」立命館アジア・太平洋大学にて開催

「USCO留学生交流」	小幡浩司	招待	平成23年12月	独立行政法人 日本学生支援機構・UMAP日本国内委員会事務局主催 「UMAP学生交流オンラインシステムに関する説明会」
「全員留学の危機管理」	小幡浩司	招待	平成25年6月	第1回早稲田大学・同志社大学共同SDワークショップ
「USCO留学生交流－国際教養大学の場合」	小幡浩司	招待	平成25年7月	独立行政法人 日本学生支援機構・UMAP日本国内委員会事務局主催 「UMAP学生交流オンラインシステムに関する説明会」

【講演会】

講演会名	題目	主催者名	開催年月	特記事項
UMAP国際理事会 (バンコク・タイ)	「コンソーシアム型交換留学制度の問題点」	UMAP国際事務局	平成21年 10月	パネリスト
UMAP国際大会 (大阪商業大学)	Current Trends in Student Mobility and Internationalization of Curriculum - Impact and Future Prospects-	UMAP日本国内委員会	平成26年 9月	総合司会

【学外運営】

運営分類	役職名	機関名	就任年月	退任年月
国際交流	UMAP国内専門委員	UMAP日本国内委員会 日本学生支援機構	2014.6	現在に至る

桑原 陽子 KUWABARA YOKO

【個人情報】

着任年月	専門分野	研究内容	所属学会
2004.7	日本語教育 第二言語習得	日本語学習者の読みのプロセスの研究と教材開発 非漢字系学習者の文字、語彙学習	日本語教育学会・日本教育心理学会・留学生教育学会・ヨーロッパ日本語教師会

【担当授業】

授業科目名	開講年度	特記事項
日本語（文型・文法）	2010－2014	日本語研修コース科目 2コマ/週
日本語（情報処理）	2010－2014	日本語研修コース科目
日本語（作文）	2013、2014	日本語研修コース科目
日本語（修了発表指導）	2010－2014	日本語研修コース科目

日本語（文型・文法）	2013、2014	日本語研修特別コース科目
日本語初中級	2010－2014	短期留学プログラム科目
はじめての漢字	2013、2014	短期留学プログラム科目
日本語中級	2013、2014	短期留学プログラム科目
日本語上級	2014	短期留学プログラム科目
日本語A	2011、2013	共通教育科目
日本語C	2010、2012、2014	共通教育科目
日本語E	2014	共通教育科目
日本語F	2011、2013	共通教育科目
日本語G	2013	共通教育科目
日本語H	2010、2012、2014	共通教育科目
多文化コミュニケーションC	2011、2012	共通教育科目
専門セミナー	2011	教育地域科学部科目
日本語教育特論	2010－2014	教育学研究科科目
日本語教育特別演習	2010－2014	教育学研究科科目
日本語I	2010－2014	全学日本語コース科目

【学生指導】

年度	学生	留学生（内数）	特記事項
2011	1	0	教育地域科学部地域文化課程異文化交流コース助言教員・卒業論文指導
2010	1	0	教育地域科学部地域文化課程異文化交流コース助言教員・卒業論文指導

【学内運営】

委員会名	役職名	就任年月	退任年月	特記事項
教育地域科学部・教育学研究科留学生委員会	委員	2013.5	現在に至る	
全学留学生委員会	委員	2004.7	現在に至る	
留学生センター運営委員会	委員	2006.4	2013.3	
国際交流センター運営委員会	委員	2013.4	現在に至る	

【外部資金及び学内競争的配分経費】

外部資金の分類	研究題目	代表者名	分担題目名	出資団体名	受入金額(千円)	実施年度	新規・継続の別
競争的配分経費・教育	入門期の日本語学習者のためのかな学習用教材“Japanese KANA workbook”対応音声教材の作製	桑原陽子	代表者	福井大学	200	2011	新規

科学研究費補助金挑戦的萌芽	非漢字系日本語学習者への漢字熟語の意味推測指導のための指導項目収集と整理	桑原陽子	代表者	日本学術振興会	400	2010	新規
科学研究費補助金挑戦的萌芽	非漢字系日本語学習者への漢字熟語の意味推測指導のための指導項目収集と整理	桑原陽子	代表者	日本学術振興会	650	2011	継続
科学研究費補助金挑戦的萌芽	非漢字系日本語学習者への漢字熟語の意味推測指導のための指導項目収集と整理	桑原陽子	代表者	日本学術振興会	650	2012	継続
科学研究費補助金挑戦的萌芽	意味推測課題による非漢字系中上級日本語学習者の漢語動名詞の習得プロセスの分析	桑原陽子	代表者	日本学術振興会	390	2014	新規
科学研究費基盤研究（B）	実践的な読解教育実現のための日本語学習者の読解困難点・読解技術の実証的研究	野田尚史	分担者	日本学術振興会	300	2011	新規
科学研究費基盤研究（B）	実践的な読解教育実現のための日本語学習者の読解困難点・読解技術の実証的研究	野田尚史	分担者	日本学術振興会	300	2012	継続
科学研究費基盤研究（B）	実践的な読解教育実現のための日本語学習者の読解困難点・読解技術の実証的研究	野田尚史	分担者	日本学術振興会	600	2013	継続
科学研究費基盤研究（B）	実践的な読解教育実現のための日本語学習者の読解困難点・読解技術の実証的研究	野田尚史	分担者	日本学術振興会	500	2014	継続
科学研究費基盤研究（A）	コミュニケーションのための日本語ウェブ教材の作成と試用	小林ミナ	分担者	日本学術振興会	200	2012	新規
科学研究費基盤研究（A）	コミュニケーションのための日本語ウェブ教材の作成と試用	小林ミナ	分担者	日本学術振興会	200	2013	継続

【論文】

論文題名	著者名	応募・招待	掲載誌名 (または会議名)	発行年月	編者名	論文分類	査読有無
地域在住外国人に対する日本語ボランティア養成講座における脱「日本語教師養成講座」の試み	桑原陽子	応募	福井大学留学生センター紀要、第6号、p.11-20.	2011.3	福井大学留学生センター	学術論文	有
漢字2字熟語の意味推測に及ぼす語構成に関する知識の影響—主要部の位置との関わりから—	桑原陽子	応募	福井大学留学生センター紀要、第7号、p.1-10.	2012.3	福井大学留学生センター	学術論文	有
漢字2字熟語の意味の透明性の調査	桑原陽子	応募	福井大学留学生センター紀要、第8号、p.1-14.	2013.3	福井大学留学生センター	学術論文	有

中国人留学生と日本人大学生の断りのEメールの比較	濱田美和 古本裕子 桑原陽子 深澤のぞみ	応募	富山大学人間発達科学部紀要、第8巻 第1号、p.221-233.	2013.3	富山大学人間発達科学部	学術論文	有
非漢字系上級日本語学習者による漢語動名詞の意味推測の困難点ー「する」の有無が推測に及ぼす影響	桑原陽子	応募	福井大学国際交流センター紀要、創刊号、p.1-12.	2014.11	福井大学国際交流センター	学術論文	有
中国語系初級日本語学習者がホテル検索サイトを読むときの困難点	桑原陽子 山口美佳	応募	国立国語研究所論集8、p.109-127.	2014.11	国立国語研究所	学術論文	有

【口頭発表】

発表題目	発表者名	応募・招待	発表学会名等	主催者名	発表年月	査読有無	特記事項
コミュニケーション指向の初級読解教材作成のためのニーズ調査とその分析	桑原陽子 野田尚史 内藤満地子 今井多衣子 北浦百代	応募	2010年世界日本語教育大会(台湾)	日本語教育学会	2010.8	有	
断りのEメールの分析ー日本人大学生と中国人留学生の比較ー	濱田美和 古本祐子 深澤のぞみ 桑原陽子	応募	2011世界日本語教育研究大会(天津)	日本語教育学会	2011.8	有	
文章表現の分析と学習者の読解困難点調査に基づく読解教材の作成	野田尚史 桑原陽子 播磨涼子	応募	2012年日本語教育国際研究大会(名古屋)	日本語教育学会	2012.8	有	
保育園の連絡ノートを読むために必要な語彙・表現についての一考察ー保育士側からの連絡部分の分析からー	桑原陽子	応募	2012年日本語教育国際研究大会(名古屋)	日本語教育学会	2012.8	有	
日本語学習者の読解過程ー教師が考えているのとは違う学習者の実態ー	野田尚史 桑原陽子 フォード 丹羽順子 藤原未雪	応募	第17回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム(マドリッド)	ヨーロッパ日本語教師会	2013.9	有	
非漢字系上級学習者の漢語動名詞の意味推測の困難点	桑原陽子	応募	2013年度日本語教育学会秋季大会(大阪)	日本語教育学会	2013.10	有	
ヨーロッパの上級日本語学習者によるウェブサイトのクチコミの解釈ー文化の相違による解釈の違いー	野田尚史 穴井幸子 桑原陽子 白石実 中島晶子 村田裕美子	応募	ヨーロッパ日本語教育シンポジウム2014(スロベニア)	ヨーロッパ日本語教師会	2014.9	有	

断りのEメールにおける理由の述べ方ー中国人留学生を例にー	深澤のぞみ 桑原陽子 濱田美和 古本裕子	応募	2014年度日本語教育学会秋季(富山)	日本語教育学会	2014.10	有	
------------------------------	-------------------------------	----	---------------------	---------	---------	---	--

【社会活動】

社会活動名	社会活動内容	開始年月	終了年月	特記事項
福井県国際交流協会日本語ボランティア入門講座基礎Ⅰ・基礎Ⅱ	講師	2010.5	2014.11	全8回/年(毎年開講)
NPOインターナショナルさかい日本語指導ボランティア養成講座基礎Ⅱ	講師	2010.4	2010.5	全7回
NPOインターナショナルさかい日本語指導ボランティア養成講座	講師	2014.2	2014.3	全4回
福井県要約筆記者移行研修事業講師「日本語の基礎知識」	講師	2013.12	2015.1	1回/年
平成26年度福井県要約筆記者養成事業特別講師「日本語の基礎知識」	講師	2014.5.24 2014.5.29		2回/年
福井県教員免許状更新講習「小学校国語科授業力育成講座ー広がりのある学習活動に向けてー」 担当科目「日本語教育の知見を生かした言語活動の構想」	講師	2009	2012	1回/年(毎年開講)

臆吹 覚 IBUKI SATORU

【個人情報】

着任年月	専門分野	研究内容	所属学会
2002.10	日本文学	①『越前若狭いろはかるた』を利用した留学生対象科目の研究 ②近世随筆の研究 ③日本古典籍の研究	日本語教育学会 鈴屋学会 日本近世文学会 仏教文学会

【担当授業】

授業科目名	開講年度	特記事項
日本語(文化)	2010-2014	日本語研修コース科目
日本語(特別演習)	2010-2014	日本語研修コース科目
日本語初中級	2010-2014	短期留学プログラム科目
日本語中級	2010-2014	短期留学プログラム科目
日本語上級	2010-2014	短期留学プログラム科目
日本事情1	2013-2014	短期留学プログラム科目

日本事情 2	2010－2014	短期留学プログラム科目
日本の文化	2010－2014	短期留学プログラム科目
日本語 B	2010、2012、2014	共通教育科目
日本語 D	2011、2013	共通教育科目
日本語 E	2011、2013	共通教育科目
日本語 G	2010、2012、2014	共通教育科目
日本の文化	2010－2014	共通教育科目
日本事情 A	2010－2014	共通教育科目
日本事情 B	2013－2014	共通教育科目
専門セミナー（卒業論文指導）	2010	教育地域科学部科目
国文学特別研究 I	2010－2014	大学院教育学研究科科目
国文学特論 I	2010－2014	大学院教育学研究科科目
課題研究（修士論文指導）	2013－2014	大学院教育学研究科科目

【学生指導】

年度	学生数	留学生（内数）	特記事項
2014	8	4	教育学研究科教科教育専攻国語科領域助言教員・修士論文指導
2013	4	1	教育学研究科教科教育専攻国語科領域助言教員・修士論文指導
2012	2	2	教育学研究科教科教育専攻国語科領域助言教員・修士論文指導
2011	2	2	教育学研究科教科教育専攻国語科領域助言教員・修士論文指導
2010	4	2	教育地域科学部地域文化課程異文化交流コース助言教員・卒業論文指導、並びに教育学研究科教科教育専攻国語科領域助言教員・修士論文指導

【学内運営】

委員会名	役職名	就任年月	退任年月	特記事項
国際交流センター運営委員会	委員	2013.4		
地域環境研究教育センター全体会議	委員	2012.4	2014.3	
教育地域科学部・教育学研究科留学生委員会	委員	2009.4	2011.4	
留学生センター運営委員会	委員	2003.4	2013.3	
全学留学生委員会	委員	2002.10	2013.3	

【外部資金及び学内競争的配分経費】

外部資金の分類	研究題目	代表者名	分担 題目名	出資 団体名	受入 金額 (千円)	実施 年度	新規・ 継続 の別
科学研究費補助金	大行寺信暁に関する書誌学的研究	膽吹 覚	代表者	日本学術振興会	520	2014	新規
科学研究費補助金	彦根藩井伊家の蔵書目録に関する基礎的研究	膽吹 覚	代表者	日本学術振興会	650	2012	継続
科学研究費補助金	彦根藩井伊家の蔵書目録に関する基礎的研究	膽吹 覚	代表者	日本学術振興会	650	2011	継続
科学研究費補助金	彦根藩井伊家の蔵書目録に関する基礎的研究	膽吹 覚	代表者	日本学術振興会	1,040	2010	新規

【論文】

論文題名	著者名	応募・ 招待	掲載誌名 (または会議名)	発行 年月	編者名	論文分類	査読 有無
福井大学附属図書館所蔵の古典籍(9) 『絵本霞の海』－上方 浄瑠璃とおどけ開帳－	膽吹覚	招待	図書館forum、 12、pp7-8	2015.3	福井大学 附属図書 館	資料解説	有
『玉勝間巻八「ふるき 物またそのかたちをい つはり作る事」並びに 巻九「檜垣姫が事」考 －近世後期古典学に於 ける随筆と註釈－	膽吹覚	応募	国文学論叢、 60輯、pp15-32	2015.2	龍谷大学 国文学会	学術論文	有
三岡八郎宛ウィリア ム・エリオット・グリ フィス書状再考	膽吹覚	応募	福井大学国際交流 センター紀要、 1号、pp13-14	2014.11	福井大学 国際交流 センター	研究ノート	有
福井大学附属図書館所蔵の古典籍(8) 釋祐可『越前名所しる べ草』	膽吹覚	招待	図書館forum、 11、pp7-8	2014.3	福井大学 附属図書 館	資料解説	無
〔翻刻〕正定閣述作『嫁 威谷物語』(弘化四年 版)	膽吹覚	応募	国語国文学、 52号、pp61-67	2014.3	福井大学 言語文化 学会	資料解説	無
『玉勝間』巻九「石見 国なるしづの岩屋」に ついて	膽吹覚	応募	国文学論叢、 59輯pp1-14	2014.2	龍谷大学 国文学会	学医術論文	有
『玉勝間』の巻頭言に 関する考察(後編)	膽吹覚	応募	福井大学教育地域 科学部紀要、 4号、pp1-19	2014.1	福井大学 教育地域 科学部	学術論文	有

福井大学附属図書館所蔵の古典籍（7） 西門蘭溪『菱実記聞』 －勝山藩小笠原家史料 の考証－	膽吹覚	招待	図書館forum、10、 pp7-8	2013.3	福井大学 附属図書館	資料解説	無
『嫁威谷物語』論－ 『二十四輩順拝図会』 との比較を中心に－	膽吹覚	応募	国語国文学、52号、 pp1-14	2013.3	福井大学 言語文化 学会	学術論文	無
『玉勝間』巻三「こた つといふ物のうた」に ついて	膽吹覚	応募	国文学論叢、58輯、 pp52-56	2013.2	龍谷大学 国文学会	学術論文	有
日本事情におけるアク ティブ・ラーニング－ 『越前若狭いろはかる た』を使用した授業の 紹介－	膽吹覚	招待	福井大学共通教育 フォーラム、15号、 pp2-3	2013.1	福井大学 共通教育 委員会	実践報告	無
『玉勝間』の巻頭言に 関する考察（前編）	膽吹覚	応募	福井大学教育地域 科学部紀要3号、 pp1-15	2013.1	福井大学 教育地域 科学部	学術論文	有
福井大学附属図書館所 蔵の古典籍（6） ウィリアム・エリオッ ト・グリフィス書状（三 岡八郎宛）	膽吹覚	招待	図書館forum、9、 pp7-9	2012.3	福井大学 附属図書 館	資料解説	無
『嫁威谷物語』の諸本 と作者について	膽吹覚	応募	国語国文学、51号、 pp1-15	2012.3	福井大学 言語文化 学会	学術論文	無
福井大学総合図書館新 収蔵品、ウィリアム・ エリオット・グリフィ ス書状－グリフィスの 師範学校創設に関する 提言について－	膽吹覚	応募	福井大学教育地域 科学部紀要2号、 pp1-15	2012.1	福井大学 教育地域 科学部	学術論文	有
福井大学附属図書館所 蔵の古典籍（6） 田安德川家旧蔵本『詩 人玉屑』	膽吹覚	招待	図書館forum、9、 pp7-8	2011.3	福井大学 附属図書 館	資料解説	無

【口頭発表】

発表題目	発表者名	応募・招待	発表学会名等	主催者名	発表年月	査読有無	特記事項
本居宣長『借書簿』考－鈴屋 における宣長蔵書の利用に 関する研究－	膽吹 覚	応募	鈴屋学会	鈴屋学会	2013.4	有	

【講演会】

講演会名	題目	主催者名	開催年月	特記事項
お雇い外国人グリフィス展企画	グリフィスの三岡八郎宛書簡	福井大学	2011.12	ワークショップ・講師
福井大学公開講座	福井の名所今昔－金津から吉崎へ－	福井大学	2011.10	講師
福井大学公開講座	福井の名所今昔－三国－	福井大学	2010.7	講師

福井大学国際交流センター
自己点検・評価報告書
平成22～26年度

平成27年12月発行

編集兼
発行者 福井大学国際交流センター
〒910-8507 福井市文京3丁目9番1号
電話 0776-27-8021

印刷所 株式会社 エクシート
〒919-0482 福井県坂井市春江町中庄61-32
電話 0776-51-5678
